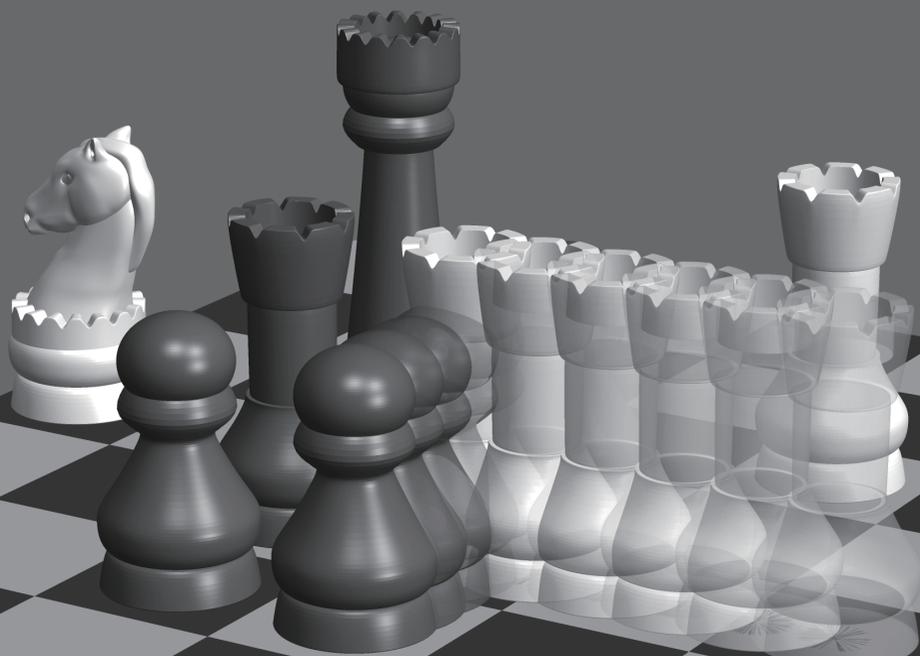


PROBLEM PARADISE

Issue 97

Vol.25

January-March 2022



Journal of Japanese Chess Problem Society

Contents

Orthodox	……1
Endgame	……6
Helpmate	……10
Selfmate	……23
Fairy	……25
Retro	……34
Shogi	……36
Informal Tourney Award Fairies 2014	……40
第 18 回 International Solving Contest	……52
出口信男の世界 (4) (泰永三二郎)	……61
『詰将棋の世界』出版に至るまで (斎藤夏雄)	……67
私のお気に入り (第 9 回)	
「詰め」と「指し」と「将棋」と「チェス」 (真鍋浩)	……79
Book Sale	……82
Definitions	……84
第 95 号解答成績	……88

各セクションごと、および全体で、1 題 5 点として成績を集計します。オーソドックスの #2 以外の作品については、主要変化と思われるものをすべて記入してください。短評大歓迎。各セクションごとに別紙を使用し、それぞれに氏名を記入すること。締め切りは **2022 年 5 月 15 日** 消印有効。宛先は Solution Editor の若島まで。また、作品の投稿は直接に担当者へ。

All solutions should be sent to the Solution Editor Tadashi Wakashima (Niina 7-8-13, Minoh-shi, Osaka 562-0005, Japan) before **May 15, 2022**. Please write down your solutions of each section in separate sheets. Solutions and comments by e-mail (tadashi@hcn.zaq.ne.jp) are most welcome. All originals should be submitted to the sub-editors. Their names and (e-mail) addresses are given on the back cover. Computer-tested problems are indicated by C+.

第 97 号をお届けします。今号は、編集者の個人的な事情で、発行がいつもより 2 週間ほど遅れてしまったこととお詫びします。

この号も 88 ページと大盤振る舞いになりました。まだ積み残しの原稿があるほどで、嬉しく思っています。

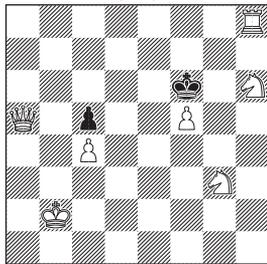
Zoom で開催している、プロブレムと詰将棋の会合「プロバラ会」は、プロバラ本体の発行スケジュールに合わせて、2、5、8、11 月の第 1 日曜に開催しています。

今回は 5 月 1 日 (日) の午後 1 時から 6 時までになります。新しく参加を希望される方は、若島までメールなどでご連絡ください。

世界を震撼させたロシアのウクライナ侵略について、この原稿を書いている時点で、WFCC でも対応を協議している最中です。ロシアおよびベラルーシに対して厳しい措置が取られる見込みで、発行しているプロブレム雑誌からその両国の作家の作品を締め出すことを決定した国もあります。この件に関しては、また次号でご報告することになると思います。

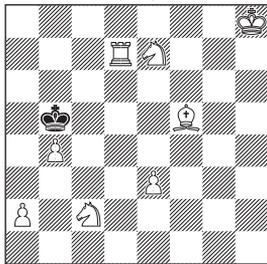
なお、巻末のページに、重要なお知らせを掲載しています。ぜひお読みください。

D601 David Mealor
C+ (UK)



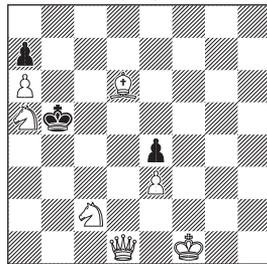
#2 (7+2)

D602 David Mealor
C+ (UK)



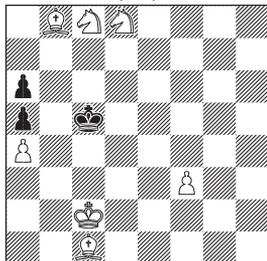
#2 (8+1)

D603 David Mealor
C+ (UK)



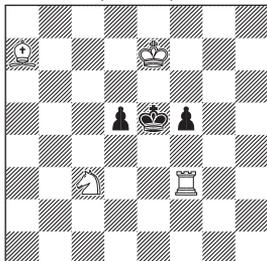
#2 (7+3)

D604 David Mealor
C+ (UK)



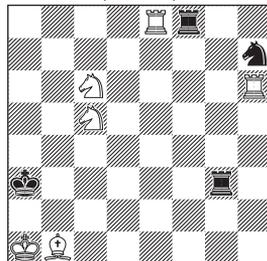
#2 (7+3)

D605 Eligiusz Zimmer
C+ (Poland)



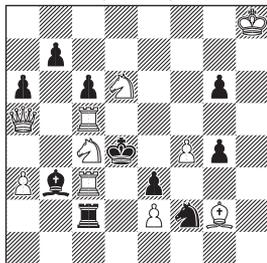
#2 (4+3)

D606 Marian Frąk
C+ (Poland)



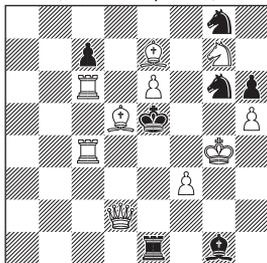
#2 vvv (6+4)

D607 Aleksandr Pankratyev
C+ (Russia)



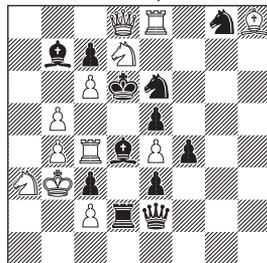
#2 vv (10+10)

D608 Miroslav Svitek
C+ (Czech Republic)



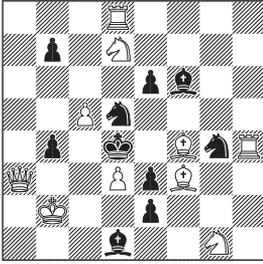
#2 v (10+7)

D609 Miroslav Svitek
C+ (Czech Republic)



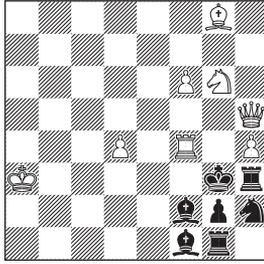
#2 (12+12)

D610 Mihaiu Cioflanca
C+ (Romania)



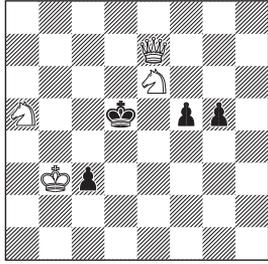
#3 (10+10)

D611 Leonid Makaronez
C+ (Israel)



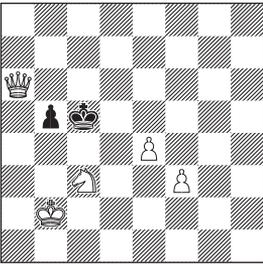
#3 (8+7)

D612 Petrašin Petrašinović
C+ (Serbia)



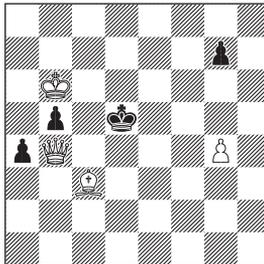
#3 (4+4)

D613 Petrašin Petrašinović
C+ (Serbia)



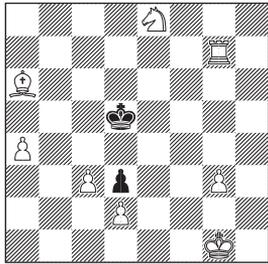
#3 (5+2)

D614 Steven Dowd
C+ (USA)



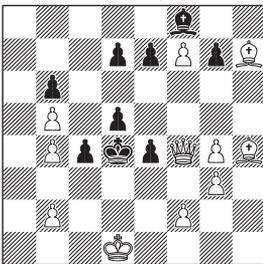
#4 (4+4)

D615 Steven Dowd
C+ (USA)



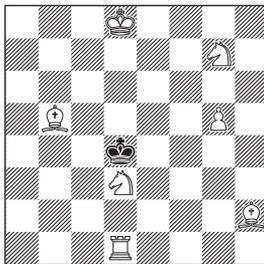
#4 (8+2)

D616 Leonid Makaronez
C+ (Israel)



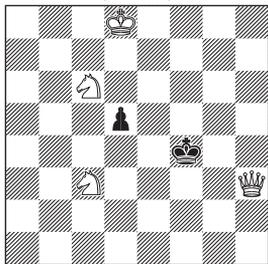
#4 (11+9)

D617 Petrašin Petrašinović
C+ (Serbia)



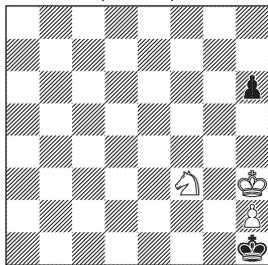
#4 (7+1)

D618 Petrašin Petrašinović
C+ (Serbia)



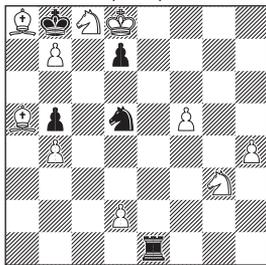
#4 (4+2)

D619 Marian Frąk
C+ (Poland)



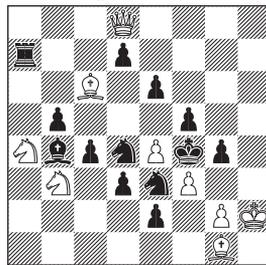
#7 (3+2)

D620 Steven Dowd
C+ (USA)



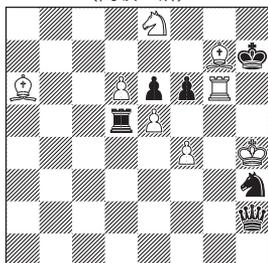
#7 (10+5)

D621 Ken Kosaka
(高坂 研)



#14 (9+13)

D622 Ken Kosaka
(高坂 研)



#17 (8+6)

Orthodox

Orthodox Editor

Yuji Kikuta (菊田裕司)

Judge 2022-2023

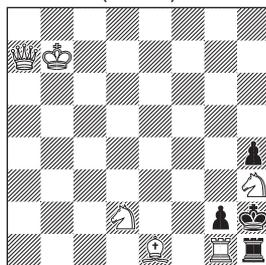
To be announced

☆今月は 22 題と多めです。手数が長くても D619, D621, D622 は易しいですよ。

Issue 95 (D578-585)

☆まず初めにお詫びを。95 号 P1 に 94 号で出題済みの D565-D573 が混入してしまいました。混乱させてしまい申し訳ございません。

D578 Aleksandr Pankratyev
C+ (Russia)



#2 (6+4)

1.Sf2! waiting

1...Rxcg1/h3/Kg3/kxcg1

2.Qb8/Sg4/Qb8/Sg4#

宮嶋：Q の位置が詰上がり形を暗示していて、

解決を容易にしています。

九尾：h1に利かす手はこれくらいしかないのに、少し時間を取られました。

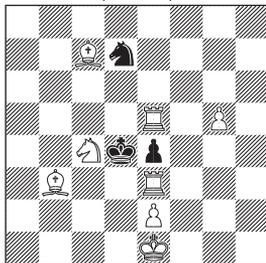
黒川：見慣れた手筋。

太刀岡：Two pairs of variations.

☆ 2通りの flight giving で g1R の紐を外す key はいい感じですが、絶対ともいえます。太刀岡さんのコメント通り、4通りの変化にメイトは2通りで、これが狙いなのかよくわかりません。うまくやれば面白いような気もするのですが、単なる味悪な感じもします。

[○ 11 △ 0 × 0 - 1]

D579 Alexsandr Pankratyev C+ (Russia)



#2

(8+3)

1.Sd6! (2.Sf5#)

1...Kxe3/Kxe5/Sxe5 2.Rxe4/Rxe4/Bb6#

黒川：とりあえずやってみたくなる。真の狙いは Sf5 か

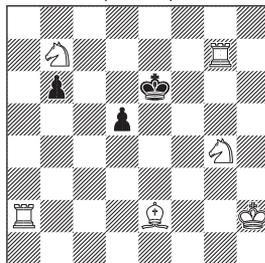
宮嶋：2.Sf5# は鮮やかなフィニッシュです。

九尾：g5のPが怪しい配置。

☆ 1...Kxe3 と 1...Kxe5 の 2つの flight giving key です。2.Bb6の詰上がりはいい感じだと思います。

[○ 11 △ 0 × 0 - 1]

D580 Petrasin Petrasinovic C+ (Serbia)



#3

(6+3)

1.Kg3! (2.Kf4 d4/b5 3.Bc4/Ra6#)

1...d4 2.Bc4+ Kf5 3.Sd6#

1...b5 2.Ra6+ Kf5 3.Bd3#

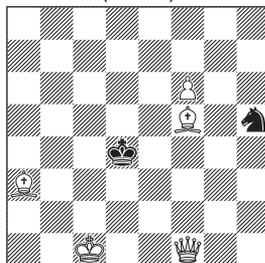
1...Kf5 2.Bd3+ Ke6 3.Re2#

九尾：格好良い手をいろいろ考えたので、ちょっとがっかり。

☆平凡なキーですがかえって見えにくいかもしれません。その後の手順も平凡です。

[○ 4 △ 0 × 1 - 7]

D581 Petrasin Petrasinovic C+ (Serbia)



#3

(5+2)

1.Bg6! (2.Qd3+ Ke5 3.Qd6#)

1...Ke5 2.Qf5+ Kd4 3.Qc5#

1...Kd5 2.Qb5+ Ke6/Kd4 3.Qf5/Qc5#

1...Sf4 2.Qxf4+ Kc3/Kd5 2.Qb4/Qe4#

九尾：Pが大きなヒント。

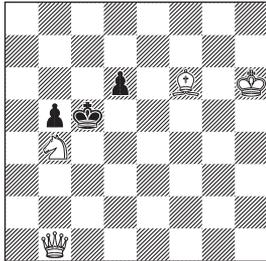
星野：何となく Bg6 だが、Ke6の変化のために限定なんです。

☆ f6Pがないと、1.Bb1 や 1.Bh7 でも詰んでしまいます。Pを置くことによって 1.Bg6 に

限定していますが、ちょっと苦しい配置。

[○ 5 △ 0 × 0 - 7]

D582 Petrasin Petrasinovic
C+ (Serbia)



#4 (4+3)

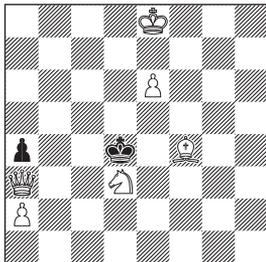
- 1.Bd8! waiting
 1...Kd4 2.Qd3+ Ke5 3.Kg5 (4.Qd5#)
 Ke6 4.Qf5#
 1...Kc4 2.Qb2 d5 3.Be7 waiting d4
 4.Qc2#
 1...d5 2.Qb3 waiting Kd4 3.Bc7 waiting
 3...Kc5/Ke4 4.Qc3/Qd3#
 2...d4 3.Bc7 waiting d3
 4.Qc3#

星野：3つのライン、似ている様で各々異なり面白かった。

☆直接手でなく手待ちが多いので詰ませにくいと思います。

[○ 1 △ 1 × 0 - 10]

D583 Petrasin Petrasinovic
C+ (Serbia)



#4 (6+2)

- 1.Bd6!
 1...Ke4 2.Sf4 Kf5 3.Qg3 (4.Qg6#) Ke4

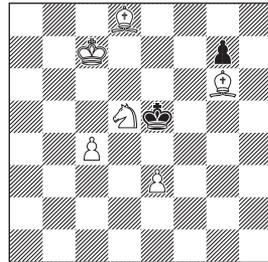
- 4.Qd3#
 1...Kc4 2.Sb4 Kb5 3.Qd3+ Kb6/Ka5
 4.Qa6#
 1...Ke3 2.Sf4+
 2...Kd2 3.Qd3+ Ke1/ Kc1
 4.Qe2#/ Ba3#
 2...Kf2 3.Bc5+ Kf1/Ke1 4.Qc1#
 1...Kd5 2.Qc5+ Ke4 3.Se1 (4.Qe5#)

星野：初手 Se5 がいい線まで行くので、3段目に落とす手は中々考えにくい。

☆ 1...Ke3 の逃げ道を与える初手が見えにくく、その後も難しいと思います。

[○ 2 △ 0 × 0 - 10]

D584 Nikolay Akimov
C+ (Kazakhstan)



#5 (6+2)

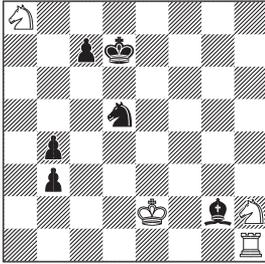
- 1.Be7 Ke6 2.Bc5 Ke5 3.Ba7 Ke6 4.Bb8 Ke5
 5.Kd7#

☆ B を転回して K の陰に持ってきて、K を動かしてメイト。よくあるパターンですが少ない駒数でうまくできていると思います。

[○ 2 △ 0 × 0 - 10]

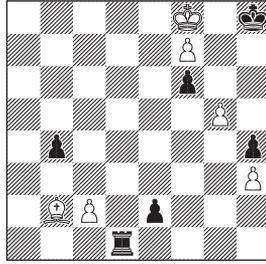
(Continued on p.9)

E189 Peter Krug
(Austria)



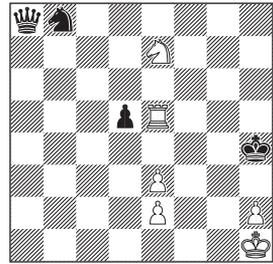
Draw (4+6)

E190 Peter Krug
(Austria)



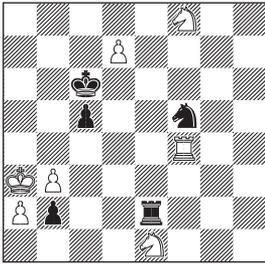
Win (6+6)

E191 Lubos Kekely
Michal Hlinka
(Slovakia)



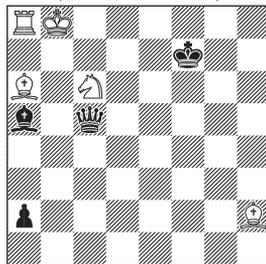
Draw (6+4)

E192 Michal Hlinka
Lubos Kekely
(Slovakia)



Draw (7+5)

E193 Pavel Arestov
Michal Hlinka
(Russia, Slovakia)



Draw (5+4)

Endgame

Endgame Editor

Hiroshi Manabe (真鍋 浩)

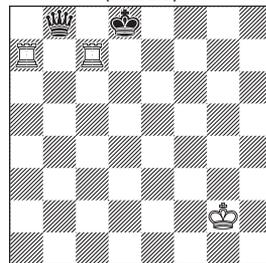
Judge 2022

Mario G. Garcia (Argentina)

今号から新年度に入りました。今号は5問の出題です。E189は導入部は見えやすいと思いますが、黒の強手に慌てず読み切ってください。E190は白Kの動きがテーマの作品です。E191はメイトを見せて網を絞ってください。E192はプロモーションがテーマのようですが、主役はナイトです。E193は黒Qが強力ですが、白駒の連携を保って守り切ってください。

Issue 95 (E171-176)

E171 Vladimir Kuzmichev
(Russia)



Win (3+2)

1.Rd7+ Ke8 2.Re7+ Kf8 3.Rf7+ Kg8
4.Rg7+ Kh8 5.Rh7+ Kg8 6.Rag7+ Kf8

7.Rh8+ Win

☆初手 1.Rd7+ はこの一手。作意の 1...Ke8 は以下 R のチェックで押しに行けば、簡単な勝ちです。

☆ 1...Kc8 の変化の方が考え所。2.Rf7!! が 2...Qb2+ に対して 3.Rf2! を用意した好手。黒は 3...Qb4 と備えますが、それでも 4.Rf8+!! Qxf8 5.Ra8+ として、勝ちになります。

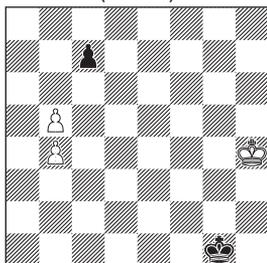
黒川：ヒント通り 1...Kc8 の変化が厄介。後で白ルークを捨てて黒クイーンを抜く手順と思うが、こちらが作意でも良さそうな印象。

中嶋：変化手順の rook sacrifice が気持ち良い。

☆盤の両サイドでの Q の素抜きが作者のテーマとのことです。

[○ 3 △ 0 × 2]

E172 Vladimir Kuzmichev (Russia)



Win (3+2)

1.Kg3! Kf1 2.Kf3 Ke1 3.Ke3 Kd1 4.Kd3 Kc1 5.Kc3 Kb1 6.Kb3 Kc1 7.b6 cxb6 8.b5 Kd2 9.Kc4 Kc2 10.Kd5 Kc3 11.Kc6 Kc4 12.Kxb6 Win

☆初手は直感で 1.Kg3 と指せますが、Try として 1.b6? cxb6 2.Kg3 Kf1 3.Kf3 Ke1 4.Ke3 Kd1 5.Kd3 Kc1 6.Kc3 Kb1 7.b5 (7.Kb3 b5) Ka2 8.Kb4 Kb2 9.Kc4 Ka3 はドローです。

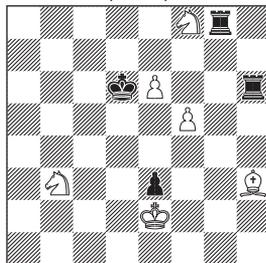
☆以下、オポジションで黒 K を端まで追い込み、6.Kb3 Kc1 となったところで、7.b6 cxb6 8.b5 とすれば、後は簡単です。

中嶋：pawn 捨てのタイミングが重要。

☆既視感のある手順ですが、作者によれば手順が限定されており、オリジナルとのことです。

[○ 3 △ 0 × 2]

E173 Michael Pasman (Israel)



Draw (6+4)

1.e7! Kxe7 2.Sg6+ Kf6 3.Bf1! Rb8 4.Sc5! Rb1! 5.Sf4! Kxf5 6.Sg2! Rh2 7.Kd3!! Rd1+ 8.Ke2! Ra1 9.Se4!! Kxe4 Draw (9...Ke5 10.Sg5! Rh5 11.Sf3+ Ke4 12.Sxe3 Ra2+ 13.Sd2+ Kd4 14.Sec4 Rh2+ 15.Kf3 Draw)

☆黒の強力なダブルルークに対して、白の駒は連携が悪いのが弱点です。1.e7! Kxe7 2.Sg6+ で駒位置を改善しつつ、ルークの効きを遮断します。

☆ 2...Kf6 に対して、3.Sf4? としてくなりますが、以下 3...Rh4 4.Sd5+ Kf7 5.Bf1 Rb8 6.Sc1 Rh2+ 7.Kxe3 Rb1 でピースが落ちて白負けです。

☆正解は先に 3.Bf1! と躲しておく手。3...Re8 とポーンを守るのは、4.Sf4 Rh2+ 5.Sg2 Kxf5 6.Sd4+ Ke4 7.Sf3 Rh5 8.Sfe1 Rh2 9.Sf3 でドローにできます。

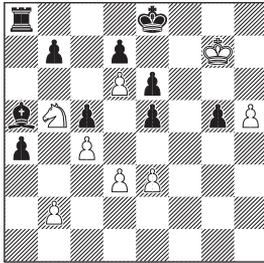
☆黒は 3...Rb8 とこちらに当ててきますが、4.Sc5! と逃げるのがうまい手で、代わりに 4.Sd4 Rh1! は Bf1 が助かりません。

☆ 4...Rb1! に対して、ようやく 5.Sf4! Kxf5 6.Sg2! と引いて白駒の連携が良くなります。6...Rh2 には 7.Kd3!! とピンを外し、7...Rd1+ には 8.Ke2 と戻ります。

☆ 8...Ra1(8...Rd5 は 9.Sa4! Rd4 10.Sc3) に対して、9.Se4!! が絶妙手。これを取るのはいステイルメイトですし、9...Ke5 と躲すのは、以下 10.Sg5! Rh5 11.Sf3+ Ke4 12.Sxe3 Ra2+ 13.Sd2+ Kd4 14. Sec4 Rh2+ 15.Kf3 となって 3 枚のピースを連結させてドローになります。

[○ 0 △ 1 × 4]

E174 Jan Timman
(Netherlands)



Win (8+10)

1.Sa7! Bb6! 2.Sc8! Bc7! 3.h6 Bxd6 4.h7!
Kd8 5.Sb6! Rb8 6.h8=Q+ Kc7 7.Sa8+!
Kc6 8.Qh1+ e4 9.Qxe4# Win

☆キャスリングの阻止がテーマであることはすぐにわかるので、初手 1.Sa7! は見えやすいと思います。

☆ 1... Kd8 に は 2.h6 Rxa7 3.h7 Kc8 4.h8=Q+ Bd8 5.Kf8 とし て 白 勝 ち な の で、1...Bb6! と黒はBで邪魔駒を取りに行きます。2.h6? と焦ると 2..Bxa7 3.h7 0-0-0! が間に合うのですが、2.Sc8! が再度キャスリングを阻止する捨て駒です。

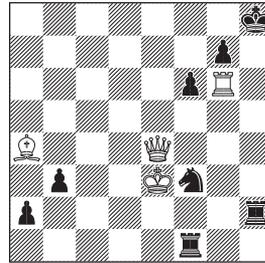
☆黒は困ったようですが、2...Bc7! が上手い手。3.h6 Bxd6 に慌てて 4.Sxd6+? Ke7 はRの効きがh8に通ってドロー。Sc8は邪魔駒であると同時にe7を押さえているのがポイントです。

☆正解は初志貫徹の4.h7! で、4...Bf8+には5.Kf6 Rxc8 6.h8=Qで勝ちです。黒はキャスリングを諦めて4...Kd8と逃げ出します。5.h8=Q+ Kc7は黒の狙い通りですが、キャスリングの権利が無くなったタイミングで5.Sb6! が好手。5...Ke7 6.Sxa8 e4 7.d4!, 5...Bf8+ 6.Kf7はいずれも白勝ちなので、黒は5...Rb8と辛抱します。

☆以下は、6.h8=Q+ Kc7 7.Sa8+! Kc6 8.Qh1+ e4 9.Qxe4# となり、意外にも中段でのメイトになります。

[○0△2×3]

E175 Peter Krug
(Austria)



Win (4+8)

1.Qb7 Re2+ 2.Kxe2 Sd4+ 3.Kxf1 a1=Q+
4.Kg2 Qb2+ 5.Kh3 Se6 6.Bxb3 Qe2
7.Qxg7+!! Sxg7 8.Rh6# Win

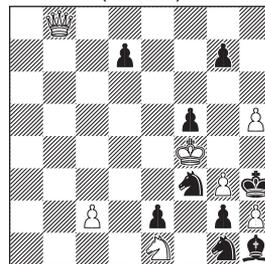
☆初手 1.Qb7 はこの一手。黒は Qg7# を受ける Se6 の形を目指して、1...Re2+ 2.Kxe2 Sd4+ と進め、3.Kxf1 には 3...a1=Q+ 4.Kg2 Qb2+ 5.Kh3 と決めてから 5...Se6 と手を戻します。

☆白は 6.Bxb3 とポーンも取りつつ網を絞ります。ここで 6...Sg5+ には 7.Rxg5 fxg5 8.Qb8+ Kh7 9.Bg8+ とQの素抜きで白勝ち。チェックの続かない黒は、6...Qe2 とKに迫りつつ素抜きの筋を避けます。

☆白は手が途切れたように見えますが、ここで 7.Qxg7+!! が絶妙手。7...Sxg7 8.Rh6# で鮮やかなメイトになります。

[○0△1×4]

E176 Peter Krug
(Austria)



Win (7+9)

1.g4! fxg4 2.h6! gxh6 3.Kf5 Sxh2
4.Qxh2+! Kxh2 5.Kxg4 h5+ 6.Kh4 d6 7.c4

Sf3+ 8.Sxf3# Win

☆取っ掛かりの見えにくい初形ですが、1.g4! fxg4 と g3 地点を空けて、Qg3# を目指すことがわかれば、作意が見えてきます。

☆ただし、慌てて 2.Kf5? とするのは、2...Sh4+! 3.Ke4 d5+ 4.Ke3 Sf5+ 5.Kf2 Sf3 6.Sxf3 gxf3 7.Qe5 Kg4 8.h3+ Kg5 9.c4 dxc4 10.h4+ Kxh4 11.Qf4+ Kxh5 12.Qxf5+ Kh6 でドローです。

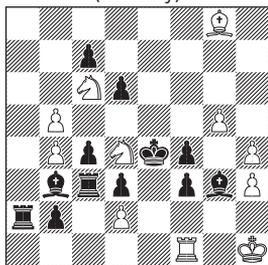
☆なお、一見うまそうに見える初手 1.h6? は Thematic try で、1...g5+!! 2.Kxf5 Sd4+ 3.Kf6 Ngf3 4.h7 g1=Q 5.h8=Q+ Sh4! でドローなのですが、Qg3# の筋が見えた人は自然に 1.g4! と指してしまいそうです。

[○ 0 △ 0 × 5]

D コース 続き

(Continued from p.5)

Uwe Karbowiak
D585 Ralf Kratschmer
C+ (Germany)



#11

(11+12)

1.Se6! (2.Bh7+ Kd5 3.Sxc7#)

1...Kf5 (1...Ra7? 2.Bh7+ Kd5 2.Re1 Bxe1 3.Sxf4#) 2.Sc4+ Ke4/(Ke5) 3.Sxf3(4.Bh7+ Kd5 5.Sxc7#) Kf5 4.Sfd4+ Ke4/(Ke5) 5.Sc6 Kf5 6.Sxf4 Bxf4 7.Se7+ Ke4 8.Bh7+ Ke5 9.Re1+ Be3 10.Rxe3 Kd4/Kf4 11.Re4#/Sd5#

7...Ke5 8.Re1+ Be3 9.Rxe3+ Kf4 10.Sd5+ Kf5 11.Bh7#

☆国名に誤記があり、正しくは Germany です

た。失礼いたしました。

☆まず 1.Se6 として 2.Bh7+ Kd5 3.Sxc7# を狙います。1...Ra7? とするのは 2.Bh7+ Kd5 2.Re1!(3.Se7#) とするのがいい手で 2...Bxe1 3.Sxf4# で詰みます。1...Kf5 に 2.Sc4+ とします。ここで 2...Kg6 の変化が難解ですが、変化飛ばしをするしかないでしょう。実際には 2...Kg6, 3.h5+ Kxh5 4.Bf7 Kh4 5.Bg6! (6.Sxf3+ Kxh3 7.Bf5#) で、5...Bd1 は 6.Rxd1 Be1(Bf2) 7.Sf5+ Kxh3 8.Bh5(9.Sxf4#) Bg3 9.g6 (10.Sg5#) で、5...Kxh3 は 6.Bf5+ Kh4 7.Sxf3 Kh5 8.Sg7# で詰みます。(5...Be1/Bf2 は 5...Bd1 より 1手早く詰む)

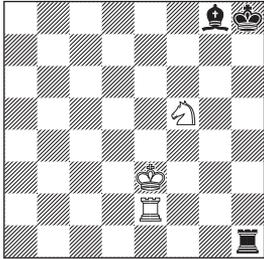
☆ 2...Ke4 に 3.Sxf3 として 4.Bh7+ Kd5 5.Sxc7# を狙います。ここでも 3...Ra7 は 4.Bh7+ Kd5 5.Re1! 以下で詰むので 3...Kf5 の一手。4.Sfd4+ Ke4 (4...Kg6 は前述の変化だと手数足りなくなりますが、今度は 5.h5+ Kxh5 6.Bf7+ Kh4 7.Kg2! で簡単) 5.Sc6 とすると、1手目の局面から f3P がなくなっています。

☆ 5...Kf5 に 6.Sxf4 と捨てるのが英断の一手で、広がったように見えますが、7.Se7+ から詰ますことができます。

☆手数が長く難解で解答者ゼロでした。

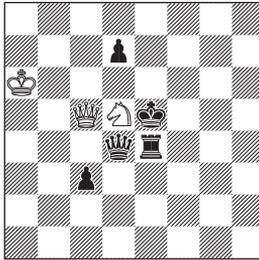
[○ 0 △ 0 × 0 - 12]

H1315 Yuu Yamasaki
C+ (山咲優)



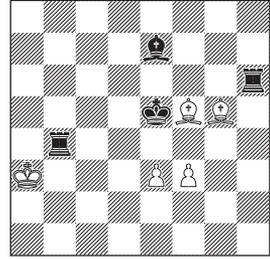
H#2 2sols (3+3)

H1316 Mihaiu Cioflanca
C+ (Romania, Japan)



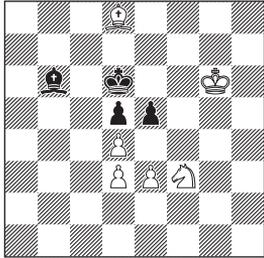
H#2 4sols (3+5)

H1317 Jorge Kapros
C+ (Argentina, Sweden)



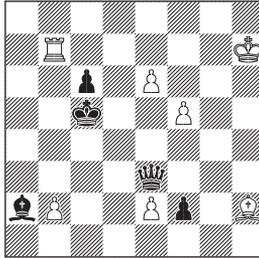
H#2 2sols (5+4)

H1318 Hiroaki Maeshima
C+ (前嶋啓彰)



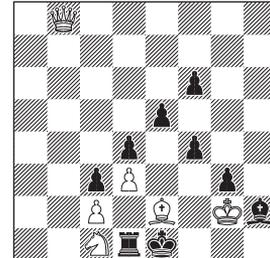
H#2 (6+4)
b)Pe3→f5

H1319 Jozef Ložek
C+ (Slovakia)



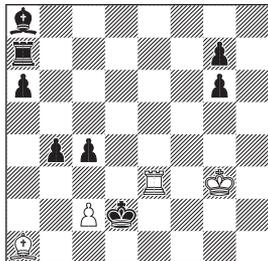
H#2 4sols (7+5)

H1320 Mihaiu Cioflanca
C+ (Romania)



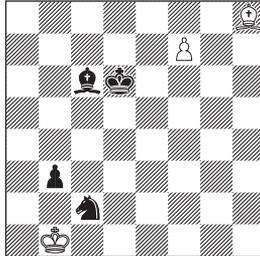
H#2 5sols (6+9)

H1321 Marian Fraçk
C+ (Poland)



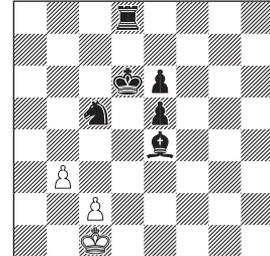
H2.5 2sols (4+8)

H1322 Aleksey Ivunin
C+ (Russia)



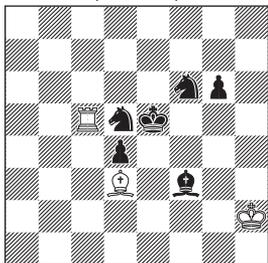
H#3 2sols (3+4)

H1323 Stanislav Hudák
C+ (Slovakia)



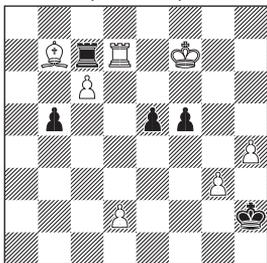
H#3 2sols (3+6)

H1324 Kaj Engström
C+ (Sweden)



H#3 2sols (3+6)

H1325 Mihaiu Cioflanca
C+ (Romania)



H#3 3sols (7+5)

H1326 Jorge Kapros
C+ (Argentina, Sweden)



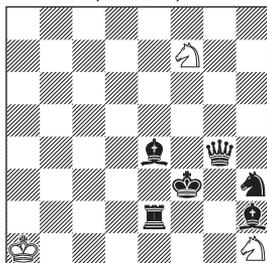
H#3 (4+10)
b/c)Kc6→g6/f1

H1327 Andrew Buchanan
C+ (Hong Kong)



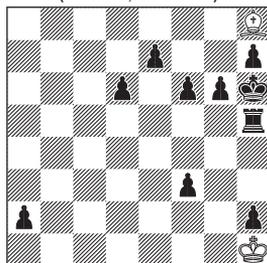
H#3 (3+13)
b)Pa7→b5

H1328 Kaj Engström
C+ (Sweden)



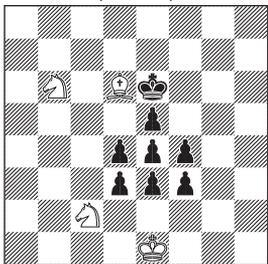
H#3.5 (3+6)

H1329 Aleksandr Pankratiev
C+ (Russia, Ukraine)



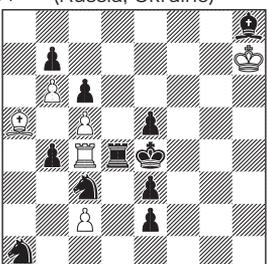
H#3.5 (2+10)
b)Bh8→S

H1330 Sébastien Luce
C+ (France)



H#3.5 2sols (4+8)

H1331 Aleksandr Pankratiev
C+ (Russia, Ukraine)



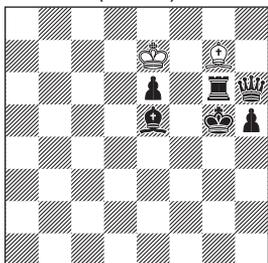
H#3.5 2sols (6+11)

H1332 Aleksandr Pankratiev
C+ (Russia, Ukraine)



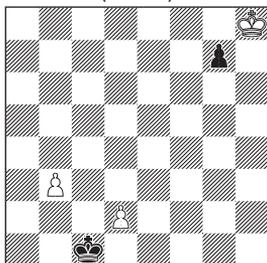
H#3.5 2sols (6+12)

H1333 Sébastien Luce
C+ (France)



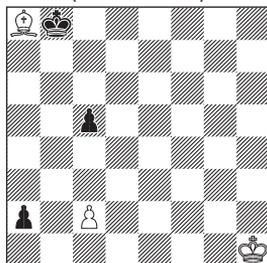
H#4 2sols (2+6)

H1334 Miloje Ilić
C+ (Serbia)



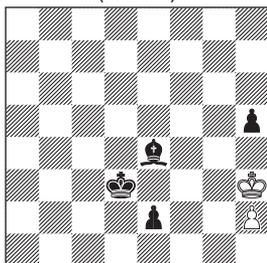
H#6 Duplex (3+2)

H1335 Christopher J.A. Jones
C+ (Great Britain)



H#6.5 (3+3)

H1336 Sébastien Luce
C+ (France)



H#7 (2+4)

Helpmate

Helpmate Editor

Toshimasa Fujiwara [藤原俊雅]

Judge 2022

H# ≤ 3 : Ricardo Vieira (Brazil)

H# > 3 : Michel Caillaud (France)

●今号は 22 題の出題です。初めて山咲優さんからご投稿をいただきました。また、先日創刊されたプロブレム雑誌『The Hopper』の編集長・Buchanan さんからも 1 作。私が創刊号に投稿したので、そのお礼にとのこ

とです。本作については特に注意深く解答してください。

●少し前に古いプロバラを読んでみたのですが、一部の解答者が作品に点数を付けていました。詰パ乐的で面白いと感じたので、時間に余裕のある方は短評を書くついでに採点もしてみてください。やはり担当者としては、解答者がどういう作品を面白いと思っているのかに興味がありますので。採点の形式は ABC でも 1 ~ 5 でもなんでも構いません。よろしく願います。

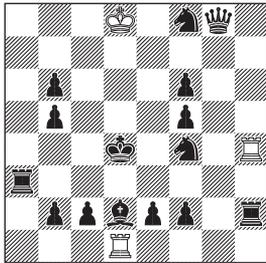
This issue has 22 compositions. TF means the comment of Toshimasa

Fujiwara. I am looking forward to receiving solutions or comments from overseas!

I would add Anatoly Kirichenko to the authors of **H1309** and **H1314**. I am very sorry that I forgot to write it down.

Issue 95 (H1205, 1273-1294)

H1205 Jozef Ložek
C+ (Slovakia)



H#2 4sols (3+15)

- 1.Kc3 Ra1 2.Sd5 Rxa3#
- 1.Ke3 Rg1 2.S4g6 Rg3#
- 1.Kc5 Rh7 2.Bb4 Rc7#
- 1.Ke5 Rh3 2.Bc3 Re3#

九尾：4方向移動。Sd5のところ、一瞬逆王手を食らいました。

太刀岡：Kの移動先とRの向き4種。駒数は減りそう。

●黒の2手目が self-block ではなくラインの遮断で統一されているのが良いところ。ただし、配置の広がりにはなります。

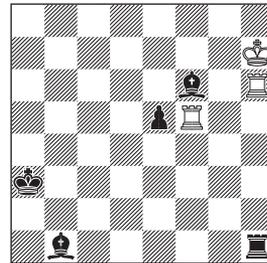
黒川：簡単だが、主題がわかりやすく楽しい。

Kurokawa : Easy but enjoyable theme.

Sunouchi : Geometric pieces suit with the star-flight.

TF : B2 is unified by interference the line. Setting is heavy, but nice star-flight!

H1273 Jozef Ložek
C+ (Slovakia)



H#2 2sols (3+5)

- 1.e4 Rb5 2.Bh4 Ra6#
- 1.Bh4 Rb6 2.e4 Ra5#

太刀岡：綺麗は綺麗だが、当たり前のことをやっているようにも見える。

水野：実質同じ手順。

●本作については解答者の皆さんと全く同じ意見です。

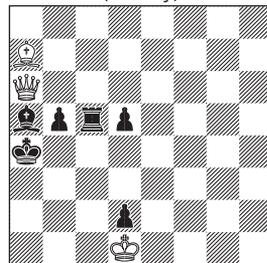
九尾：入門用でしょうか。

Kyubi : For beginners.

Sunouchi : Nice a simple system for every solvers.

TF : Similar patterns in the two solutions.

H1274 Okan Pandar
C+ (Turkey)



H#2 4sols (3+6)

- 1.b4 Qc4 2.Rb5 Qa2#
- 1.b4 Bxc5 2.b3 Qc6#
- 1.Rc3 Bb6 2.Rb3 Qxa5#
- 1.Rc2 Kxc2 2.Ka3 Qxa5#

太刀岡：対比はないがどれも綺麗に詰む。

星野：2枚の黒Pが作意に関係ないのがちょっと。

●本作のニッチな狙いに気づいた解答者はゼロ。作者の言葉を引用しましょう。

Author : Task: Black has two officers;

A and B. Four solutions must be made.

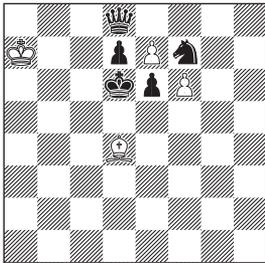
Solutions: 1. Take no Black officer. 2.

Take A 3. Take B 4. Take A and B...

Sunouchi : I found Qa2# first, Qxa5# later, Qc6# last.

TF : An interesting and rare task is achieved with a small number of pieces.

H1275 Hiroaki Maeshima
C+ (前嶋啓彰)



H#2 2sols (4+5)
b)Bd4→d3

- a)1.Qa8+ Kb6 2.Qd5 e8=S#
1.Qf8 exf8=Q+ 2.Kc6 Qc5#
b)1.Kc7 e8=S+ 2.Kc8 Ba6#
1.Kc5 exd8=Q 2.d5 Qb6#

● Bを一段下げてもQ,S成が出てくるとい
う珍しい構成の作品。S成の位置は同じです
がタイミングが変わります。Kの詰む位置が
4解で分けられている点もヘルプらしさと言
えるでしょう。

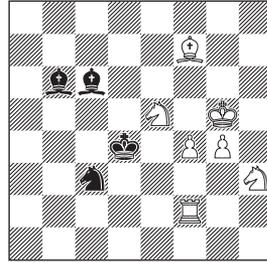
太刀岡：4種成を期待したが、同種成も立派
な狙い。Bの筋が違うのにSが出てくるの
が不思議。

九尾：暗算だと全然見えませんでした。

●本作を含め前嶋さんのヘルプは独特なもの
が多く、作り方が気になります。

TF : It is technical that the final positions
of the black King are all different in four
solutions.

H1276 Seichiro Sunouchi
C+ (則内誠一郎)



H#2 3sols (7+4)

- 1.Be4 Sc4 2.Kd3 Rd2#
1.Ke4 Rd2 2.Be3 Bg6#
1.Ke3 Bg6 2.Bd4 Sc4#

●本誌の解答強豪、則内氏の新作。いつも英
語で短評をくださって助かっています。

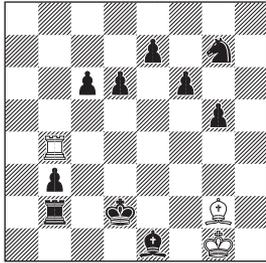
●本作の狙いは白の cycle of moves(A-B,
B-C, C-A)。これ自体は珍しいテーマではあ
りませんが、経済的に優れた配置で成立させ
ているのは流石です。

太刀岡：白の手がサイクリックになってい
とても面白い。

九尾：地味な力技といった印象。

TF : White cycle from economical setting
is nice.

H1277 Jozef Ložek
C+ (Slovakia)



H#2 2sols b)Kd2→f5 (3+10)

- a) 1.Ke2 Rxb3 2.Rd2 Bf3#
1.Kc3 Bf1 2.Bd2 Rc4#
b) 1.e5 Rh4 2.Se6 Be4#
1.Ke5 Bxc6 2.Sf5 Re4#

塩見：上辺と下辺に関連性があるもっと良かった。

太刀岡：a) と b) は完全に別の作品に見えるのだが、それでもツインにすると価値があがるのだろうか。

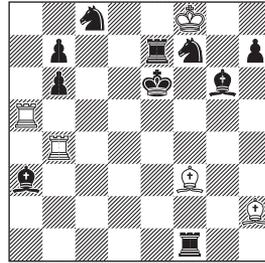
● HOTF ということでしょうが、ツインでbKを飛ばして2つの舞台上でやっているのは残念。

九尾：解きやすいb)が良いヒントになりました。

Sunouchi：Black pieces kindly suggest the stories.

TF：Rook and Bishop are made the most of their role. It's a pity about the twin setting.

H1278 Fadil Abdurahmanović
C+ (Bosnia Hercegovina)



H#2 2sols (5+10)

- 1.Sg5 Be5 2.Kf5 Bg4#
1.Rc7 Re5+ 2.Kd6 Rd4#

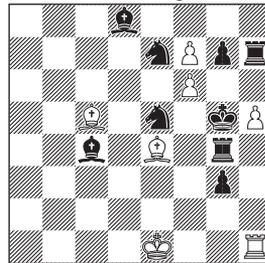
●ピンとアンピンの組み合わせ。作者は謙遜しておられましたが、流石にうまく出来ています。

● R と B が同地点 (e5) で互いにラインを切って bK の移動先を与える構成 (グリムショウ) は、この作者の十八番なので覚えておきましょう。

Tachioka：Nice contrast of closing lines.
Sunouchi：Self-interferences with K are amazing.

TF：This type of Grimshaw is a favorite of the author. White R or B are pinned by B1 and unpinned by B2. Beautiful composition by the master of helpmates!

H1279 Fadil Abdurahmanović
C+ (Bosnia Hercegovina)



H#2 3sols (7+9)

1.Kf4 Bd3 2.Kf3 0-0#
 1.Kh6 Be3+ 2.g5 hxg6 e.p.#
 1.Kxf6 Rf1+ 2.Ke6 f8=S#

● Castling・un passant・under-promotion という3つの技の融合になっていて、これをプロブレムの世界では Valladao task と呼びます。本作は Valladao と 3/4 star-flight の掛け算になっていて、この合わせ技は作者によれば “probably new” のようです。お見事！

● 解答者も絶賛。格の違いを見せつけてくれました。

星野：バラダオ！うまい！

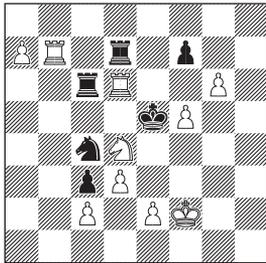
Nakajima：Nice Valladao task mate.

Tachioka：Three irregular moves.

Sunouchi：A noble composition to perform Valladao.

TF：Valladao with 3/4 star-flight is a very fresh idea! Is there any precedent for it?

Rolf Wiehagen
 H1280 Christer Jonsson
 C+ (Germany, Sweden)



H#2 4sols (10+6)

1.Sxd6 Rb5+ 2.Kxd4 e3#
 1.Kxd6 Rb8 2.Kc7 Sb5#
 1.Rcxd6 e3 2.Kd5 Rb5#
 1.Rdxd6 Sf3+ 2.Kf6 Rxf7#

● d6 での駒取り×4。その意味付けは bK

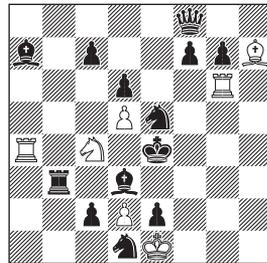
を mating positions に運ぶためです。まずまずでしょうか。

太刀岡：取り方をテーマにするのは面白い。九尾：狙いは一瞬で見破れましたが、Kで取る順に少し苦労。

Sunouchi：Sols are determined by men who gets d6R.

TF：The theme is clearly understandable and the expression is excellent.

H1281 Abdelaziz Onkoud
 C+ (France)



H#2 2sols (7+13)

1.Bxc4 Ra5 2.Rf3 Rg4#
 1.fxg6 Bg8 2.Qf3 Sxd6#

● 開く Battery と無くなる Battery。新味はありませんが Help のエッセンスはしっかりと入っています。

太刀岡：手順の対称性に加え両解で両バッテリー使うのもよい。

星野：ぼんやり Ra5 で間に合うかと思うが、さすがダブルチェックは強力。

九尾：詰棋的思考で解けました。形がゴツすぎる？

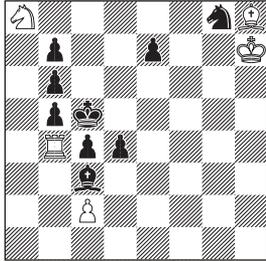
● 余詰まないように纏めるのは案外大変なもの。とはいえ、この作者にはもう少し駒が減るのでは？という作品が多いのも事実です。

Sunouchi：Thematic Zilahi, self-block and double check.

TF：Guard on d5 with the rear piece of one battery and mate by another

battery. A great contrast.

H1282 Udo Degener
Mirko Degenkolbe
C+ (Germany)



H#2.5 zeropotision (5+9)

- a) +bPa6
- b) +wPe3
- c) Pb5→e3

- a) 1...Sxb6 2.Kxb6 Rxc4 3.Ba5 Bxd4#
- b) 1...Rxc4+ 2.Kxc4 Bxd4 3.Bb4 Sxb6#
- c) 1...Bxd4+ 2.Kxd4 Sxb6 3.e5 Rxc4#

●大御所 2 人の共作。H 1276 を発展させたような、3 手が回転する cycle of moves になっています。初手を捨駒にして少ない駒数でメイトになるのが良いですね。

●ちなみに zeroposition とは出題図を解かない出題形式ですが、n 解やツインよりも価値は低くなります。

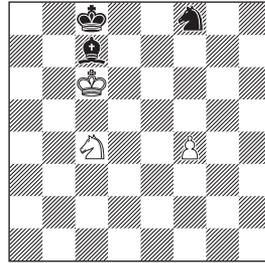
星野：えらく易しいなと思ったら、三つの手の組み合わせだったんだ。

Tachioka : Funny theme and nice contrast.

Sunouchi : Elaborate and excellent cycle moves and Zilahi.

TF : White Sacrifices to carry bK to the destination. Cycle of moves is very skillful!

H1283 Stanislav Hudák
C+ (Slovakia)



H#3 2sols (3+3)

- 1.Kb8 Kb5 2.Ka8 Ka6 3.Bb8 Sb6#
- 1.Kd8 f5 2.Ke8 f6 3.Bd8 Sd6#

●この作者は対照的というよりも対称的な作品が多いですね。

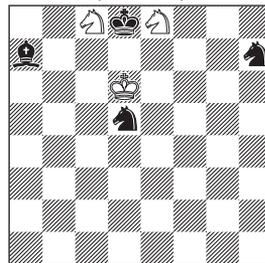
九尾：この P が間に合うとは。

Tachioka : Very simple and good.

Sunouchi : Simple and witty twins with symmetric ends.

TF : Symmetrical black moves in the two solutions.

H1284 Stanislav Hudák
C+ (Slovakia)



H#3 2sols (3+4)

- 1.Kxc8 Ke6 2.Sc7+ Ke7 3.Bb8 Sd6#
- 1.Kxe8 Kc6 2.Se7+ Kc7 3.Sf8 Sd6#

●先程とは違って Zilahi になっていますが、こちらは完全に対称的な手順で残念。

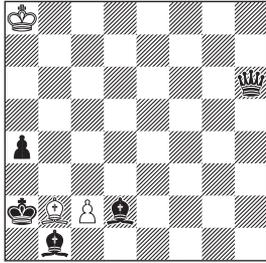
九尾：順番は限定されていますが、左右の手順差が少なすぎる気も。

Tachioka : Good tempo but the solutions are too similar.

Sunouchi : More valuable than H1283 as Zilahi and Tempo.

TF : Zilahi and tempo move. Symmetrical white moves in the two solutions.

H1 285 Toshimasa Fujiwara
C+ (藤原俊雅)



H#3 2sols (3+5)

- 1.a3 Bc1 2.Ka1 Bxd2 3.a2 Bc3#
- 1.Bb4 Bg7 2.Ka3 Bxh6 3.Ba2 Bc1#

則内：Rundlauf を right or left に巧く出来ている。

太刀岡：大小のルントラウフの対比がよい。

●自作。初めの地点に戻るわけではないのでルントラウフではありません。強いて言うなら Long-trip です。

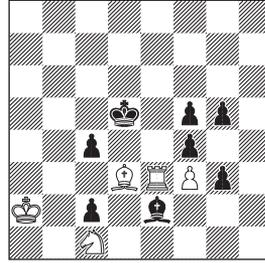
中嶋：上田吉一さんの wR が回転する H#3 (Aurora の No.5) を思い出しました。

●流石の慧眼。ほとんど上田作の Bishop 版です。

Nakajima : Nice small and big wB movements.

TF : My composition. Big and small trip of bishop. Model mates.

Aleksandr Pankratiev
H1286 Evgeny Gavrylin
C+ (Russia, Ukraine)



H#3 2sols (5+8)

- 1.fxe3 Bxc4+ 2.Ke5 Bxe2 3.Kf4 Sd3#
- 1.cxd3 Rxd3+ 2.Kc4 Rd4+ 3.Kc3 Sxe2#

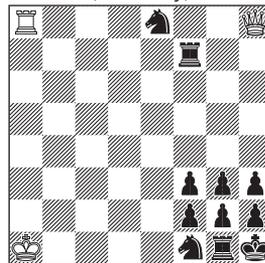
●いかにも取ってもらいたそうな R と B が目に付く形。最後は S でメイトにするのでジラヒでは無いですが、似たような味があります。九尾：2 解目も P で取るかもと考えたら一瞬でした。

● Help に慣れてくるとこういう考え方が出来るようになります。

Sunouchi : Explicit Zilahi and implicit set of black sacrifices.

TF : It is clear from the initial position that white Rook or Bishop are taken. Nice model mates.

Udo Degener
H1287 Mirko Degenkolbe
C+ (Germany)



H#3 (3+11)

b)wRa8→wB

a)1.Rb7 Qxh3 2.Sc7 Qxh2+ 3.Kxh2 Rh8#

b)1.Rh7 Bxf3 2.Sg7 Bxg2+ 3.Kxg2 Qa8#

● 豪快な手順構成で、とても楽しい Help だと思います。さすが創作 GM と言ったところですね。解答者も絶賛。

星野：最大限走り回っている感じが良い。

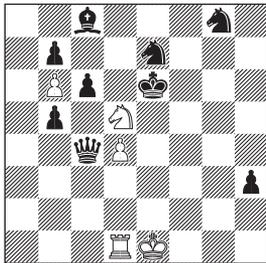
九尾：全然詰む気がしなかった分、気付いた時の爽快感はなかなかのもの。

Tachioka : Easy, funny and good.

Sunouchi : Fine self- interferences in a kind of forcible ODT.

TF : A dynamic and perfect ODT! All the solvers, including me, were pleased with this original.

H1288 Christopher J.A.Jones
C+ (Great Britain)



H#3 2sols (5+9)

1.Kd6 Sf6 2.Be6 Sd7 3.Qc5 dxc5#

1.Kd7 Sc7 2.Qf7 d5 3.Qe6+ dxe6#

● たぶん R,S,P を用いた最小限のメイトが 2 種類出てくるのが狙いで、Tempo move はおまけでしょう。この作者に多い、綺麗に出来た手筋ものという感じの 1 作。

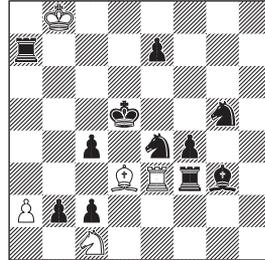
Tachioka : Chameleon echo and fantastic tempo.

Sunouchi : Skillful and attractive moves including a tempo.

TF : Double-check mates consisted of

four white pieces. A nice sense of unity.

Aleksandr Pankratiev
H1289 Evgeny Gavryliv
C+ (Russia, Ukraine)



H#3 2sols (5+11)

1.cxd3 Rxd3+ 2.Kc4 Rd4+ 3.Kc3 Se2#

1.Ke5 Bxc4 2.fxe3 Be6 3.Kf4 Sd3#

星野：困った時には駒を取れ。駒を取ると詰み場所が空く。

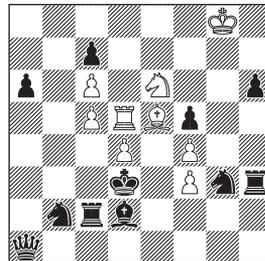
九尾：これの改良が 1286 ?

● そうでしょうね。投稿時期をズラされたので、気が付かず両方採用してしまいました。こちらは駒数が多くて微妙です。

Sunouchi : Bd2 → Bg3 makes clearness, but I like the former.

TF : I think H1286 is better than this.

H1290 Abdelaziz Onkoud
C+ (France)



H#3 (9+11)

b) -Pf3

a)1.Bxf4 Bxf4 2.Sc4 Bc1 3.Qc3 Sf4#

b)1.Rxc5 Rxc5 2.Se2 Rc1 3.Re3 Sc5#

●この作者が最近よく手掛けている R, B, S を用いた手順構成です。これまでは似た感じの作品が多かったのですが、本作はツインの設定がちょっと不思議で良いですね。

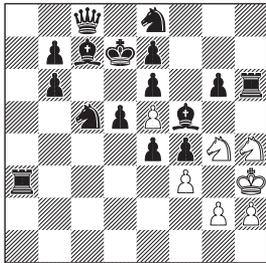
Tachioka : Good contrast.

Sunouchi : Thoughtful moves on c1.

Active moves on f4 or c5.

TF : The similar idea as H1218 and H1243, but twin setting of this composition is unique. Black's moves are also good.

H1291 Abdelaziz Onkoud
C+ (France)



H#3 2sols (7+16)

1.Bxg4+ Kxg4 2.Kc6 Sf5 3.Qd7 Sd4#
1.Rxh4+ Kxh4 2.Kd8 Sh6 3.Sd7 Sf7#

●対照性は完璧ですが、紛れが少なくてちょっと物足りない印象です。駒数ももう少し減らせないものでしょうか。

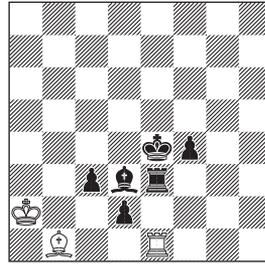
九尾 : 取られる前に捨てるという心意気。

太刀岡 : 黒駒を全部使う意味はあるのだろうか。

Sunouchi : Approachable Zilahi and Umnov near the crowd.

TF : Setting is very heavy, but the contrast is perfect. Self-block on d7 with different pieces.

Aleksandr Pankratiev
H1292 Evgeny Gavryliv
C+ (Russia, Ukraine)



H#3.5 3sols (3+6)

1...Bc2 2.Kf3 Ra1 3.Ke2 Bb1 4.Kd1
Bxd3#

1...Bxd3+ 2.Kf3 Rxe3+ 3.Kf2 Rf3+
4.Ke1 Rf1#

1...Rf1 2.c2 Kb2 3.Be2 Rxf4+ 4.Kd3
Bxc2#

●作意手順を見ていただくと分かりますが、3解で初手と最終手がサイクルになっています。これを盤上9枚で実現するのは技術的にとても難しいでしょう。

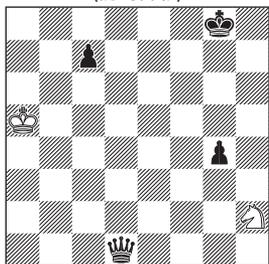
●解答者には評価されなかったもののちょっと凄い作品。

星野 : R を a1 に隠す手に、中々気が付かなかった。

Sunouchi : After I found Bd3#, I took time without the theme.

TF : The first and last moves are cyclic in three solutions! It's surprising that such difficult theme has been achieved with so few pieces.

H1293 Hiroaki Maeshima
C+ (前嶋啓彰)



H#6 (2+4)

1.g3 Kb5 2.g2 Kc6 3.Qh1 Kd7 4.g1=R
Ke8 5.Rg7 Sg4 6.Qh8 Sf6#

星野：Qh1のタイミング、うまく限定できるものだと感心。

●加えて、RとQが収束に連続で大移動するのも気が利いています。解答者からも好評でした。

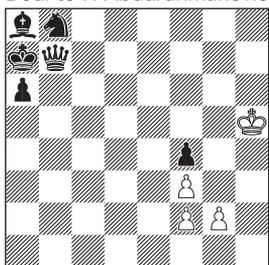
太刀岡：少ない駒数で論理的な手順を味わえる。

則内：駒の efficiency を考える内に mate 形が見える。

九尾：最終形に気付くのに一苦労。手順の組み合わせでもう一苦労。

TF：A delicate beginning and an exhilarating end. It was popular with the solvers.

H1294C+ Christer Jonsson
(Sweden)
Ded. to F. Abdurahmanović



H#6 (4+6)

1.Qxf3+ g4 2.Qxf2 g5 3.Bh1 g6 4.Qg2
g7 5.Qa8 g8=Q 6.Bb7 Qg1#

太刀岡：左上を入れ替えるために最遠移動が出てくるのが面白い。

●テーマは明らか。綺麗に出来ていますが Jones さんに類作がありました。作者自認とのこと。

●とはいえ、長距離移動による Q、B の位置入れ替えが楽しめる好作です。

九尾：暗算で解ける易ささに感謝。

星野：Qg1 に引く手が見えず、苦労した。白 K の位置で手順限定は絶妙。

Sunouchi：How to reverse black B& Q before a promotion.

TF：Long black moves to change the places of Q and B. wQ also moves long distances.

新刊紹介

Uri Avner, *Close encounters with the Chess Pieces*

かつてプロブレムの世界組織の会長でもあった、イスラエルの作家 Uri Avner さんの作品集が刊行された。得意分野の selfmate 53 局や fairy35 局を中心に編まれたもの。内容は、藤原俊雅さんが紹介を書いているので、そちらを参照してほしい。

https://note.com/chess_problem/n/67e8c04fbbad

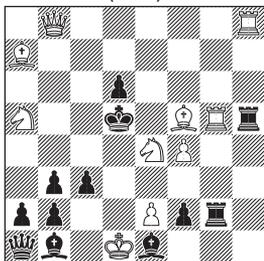
なお、本書は JCPS でも取り扱っているが、ISC の席で全冊売り切れたため、いま在庫なし。購入希望者は、メールで若島までご連絡を。集まり次第、追加注文します。3800 円 (送料は当方負担)。

S280

Mike Prcic

C+

(USA)



S#3

(10+12)

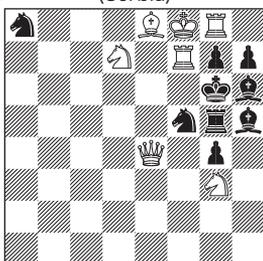
S281

Milomir Babic

Rade Blagojevic

C+

(Serbia)



S#4

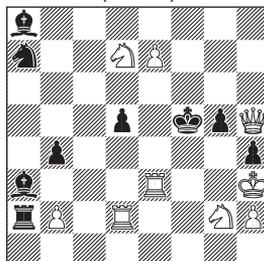
(7+9)

S282

Aleksandr Pankratiev

C+

(Russia)



S#4

(9+9)

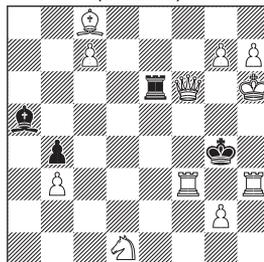
S283

Valery Kopyl

Gennady Koziura

C+

(Ukraine)



S#4

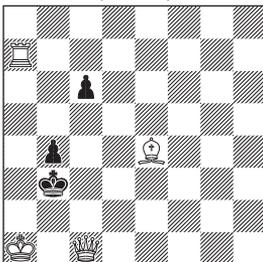
(11+4)

S284

Viktor Zheltukhov

C+

(Russia)



S#5

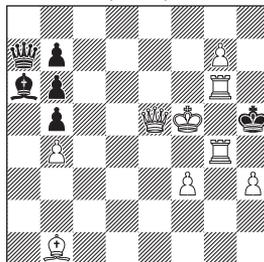
(4+3)

S285

Leonid Makaronez

C+

(Israel)



S#6

(9+6)

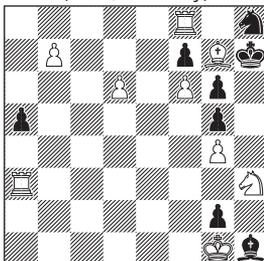
S286

Steve Dowd

Mirko Degenkolbe

C+

(USA,Germany)



S#8

(9+8)

Selfmate

Selfmate Editor

Hiroaki Maeshima (前嶋啓彰)

Judge 2021-2023

Kohey Yamada (山田康平)

☆今号は7題。

☆短めの手数の問題も多くいただきましたので、是非解答をお寄せください。

☆ S280 はノーヒント。

☆ S281 は黒の手がかなり限定されていることを初手で利用します。

☆ S282 は a ファイルのピースでメイトしますので、キングサイドに運ぶ方法を考えてください。

☆ S283 は初手の後、黒 B の動き方に応じた変化になります。

☆ S284 は 3 手目の白の手が 2 通りありますので、どちらもお答えください。

☆ S285 は白 K をメイトするピースをどうやって移動させるかを考えてください。

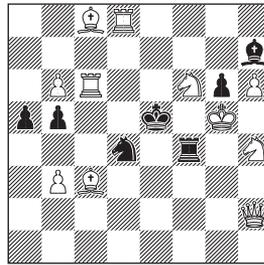
☆ S286 は黒のステイルメイトをどのように回避するかがポイントです。

☆ 96 号で採用した Akimov さんの国名が誤っておりました。正しくは Kazakhstan です。お詫び申し上げます。

I sincerely apologize that the country of Mr. Akimov was wrong in PP96. Kazakhstan is correct.

Issue 95 (S270-274)

S270 Rade Blagojevic
C+ (Serbia)



S#5

(11+7)

1.Rc7 Bg8 2.Qe2 Re4 3.Qxb5 Bd5 4.Qe7
Be6 5.Sg4 Rxc4#
1... a4 2.Re8 Kd6 3.Se4 Kd5 4.Rd7 Kc6
5.Re6 Sxe6#
1... b4 2.Re8 Kd6 3.Bxb4 axb4 4.Rd8 Ke5
5.Sf3 Sxf3#

星野： ヒントに助けられた。Sg8 に対して Rg4 を実現する手段はという道筋で解けた。

☆ 1.Rc7 に対して黒の可能な応手は 3 手しかありません。1...a4, 1...b4, 1...Bg8 です。

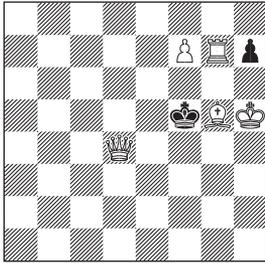
1.Rc7 は 2 つスレットがついています (1...a4 のラインと 1...b4 のラインの 2 手目以降がそのままスレットです)。

これに対して、黒の応手のうち 2 つがそのスレットを切り分け、さらに 1...Bg8 からは新しい変化が加わるというのが狙いだと思えます。

ダイレクトメイトにおける Karlström-Fleck Theme に類似した狙いかと思われれます。

☆ Perhaps the author intended Karlström-Fleck in Selfmate. Beautiful!

S271 Viktor Zheltukhov
C+ (Russia)



S#5 (5+2)

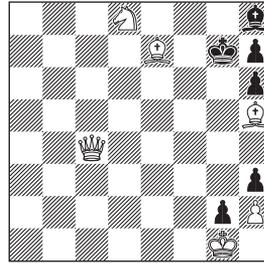
1. Bh6 Ke6 2. f8=B Kf5 3. Be7 Ke6 4. Bh4 Kf5 5. Rg6 hxg6#

黒川：f8の時にどうするかが考えどころ。

星野：易しいのがあったと助かります。

☆ Nice underpromotion.

S273 Mirko Degenkolbe
C+ (Germany)



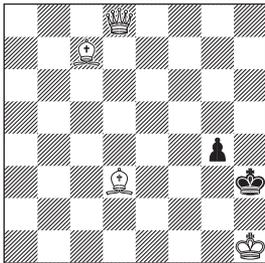
S#8 (6+6)

1. Qe4 Kg8 2. Bf7+ Kg7 3. Be6 h5 4. Qe5+ Kg6/Kh6 5. Bf5+/Bg5+ Kh6/Kg6 6. Bg5+/Bf5+ Kxg5 7. Sf7+ Kh4 8. Qd4+ Bxd4#

☆ No one could solve this.

☆ The sacrifice of wB is hard to find out.

S272 Kankuh Kobayashi
C+ (小林看空)



S#6 (4+2)

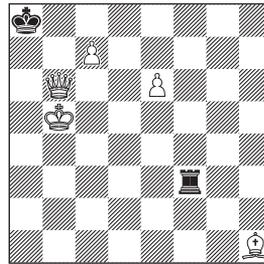
1. Be2 g3 2. Qd3 Kh4 3. Bd8 Kh3 4. Bb6 Kh4 5. Qd8 Kh3 6. Bg1 g2#

中嶋：程よい難易度でありがたい。

星野：Be2で一氣に狭くなるのに気づくまで、Bh2と散々寄り道してしまった。

☆ d8のマスをおめる白の駒が、Q→B→Qと変化します。面白いテーマだと感じます。

S274 Anatoly Stepochnik
C+ (Russia)



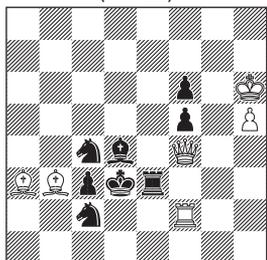
S#11 (5+2)

1. Qc5 Kb7 2. e7 Ka8 3. e8Q+ Kb7 4. c8=B+ Ka8 5. Be6+ Kb7 6. Qd4 Kc7 7. Qed8+ Kb7 8. Ka5 Qc6 9. Qb2 Kc5 10. Qc1+ Rc3 11. Qa3+ Rxa3#

☆ No one could solve this.

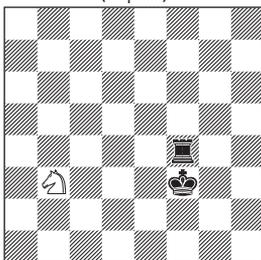
☆ The bK is forced to march into the middle of the board, which is quite hard to find.

F1257 Aleksandr Pankratyev
C+ (Russia)



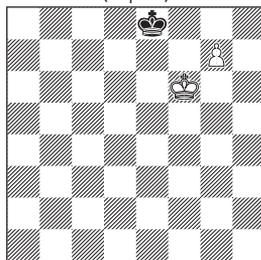
#2 (6+8)
Circe

F1258 Ken Kousaka
(Japan)



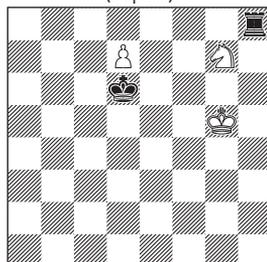
H#2 (1+2)
Annan
Invisible 1+1

F1259 Ken Kousaka
(Japan)



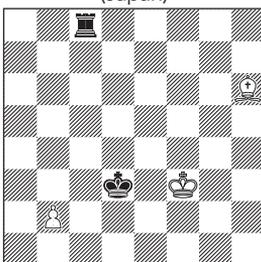
H#2 (2+1)
Transmuted Kings
Invisible 1+1

F1260 Ken Kousaka
(Japan)



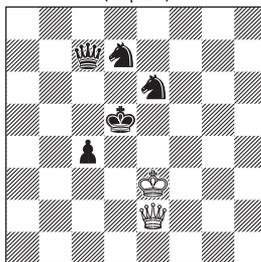
H#2 (3+2)
Madrasi
Invisible 1+0

F1261 Ken Kousaka
(Japan)



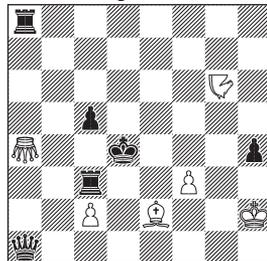
H#2 (3+2)
Circe
Invisible 1+0

F1262 Ken Kousaka
(Japan)



H#2 2 Sols (2+5)
Invisible 1+0

F1263 Jorge Kapros
C+ (Argentina)



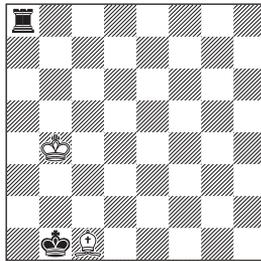
H#2 (6+6)
b) wPc2→f4
Grasshopper a4, Nightrider g6

F1264 Michal Dragoun
C+ (Czech Republic)



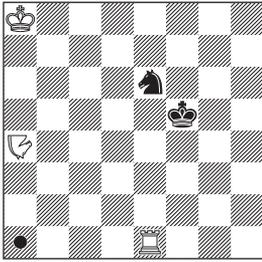
H#2 4 Sols (8+16)
Leo 3+1, Pao 1+2

F1265 Ken Kousaka
(Japan)



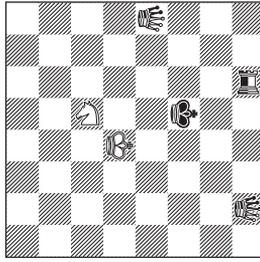
H#2.5 (2+2)
Circe
Invisible 1+0

F1266 Hironori Oikawa
C+ (Japan)



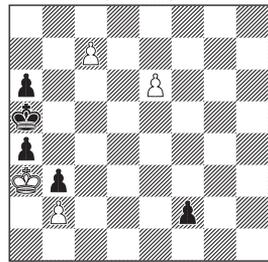
H#2.5 2 Sols (3+3)
Nightrider a4
Imitator a1

F1267 Stephan Dietrich
C+ (Germany)



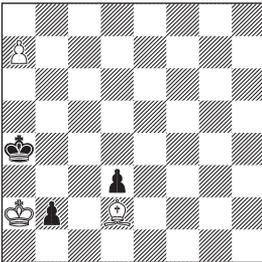
HS#3 3 Sols (2+1+3)
Poseidon d4, f5
Neutral Sirene e8, h2
Neutral Rook h6

F1268 Slobodan Šaletić
C+ (Serbia)



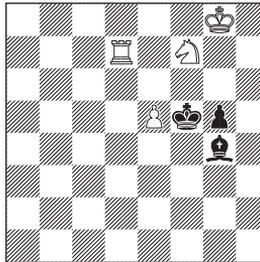
H=2 (4+5)
Duplex

F1269 Slobodan Šaletić
C+ (Serbia)



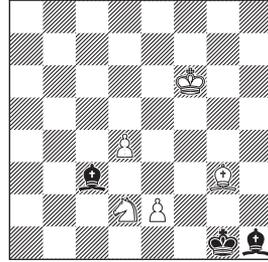
H=2 (3+3)
b) bSb2

F1270 Slobodan Šaletić
C+ (Serbia)



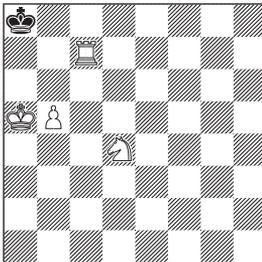
H=3 2 Sols (4+3)

F1271 Mihaiu Cioflâncă
C+ (Romania)



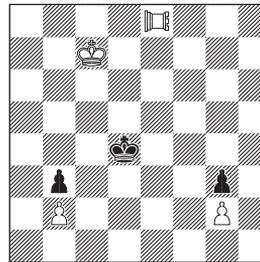
SH# 14 (5+3)

F1272 Chris Feather
C+ (UK)



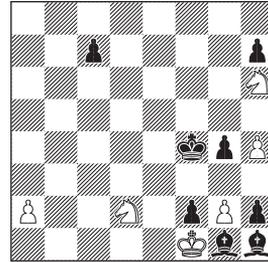
SH#41 (4+1)
Equipollent Circe

F1273 Ľuboš Kekely
C+ (Slovakia)



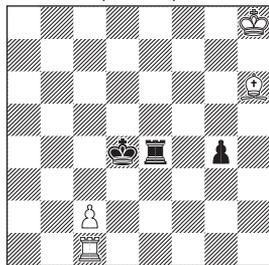
PSer-H#8 2 Sols (4+3)
Pao e8
Transmuted Kings

F1274 Jean François Carf
C+ (France)



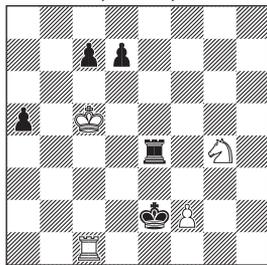
pSer-s#10 (6+8)

F1275 Jean Carf
C+ (France)



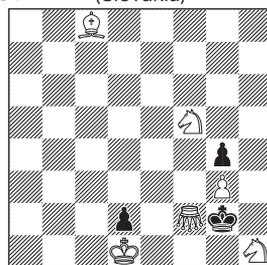
pSer-s#9 (4+3)

F1276 Pascale Piet
C+ (France)



pSer-s#7 (4+5)

F1277 Ľuboš Kekely
C+ (Slovakia)



pSer-h=21 (6+3)
Grasshoper-2 f2

Fairy

Fairy Editor

Vlaicu Crisan (Romania)

Judge 2022

To be announced

We start 2022 with 21 compositions, one third coming from local composers! I warmly encourage Japanese composers to support with originals our chess composition magazine and particularly the fairy column.

Only one direct mover this time – can you spot which is the main theme present in all variations?

The helpmates selection will provide you many challenges. Ken explores the Invisibles pieces in various settings, either alone or combined with fairy conditions. Wenigsteiner fans will surely enjoy the three gems. Jorge continues his exploration of Grasshopper and Nightriders. A warm welcome to Michal in our pages – can you spot what is the beautiful connection between the 4 solutions in **F1264**? Hint: the white Pao f1 must come somehow into play. Hironori is back with an amusing idea: in both solutions the Imitator must

reach to the corner – but which white piece will attack the black King?

A short intermezzo for one helpselfmate from Stephan. In **F1267**, the neutral Sirene must capture the white Knight in the last move in order to mate the white Poseidon. The same pattern is seen in all three solutions.

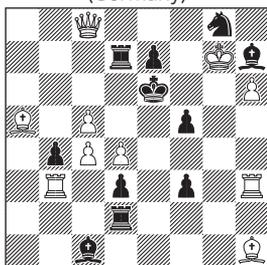
I am sure Slobodan's three helpstalemates will provide you a relief. Also the [parry] serial problems are not too taxing – in **F1271** you should just find where the black King is mated. **F1272** is the most difficult and I hope Chris won't mind me for giving the clue: the white King will eventually deliver the mate! The three French musketeers had similar ideas in different settings – the first 5 moves will show the same theme. The Grasshopper-2 in our last problem is a Grasshopper whose destination square is 2 square distance from the hurdle.

Solvers, please send your comments to the published originals – as you know, the composers love to hear your feedback which is very much appreciated. Composers, please continue keeping our solvers entertained with your original sparkling fairy compositions which make our column so popular. Thank you very

much for your continuous support and good inspiration to all of you in 2022!

Issue 95 (F1212-1229)

F1212 Hubert Gockel
C+ (Germany)



#2vvv (10+11)
Breton Adverse

1. Rxb4[-bPf3]? [2. Rb6# **A** 2. Re3# **B**
2. Bd5# **C**] 1...f4!
1...Rg2+ 2. Bxg2[-bRd7]#

1. Bxb4[-bPf3]? [2. Re3# **B** 2. Bd5# **C**
2. Bxd2[-bRd7]# **D**] 1...Sf6!
1...Rg2+ 2. Bxg2[-bRd7]#

1. Bxf3[-bPb4]? [2. Bd5# **C** 2. Bxd2[-
bRd7]# **D** 2. Rb6# **A**] 1...Sxh6[-wPd4]!
1...Rg2+ 2. Bxg2[-bRd7]#

1. Rxf3[-bPb4] ! [2. Bxd2[-bRd7]# **D**
2. Rb6# **A** 2. Re3# **B**]
1... f4 2. Bxd2[-bRd7]# **D**
1... Sxh6[-wPc4] 2. Re3# **B** (wBh1 is not a
"Nachtwächter")
1...Rd~ 2. Rb6# **A**
1...Rg2+ 2. Bxg2[-bRd7]#
1... Rb2 2. Rxb2[-bRd7]#
1... Rf2 2. Rxf2[-bRd7]#

Author: Closed cycle of triple threats (based on 4 "1.5 Anti-Novotnys"). Karlström-Fleck with black correction in the solution.

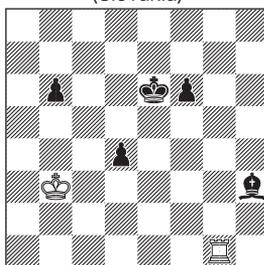
Nakajima: Many variations and I enjoyed

them.

Tachioka: Cyclical threat is very nice.

Crisan: White must decide how to make the pawns b4 and f3 disappear. Three out of four possible moves are refuted, so the remaining one must be the key. A highly original conception!

F1213 Ľuboš Kekely
C+ (Slovakia)



H#2 (2+5)

b/c) bKf5/d7
Checkless Chess

a) 1. Kd5 Rd1 2. Be6 Rxd4#
b) 1. Ke4 Kc2 2. Bd5 Re1#
c) 1. Kc6 Ka4 2. Bd7 Rc1#

Author: Miniature. Minimal. Analogies.

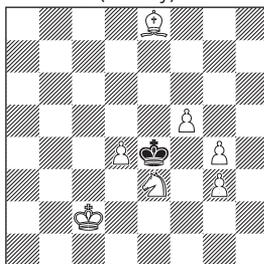
Nakajima: Easy but enjoyable.

Tachioka: Pinning by the black piece.

Sunouchi: Everyone can enjoy to solve them one after another.

Crisan: Three similar solutions on three different diagonals.

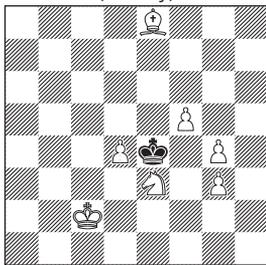
F1214 Ali Okan Pandar
C+ (Turkey)



H#2 (7+1)

b) -wSe3 +wRd5
Parrain Circe

F1214 Ali Okan Pandar
C+ (Turkey)



H#2 (7+1)

b) -wSe3 +wRd5
Parrain Circe

- a) 1. Kxe3 Kc3 [+wSe4] 2. Kxe4
Bc6 [+wSc2]#
b) 1. Kxd5 Bf7 [+wRe4]+ 2. Kxe4
Kd2 [+wRf4]#

Author: 2 times same piece exchange 2
times reborn, with switchback King moves.

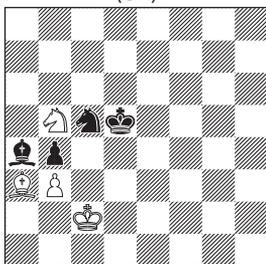
Nakajima: Nice bK switchback.

Tachioka: Spawn camping.

Sunouchi: Black K is best by the enemies
when he comes back.

Crisan: Humorous composition: the
captured white piece reborn on black King'
s initial square just to be captured again!

F1215 John Rice
C+ (UK)



H#3 (4+4)

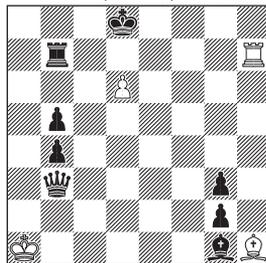
b) bPc5
Einstein Chess

- a) 1. Sd7=P bxa4=S 2. Kc4 Sc3=P 3. d5
Bxb4=R#
b) 1. Bxb3=R Bxb4=R 2. Rf3=B Kd3

3. Be4=S Rxe4=Q#

Tachioka: Effective position for both mates.
Crisan: Congratulations, Hajime, for
being the only solver! The final positions
in Einstein Chess are always difficult to
imagine.

Alexander Pankratyev
F1216 Anatoly Kirichenko †
C+ (Russia)



HS#3 (4+8)

b) wBh1→h8

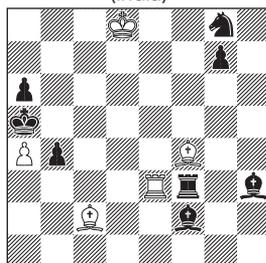
- a) 1. Rh2 gxh1=Q 2. Ra2 Rd7 3. Ra8+
Qxa8#
b) 1. Rxb7 Be3 2. d7 Bg5 3. Bf6+ Bxf6#

Nakajima: Nice wR movement.

Sunouchi: a) makes fantastic moves, b)
makes practical moves.

Crisan: The nice ambush of the white Rook
behind the promoting black Pawn is simply
delightful!

F1217 S. K. Balasubramanian
C+ (India)



HS#3 (5+8)

b) bKg8

- a) 1.Re8 Bd4 2.Bd1 Rd3 3.Bc7+ Bb6#
 b) 1.Bc7 Rf6 2.Bg6 Bh4 3.Re8+ Rf8#

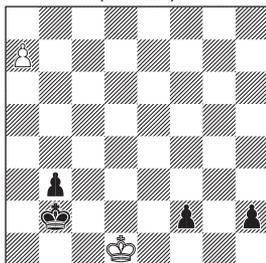
Author: Black Battery. Exchange of functions between wRe3/wBf4 & bBf2/bRf3. Reciprocal change of W1 & W3. Pin mates.

Tachioka: Fantastic pin mate and good contrast.

Sunouchi: Exciting mates with tricky discovered-counter-checks.

Crisan: Lovely mutual pin mates in both phases instead of the more common double check mates.

F1218 Sébastien Luce
 C+ (France)



HS#4.5 (2+4)

- 1...f1=S 2.a8=Q h1=Q 3.Qe4 Ka1 4.Kc1 Qh7 5.Qb1+ Qxb1#

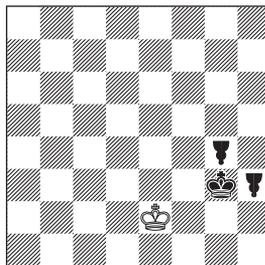
Author: Three promotions and bicolor Bristol.

Tachioka: Qs' long move.

Sunouchi: White Q devotes herself to black Q in the wonderland.

Crisan: I am always a big fan of kindergarten problems – you can never expect what will happen in positions featuring only Kings and Pawns!

Sébastien Luce
F1219C+ (France)
 Dedicated to Andreas Thoma



HS#5.5(*) (1+3)

Berolina Pawns g4 h3
 Monocolor black pursuit

- (*) 1.Ke3 Kg2 2.Kf4 Kf2 3.Kxg4 g2 4.Kh3 f1=Q+ 5.Kh2 Qg2#
 1...f3 2.Kf1 Kg4 3.Kg2 Kf5 4.Kg3 fg2 5.Kh4 h1=R 6.Kh5 g2#

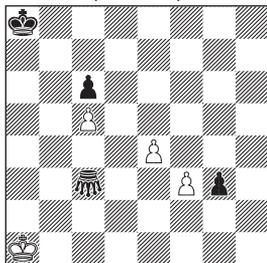
Author: Inspired by F1140 and F1141 of Andreas Thoma (in PP92), I wanted to create something with Berolina Pawns White royal march and mates by two different pieces of promotion. In both variations, with the condition, black is forced to play on g2 at the end. In second variation black promotion has to be to Rook not to Queen, to force h3-g2#.

Editor: Nobody could solve this.

Crisan: Under monocolor black pursuit, Black is forced to play on the square vacated by the previously moving black piece. To solve this problem you must first see how a black move to g2 could mate the white King.

F1220 Ľuboš Kekely

C+ (Slovakia)



HS#6 (4+4)

Grasshopper c3
Transmuted Kings

1.e5 g2 2.e6 g1=B 3.e7 Bxc5 4.e8=B Bd4
5.Bg6 c5 6.Be4+ Gc6#

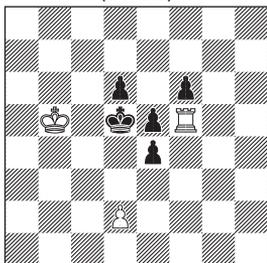
Author: Promotions to bishops. Mate from battery.

Sunouchi: Grasshopper declares for bishops to win or lose.

Crisan: Congratulations, Seiichiro, for solving this! The similar play by both sides unexpectedly ends in a discovered check mate.

F1221 Slobodan Šaletić

C+ (Serbia)



H=2.5 (3+5)

b) wPd2→d7

a) 1...Rxf6 2.Kd4 Rf3 3.d5 Re3 =
b) 1...d8=Q 2.Kd4 Qxd6+ 3.Ke3 Qd1=

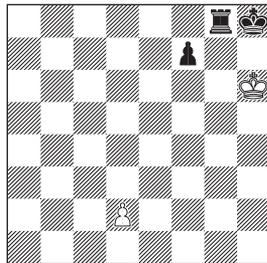
Sunouchi: Qd1= is exhilarating, then e-file Ps does nothing.

Crisan: I think the author's main intention

was to show a twinning paradox with the white pawn shifted from the 2nd the 7th rank. Can anyone present the same idea in a better setting?

F1222 Sébastien Luce

C+ (France)



HS=6 (2+3)

1.d4 f5 2.d5 f4 3.d6 f3 4.d7 f2 5.d8=S
f1=Q 6.Sf7+ Qxf7=

Author: In tanagra, double Excelsior to white Knight and black Queen. Ceriani-Frolkin. Black Pawn Rundlauf.

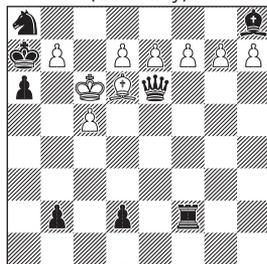
Nakajima: Nice ideal stalemate.

Sunouchi: Fortunately P on f7 suggests the aim of promotions.

Crisan: Although the stalemate is not quite ideal, the theme deserves further exploration. Who will be able to come up with the other promotion combinations?

F1223 Ralf Krättschmer

(Germany)



HS=6 (9+8)

Circe

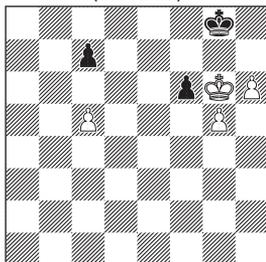
1.f8=B Rxf8(+wBc1) 2. gxh8=B Rxh8

3.d8=B Rxd8 4.exd8=B[+bRh8] Rxd8
5.h8=B Rxh8 6.b8=B+ Rxb8=

Editor: Nobody could solve this.

Crisan: An unbelievable task: 6 promoted Bishops are captured on the promotion squares! One to go directly in the anthologies.

F1224 Ľuboš Kekely
C+ (Slovakia)



SH#14 (4+3)

1.fxg5 5.g1=B 6.Bxc5 7.Bf8 12.c1=B
14.Bch h7#

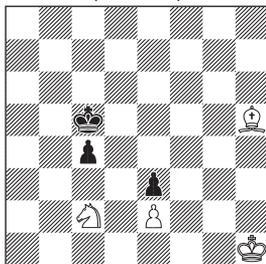
Author: Miniature. Excelsior. Promotions to Bishops. Ideal epaulette mate.

Shiomi: Simple and cute.

Sunouchi: Easily found promotions make me very happy.

Crisan: This is the most solver successful composition with 6 correct answers! Who can show the same theme with other black promotions?

F1225 Ľuboš Kekely
C+ (Slovakia)



SH#15 (4+3)
Circe

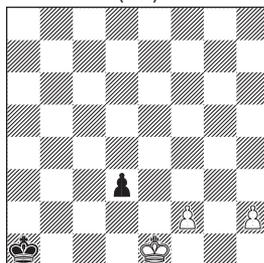
1.c3 4.Kxc2[+wSb1] 5.Kd1 7.cxb1=S
9.Sf3 10.Kxe2 11.Kf1 13.e1=B 14.Bf2
15.Se1 Be2#

Author: Miniature. Minor promotions. Ideal mate.

Sunouchi: I didn't think wS disappeared and wB made a miracle.

Crisan: Congratulations, Seiichiro! Who would think the wS must go away? Being able to think outside-the-box is a mandatory quality for solving fairy chess compositions.

F1226 Chris Feather
C+ (UK)



SH#16 (3+2)
Take&Make
Equipollent Circe

1.Kb2 2.Kc3 3.Kd4 4.Ke4 5.Kf3 6.Kg2
7.Kxf2-f4[+wPe4] 8.Kxe4-e5[+wPd5]
9.Kxd5-d6[+wPc6] 10.Kxc6-c7[+wPb7]
11.Kxb7-b8[+wPa8=B] 12.Kxa8-
h1[+wBg1] 13.Kxh2-h4[+wPh5] 14.Kxh5-
h6[+wPh7] 15.Kg7 16.Kh8 Bd4#

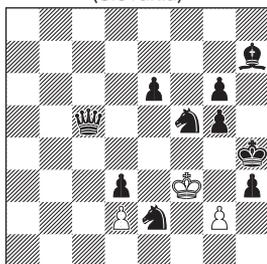
Author: 4 corners by bK.

Sunouchi: I was confused by 7.Kg1 ...
10.Kxd6 → d7(wPc8=R).

Crisan: A typical Chris composition: an out of the blue mate occurs after a dynamic play on the entire chessboard!

F1227 Ľuboš Kekely

C+ (Slovakia)



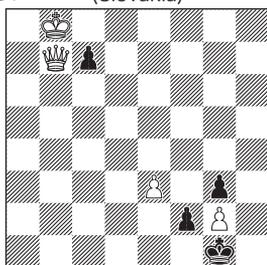
SS#13 (3+10)

2.Kxd3 3.Ke4 6.dxe6 8.e8=Q 9.Qxg6
11.Qxe2 12.Qf3 13.g3+ Sxg3#

Author: Excelsior. Clearing of the line.
Model mate from battery.
Sunouchi: Hard to imagine which blacks should be eliminated.
Crisan: A charming cross-check ending after a difficult sequence of moves.

F1228 Ľuboš Kekely

C+ (Slovakia)



SH=11 (4+4)

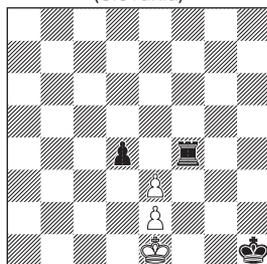
Checkless Chess

5.c1=Q 6.Qxe3 7.Qe4 8.Kxg2 9.Kf1
12.g1=B Qxe4=

Author: Meredith. Excelsior. Clearing of line. Minor promotion.
Sunouchi: Freeze blacks at the bottom after capturing wPs.
Crisan: Hard to see the final position, as the diagonal b8-h2 is initially blocked by the black pawns.

F1229 Ľuboš Kekely

C+ (Slovakia)



SHS+16 (3+3)

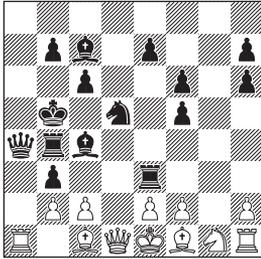
Relegation Chess

1.dxe3 3.Rb7=P 8.b1=B 10.Bxe2
12.Bh7=P 16.h2 & 1.Kf1 e2+

Author: Miniature. Excelsior. Minor promotion.
Sunouchi: Any piece can reborn from pawn in the condition.
Crisan: Is anyone able to show more relegations by the same (promoted) piece?

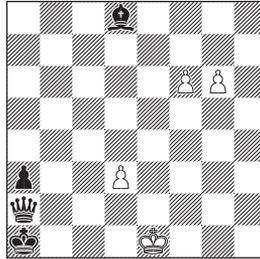
Congratulations to Seichihiro and Hajime for their brilliant solving performances demonstrated against a rather difficult set of originals. I am also impressed by your very good score, Masakazu. My encouragement and support to both Akira and Katsuhisa: please read the solutions and try to learn new tricks from the comments. To all of you: good luck in solving the fairy originals from this year!

R327 Hitoshi Yanami
C+ 屋並 仁史



Proof Game 25.5 (12+15)

R328 Paul Răican
(Romania)



-14 & #1 (4+4)
Proca Retractor
AntiCirce

Retro

Retro Editor

Naoki Matsuzaki (松崎直樹)

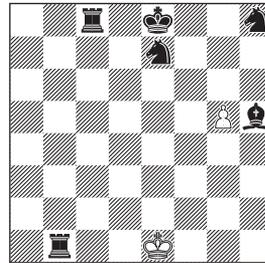
Judge 2021-2022

Vlaicu Crisan (Romania)

☆今回は PG と Retractor が 1 作ずつです。R327 は白が指した直後の局面で、白駒が初形位置に戻っています。黒が最後に駒を取ってから複数の黒駒が動いているので、白の成駒が続けて動いたことが読み取れると思います。どこで何に成ってどう動いたか考えてください。最後から逆算してみるのもよいと思います。まずは手数を計算して bSb8 がどうなったか突き止めてください。R328 は e8 を塞いで K で詰まします。同じような手の繰り返しですので長手数割に進めやすいと思います。6 段目の wP 二つの役割を考えてみてください。もし一手短い手順が見つかった場合は Forward Defense で逆に詰まされないか確認してください。どちらも易しくはありませんが、試行錯誤を重ねるうちに分かることもあると思います。一部だけでも構いませんのでぜひ解答をお寄せください。

Issue 95 (R318-321)

R318 Andreas Thoma
(Germany)



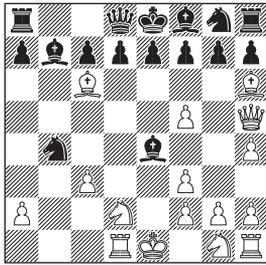
-3 & #1 (2+6)
Klan Retractor
AntiCirce

-1. Kg6xPh7(Ke1) Kg8xQg7(Ke8)+ -2.
Qd4-g7+ gxSh6(Ph7)+ -3. g4-g5 & 1.
Qd8#

bR が 1 段目にあるので、チェックに対して白駒の再生位置に動かして受けられないようにしておく必要がある。白駒を入手できるように、bK が白駒を取ってチェックし wK が再生位置の黒駒を取って逃げた局面に戻す。wK を焦点の g6 に戻しトリプルチェックの局面となる。再生位置の空いた K 同士は隣り合えないので、g8 から g7 の白駒を

取ったことになる。次に bP の駒取りを逆算するのだが、AntiCirce では同じ筋の白黒 P が相手を追い越した形で並ぶことがないので、戻る位置が限定される。最後は R が動くとして S が利く形にして Q で詰ます。他に e8 を塞いで K で詰ます手順も考えられそうだが、c1 に白駒を戻して bR を無力化しようにも、wPg5 が邪魔で戻れない。

R319 Henryk Grudziński (Poland)

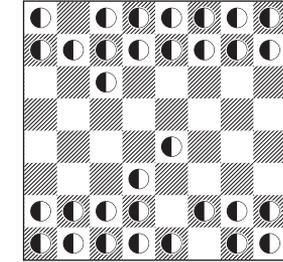


Proof Game 8.5 (16+16)
Circe Parrain

1. e4 b5 2. Bxb5 Sc6(+bPc3) 3. bxc3 Bb7(+bPb2) 4. Bxc6 bxc1=B(+bSd5)
5. Qh5(+wBg5) Bxd2+ 6. Sxd2(+wPf3) Sb4(+bBb1) 7. Be3 Bxc2 8. Bh6(+wPf5) Bxe4 9. Rd1(+wPh4)

bP は B になっており、白駒を取って動いたと考えられる。wPd2 を取った直後に wSb1 で取り返して f3 に再生したと考えると、c1 の黒マスで成った後、S の動きで白マスに再生されたことになる。wBc1 が動くには d2 の駒が邪魔なので、一旦取られた後に wQ の動きで右上に再生される。wPc2 を f5 に再生する前に白駒を左下に戻しておく必要があるのだが、wPf3 が邪魔で Q が戻れないので B を戻す。
太刀岡：B が戻るのが面白い。

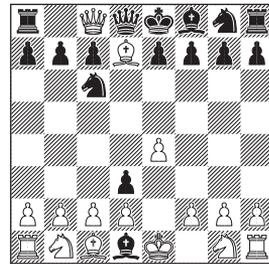
R320 Gregor Werner (Germany)



Mate after 6.5 moves (0+0+32)
32 undefined pieces
Back-home

1. e4 d5 2. Qh5 Bg4 3. Qf5 Bd1 4. Qc8 d4 5. Bc4 d3 6. Be6 Sc6 7. Bd7#

R320-sol

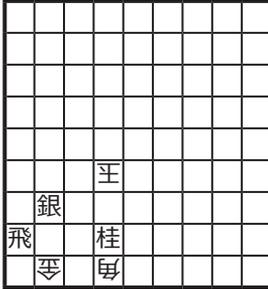


(16+16)

駒取りがないので P は元の筋にある。駒が初形位置に戻る手を優先しなければならないので、K が動いていないことや最後に動いた黒駒は bSb8 であることが推測できる。f1 が空いていて黒が詰んでいることから bSc6 の直後に wBd7 で詰ましたと考えられ、Q で Pin する手順と分かる。wQd1 と bBc8 が動いた後、初形位置に戻れないよう間に入る手順を経て相手の初形位置に行くことになる。Bd1 の前に Qc8 としてしまうと Bxc8 が優先される点に注意。

(Continued on p.39)

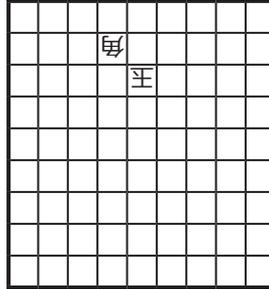
U311 FUJIWARA Toshimasa
藤原俊雅



▲ なし ▼ なし

協力詰 7手
b)87 銀⇔ 68 桂

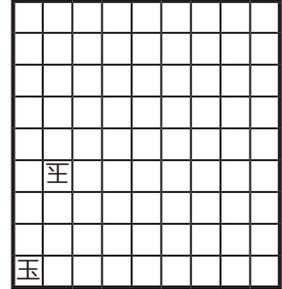
U312
Dolores von Nierenstein



▲ なし

協力詰 5手
透明駒 3+0

U313
Dolores von Nierenstein



▲ なし

協力自玉詰 6手
透明駒 5+0

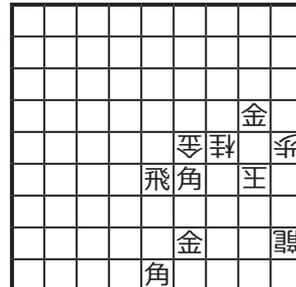
U314 KUROKAWA Tomoki
黒川智記



▲ 歩 12

安南詰 53手
利き二歩無効

U303 FUJIWARA Toshimasa
藤原俊雅



▲ なし

詰将棋
b) 15歩→ 16歩

Shogi

Shogi Editor

AIBA Takehiro (会場健大)

Judge 2021-2023

TACHIOKA Hajime (太刀岡甫)

Issue 95 (U303-306)

- a)28 角、27 玉、26 飛、同玉、37 金、16 玉、26 金まで 7 手。
- b)38 金、17 玉、26 角、同玉、37 角、17 玉、26 角まで 7 手。

作者：2つのバッテリーによる役割変換と、異なる駒による同一地点着手が狙いで、チェスプロブレムでいうところの Exchange of functions と Play on the same square をやった作品。ただの3手収束に見える可能性が高いのが難点です。

☆作者お得意のツイン。aでは飛角のバッテリーを序の王手と引き戻しに使い、角金で詰め上げ、bでは角金のバッテリーを王手と捨て駒に使い、飛角で詰ませている。また、aの手順では56の飛車を26に捨てて37金、26金での3手詰。bの手順では59の角を26に捨てて37角、26角での3手詰となっていて、使っているマス目も正確に一致させている。

☆これぐらいのテーマになってくると、説明なしで狙いを正確に読み解くのはたしかに難しくなってくるかもしれないが、意欲的な狙いをもった作品として完成されているのは疑いようがない。

塩見：捨てる駒とメイトする駒が入れ替わる。

中嶋：見事な Zilahi。

原岡：角と飛車の対比。

黒川：3手収束に意味を持たせるツインは斬新。

水野：ツインですが手順は全く違いますね。

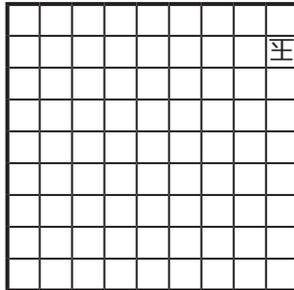
☆作者への期待か、辛口の意見も。

九尾：技術的には優れていると思いますが、手順的には平凡かと。

太刀岡：対比にはなっているが収束がもっさりしていて冗長。

U304 KOUSAKA Ken

高坂 研



▲ 桂桂

協力誌 3 手

点鏡

透明駒 0+1

34 桂、--I、22 桂打まで 3 手。

☆34桂という手が王手になるためには、76に透明な角が馬がいなければならない。これを玉方はIと動かして王手を解除する。これはどの位置に動かしても王手解除となるので、この時点ではなにも情報をもたらさないが、次の22桂打で謎が解ける。ここに桂を打って王手になるということは、玉方の透明駒は88にいて、しかも馬である場合しかあり得ない。玉方の透明駒は76の地点から桂の利きで88に進んだのである。3手ながらルールをフル活用した作品だった。

作者：持駒を連続して打つのが必然なので、易しい筈。「点鏡+透明駒」としては、この辺が入門編だろう。

☆ところが、解答者の声を見るとなかなか難しかった様子。

吉田：88馬が見えるように。

黒川：どこに拠点を作るかが悩ましい。

原岡：88馬は動けない。

星野：24桂～12桂と行きたくなるが、ちょっとひねって34桂が素晴らしい。

太刀岡：短いのにかなり悩んだ。24桂～12桂打の紛れが良い。

☆98の透明駒が飛車であった場合に詰んでいないという味のいい紛れ。

☆ところで本作、担当が在庫でしばらくキープ

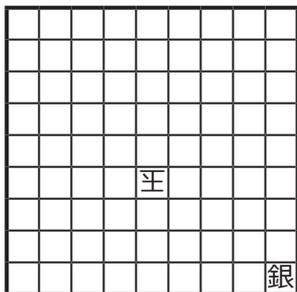
しておいたために……。

水野；どこかで見たような筋だと思ったら透明駒入門（フェアリー編）に載ってますね。

☆これは完全に担当のミス。大変失礼いたしました。

U305 KOUSAKA Ken

高坂 研



▲ 香

協力詰 5手
点鏡
透明駒 1+1

46 銀、55 玉、56 香、54 玉、
55 銀まで5手。

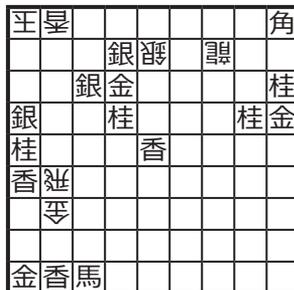
☆こちらは輪をかけて難しかったようで、正解者が少なかった。46 銀が王手になってかつ55に玉が上がるということは、64に飛車がいることになる。もし攻方の飛車だったなら、55玉には結局64からの王手がかかっていることになってしまうため、これは玉方の飛車。ということで玉方の透明駒が判明し、あとは攻方の透明駒が邪魔しないような詰上がりを考えればよい。55への着手を決め手にするのがいいアイデアで、56香、54玉と玉を香にしておいて55銀が決め手。55の地点は点鏡における特権的な場所で、もう1枚の透明駒はどこで何をしてもこの詰上がりに影響を与えない。46に何かいて64の飛車が55に利いているという可能性はその46に先ほどまで銀がいたためにあり得ない。

太刀岡：55の特殊性を利用。

星野：46銀の初手と詰上りを結び、55玉がファインプレイ。

U306 DEGUCHI Nobuo

出口信男



▲ なし

詰将棋

Transmuted King

83 桂、同飛、同銀生、96 玉、
97 馬、同玉、98 飛、同金、
同金、同玉、99 金、同玉、
52 香成、11 玉、21 桂成、同竜、
12 銀、同竜、同桂成、同玉、
13 飛、32 玉、42 成香、同玉、
53 銀成、41 玉、52 桂成、31 玉、
42 成桂、21 玉、32 成桂、同玉、
23 金、31 玉、42 成銀、同玉、
33 金、41 玉、52 金、同玉、
43 金、51 玉、62 銀生、同玉、
53 金、61 玉、72 銀生、同玉、
63 金、71 玉、81 香成、同玉、
72 金、91 玉、82 金、同玉、
83 香まで57手

中嶋：期待通りの煙詰。

☆この作者でこのルールといえば煙詰。しかも全編に趣向感が漂っておりまったく緩みない。最初は駒交換をしながらの縦追いで99まで玉を運び、11角の王手でびゅーんとそれを飛ばして舞台は右上へ。ここから飛車の横利きを使った小駒での送り趣向になる。銀を動かす際には、玉が横に戻る手を指せないよう不成で王手しなければならぬのも気が利いている。このおかげで、3手目の銀の移動が不成でなければならぬという伏線も入り、序と収束までをつなぐキーができたことも大きい。完全で本作を送り出せたことを喜びたい。

太刀岡：序の銀生が伏線になっている。
 黒川：収束の構想から見事な逆算。21 桂成に同玉の変化で 44 へ追って詰ます手順の発見で苦戦。62 や 72 が生でないといけないのも上手い。

吉田：1,2 段目の送り方。金銀の違いが楽しめる。

星野：13 飛からの送り手筋が見えるので安心して攻められるが、54 玉と上部に逃がす変化はヒヤヒヤする。

泰永：出口氏の天竺煙詰としては、修正図を除いて 22 作目と思います。歩なし煙詰では 2 作目です。例によって序盤が少し考えさせられます。97 馬の変化を読み切って 52 香成と銀を取ったところで、合駒が効かないことが分かり、本筋との安心感が得られました。煙詰だから 21 桂成に対しては同龍に決まっているはずなのに、同玉と取られる手に苦戦してしまいました。13 飛車を据えてからは、気持ちのよいピリ辛風味(銀成だと逃げられる)の横送り趣向でスッキリ詰みました。propara 会では現役作家に対して、最高傑作がどうか失礼なことをいってすみませんでした。今後とも新作の発表を待っていますので、よろしくお願いします。

☆投稿はたくさんいただいているのですが、担当の能力不足で検討が追いついておりません。理解できたものから選題しているというような状況です。出口さんと楽しみにしておられる解答者の皆様には申し訳ない限りです。

R コース 続き

(Continued from p.35)

則内：Pin-mate impressed me after I tried a few possible moves.

吉田：wQ と bB の巧みな入れ替え

R321 Gregor Werner
 C+ (Germany)



Proof Game 12.5 (13+11)
 #Color, Duelist

1. d4 d6 2. d5 Be6 3. dxe6 h5 4. exf7+ Kd7 5. fxc8=R Ke6 6. Rxh8 Kf5 7. Rh6 Kg4 8. Rg6+ Kh4 9. Rg5 a5 10. Rxa5 Rxa5 11. a4 Rxa4 12. Rxa4(a4=b) Ra8 13. g3+

チェックメイトとなった場合、K に利いた駒の色を変えて続行するルール。途中黒が詰んだ局面を経由したと考えられる。最終手は g3+ で、メイトではないので駒の色は変わらない。この手を戻すと、bRa8 が wRa4 であれば詰む形になる。黒駒の配置から wPd2 が g8 まで進んで成ったことが分かる。成駒の種類は、直後に Ke6 と指せることと、bKh4 の直後に bK を動けなくして次に動く黒駒を切り替えることから R となる。

Problem Paradise

Informal Tourney Award

Fairies 2014

Judge: Nikola Predrag

I must thank the fairies-editor Vlaicu Crisan for entrusting me the judging task. Solving, analyzing and understanding the entries was a pleasure without requiring too hard effort in general.

But when it came to evaluating and comparing the problems in order to rank their quality with regards to the whole tourney, it became unexpectedly hard. And the final task, to expose and explain the essential points of the award-making sufficiently and clearly but succinctly enough, well..., that looked hardly possible to me.

Here's where Vlaicu entered with incredible patience and understanding, encouraging and advising me to listen to my heart and let the readers perceive something of the personal and emotional approach of the judge to the art of chess composition, aside with the 'analytical research'.

Well, my judgement does speak my heart and I'd be sorry if my perception had missed the beauty. On the other hand, I indeed feel sorry when my pleasure is spoiled by perceiving a flaw or a missed opportunity, but should I blame my perception for 'not missing' the fails?

Then, through the analysis and comment, I just try to expose what affects my impression.

A fair judgement of a tourney with diverse stipulations and fairy elements requires the criteria based on the principles which might appear as being common for all that diversity. Chess problem is a medium in which some idea is realized. A convincing realization looks for the optimal balance between the idea and the medium. The features* like originality, intensity, depth, clarity, complexity and economy of the both, idea and medium, should smoothly integrate into one whole.

Many entries merely illustrate the respective fairy rules without presenting any idea endowed with the mentioned features*, except perhaps for the apparent economy. The question was whether a "perfect economy" alone might suffice for the award.

On the opposite side, the realizations of some rich and complex ideas heavily violate the (economical) nature of a particular genre, misusing the medium and compromising the final piece of art as a single entity.

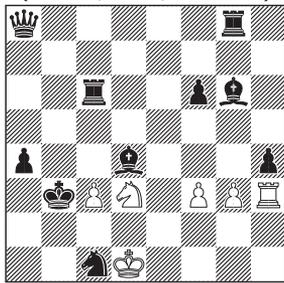
A dozen of entries looks convincing enough and two dozens of the others verge a doubtful balance between the idea and the realization.

57 problems (and 3 versions) were published in the tournament, 21 miniatures and 36 with more than 7 pieces, which makes two sections of the award.

More than 7 pieces

1st Prize

Pierre Tritten
S. K. Balasubramanian
F666 Vlaicu Crisan
C+(France/India/Romania)



H#2 2 Sols (6+10)
Take&Make

1.Rxc3 → c4 Sxc1 → a2 2.Qxf3 → f4
gxf4 → b8=R#
1.Bxd3 → b4 cxd4 → b2 2.Rxg3 → g4
fxg4 → g8=B#

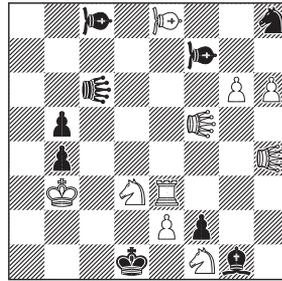
Extraordinary intensity of B2&W2 with reciprocal features related to the white halfbattery and beautiful minor promotions. wQ would be too powerful, which is not necessary for the final (either orthogonal or diagonal) check, but the Queen's O+D power would enable the check-parrying T&M capture with the 'Make-arrival' to g3.

The realization offers an incomplete mechanism for B1&W1, but subjective judgement puts this problem at the top

- by a whisker.

2nd Prize

F636v Hubert Gockel
C+ (version)



2#v (10+9)

Hurdle Color Changing Lion c6, f5, h4; Hurdle Color Changing Bishop-Lion c8, e8, f7

1.hLIf5-a5[b5=w]? zugzwang
1...hLIc6-a4[b5=b]
2.hBLe8xa4[b5=w]# (A)
1...hLIc6xh6[g6=b]
2.hLIh4-a4[b4=w]# (B)
1...hBLf7-h5[g6=b]
2.hBLe8xh5[g6=w]# (C)
1...hBLf7-a2 2.hLIa5-h5[b5=b]# (D)
but 1...Sh8xg6!

1.hLIf5-h7[g6=b]! zugzwang
1...hLIc6-a4[b5=w]
2.hLIh4xa4[b4=w]# (B)
1...hLIc6xh6[g6=w]
2.hBLe8-a4[b5=w]# (A)
1...hBLf7-a2 2.hBLe8-h5[g6=w]# (D)
1...hBLf7-h5[g6=w]
2.hLIh7xh5[h6=b]# (C)
1...Bg1-h2 2.hLIh4-h1[h2=w]#
1...g6-g5 2.hLIh4-d8[g5=w]#

To change or not to change the

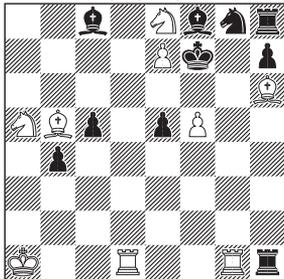
hurdle's color? All color-combinations of Pb5/g6 would suit White in the duels between w/b Andernach Lions, providing that hLI5 could play to h5.

But White must carefully choose the piece which plays to a4/h5, depending on the color-effects of the key in try/ solution. The resulting 2 pairs of reciprocal changes aim to the very top of this tourney.

Unfortunately, the realisation shows some unconvincing points, as the technical hBLC8 and both keys. hLIh4 is acceptable as a member of the family, despite the thematically irrelevant Andernach power. The artificially added non-economical and non-thematic variation still doesn't amend that thematic irrelevance. The author's preference should be respected but the costs in economy are evident.

3rd (Special) Prize

F620 Ayako Okaya
C+ (Japan)



#2 (9+10)
BackToBack

- 1.Sc4! (2.Sc4d6#)
- 1...Pc3/Bb7/Kxe8/Rxh6
- 2.exf8=B/exf8=R/exf8=Q/exf8=S#

Well used fairy condition for the white A UW differentiation.

The BTB pair Bb5/Pb4 serves nicely for the useful/harmful effects of the defence 1...b4-c3 (mobilizing wB which now guards the immobilized but interfering wS).

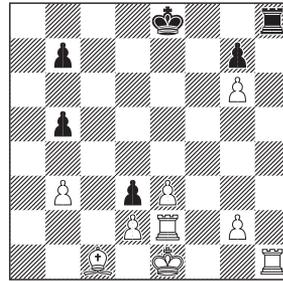
In the try, only Black uses the power of wBb5 for the refutation 1.Sb7? c4! 2.exf8B+? Kxe8!, since wB would regain its own power too late in the threat 2.Sd6+ b4xd6! 3.exf8B#, for using the interference on c4.

A bit more from wBb5 is missing and bRh8, bSg8, and wRg1 are very poorly used. All that could have been better and then might have equaled the winners.

Special Prize

Ofer Comay
Paz Einat

F631
C+ (Israel)



HS#5.5 b) wPd2→b4 (9+6)

- a) 1...0-0 2.Rg1 Kh8 3.Ba3 Rg8 4.Bf8 b4 5.Kf1 b5 6.Re1 Rxf8#
- b) 1...Rg8 2.0-0 d2 3.Kh1 d1=S 4.Rg1 Sxe3 5.Bxe3 Kf8 6.Bb6 Rh8#

Thematic play looks as a stubborn and mechanical insisting on the idea,

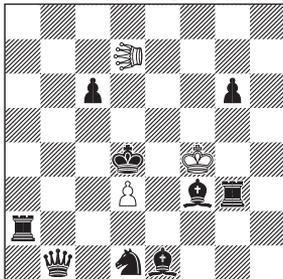
supported by the diverse and clumsy additional play. Of course, the repetition of the same elements with exchanged colors, without changing the stipulation, is a demanding task.

I would call it a "pseudo-duplex", since the exact W/B exchange of the manoeuvres suggests that the goal is to mate bK in one phase in the same way as wK is mated in the other phase, e.g. a)4.Rh1#; b)5.Rxe3+ Kf8 6.Rf1#. And there's the paradox, the goal is nevertheless the same - a mate to wK.

A certain far-fetched intensification of functions and purposes for that additional 'supporting' play is present, although not clearly exhibited. Since this makes a half of the play, the integrity of the problem is partially blurred. And yet, the purpose is fulfilled - the demanding original concept is perfectly recognizable.

1st Honorable Mention

F629 S. K. Balasubramanian
C+ (India)



HS#3 2 Solutions (3+9)
Take&Make
Locust d7

- 1. Kxg3 → g1 Bg4 2. Lxg4f1 Sf2
- 3. Lxf2 → e5+ Bc3#
- 1. Kxf3 → h1 Rg4 2. Lxg4h2 Bg3
- 3. Lxg3 → e5+ Sc3#

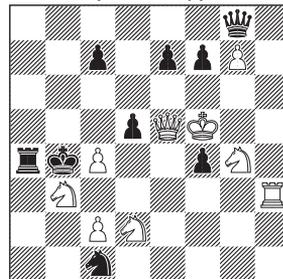
The reciprocity of functions in each of 2 black pairs of pieces is very neatly constructed. Rich 'geometry' for trivial chess reasons - a 'mechanical' use of sacrificed pieces, just for the sake of Take&Make.

T&M is not only about the real captures for transferring pieces all around the board - using virtual effects for motivating the right play could create a deeper layer of an idea. Set play (1...Se3 2.Kxf3-h1/Kxg3-g1 Sf5 etc.) shows that the real play needs a mechanism to provide a convenient additional move for White, and that requires all 4 black pieces in each phase. The relation between the set play and the real play creates a new dimension/layer (lack of tempo-move), giving a (rather faint) taste of strategic depth.

The piece which fires the battery in B3 doesn't participate in mate.

2nd (Special) Honorable Mention

F627 Manfred Rittirsch
C+ (Germany)



HS#2 b) bQg8→b7 (9+9)
Masand

- a) 1. Rh5! Se2! 2. Qxe7+[Se2,Pc7,Pf7=w] Qxf7[Pd5=w,Rh5,Qe7,Pg7=b]#
- b) 1. Sd4! Ra6!

2. Qd6+ [Ra6, Pc7, Pd5, Pe7, Pf4 = w]
 Qxd5 [Pf7 = w, Sd4, Qd6, Bc4 = b]#

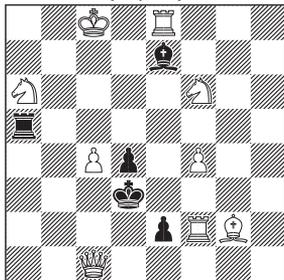
Black can mate only by double-check so in W1, wR/wS must unguard bK's flights and play to observe wK and change color after B2. In B1, bS/bR play to observe these flights and change color after W2.

Unfortunately, bSc1 is idle in b) and thus makes an external lever, which ruins the (reciprocal) completeness of thematic mechanism. With other (minor) remarks about the realization, this betrays the prize-worthy clarity of the beautiful idea.

(wSg4 is a "dummy selfblock" whose S-power motivates the thematic play, but actually by the cookstopping. It would be unpopular to take it as a flaw, but it makes the whole idea somewhat hollow in the very core.)

3rd Honorable Mention

F619 Ayako Okaya
 C+ (Japan)



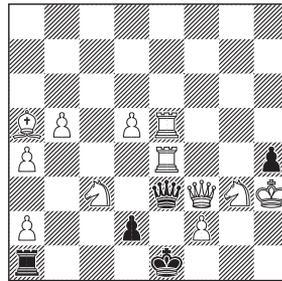
#2 (9+5)
 Lortap

1. Bh3! (2. Rf3#)
 1... Re5/e1=Q/e1=R/e1=B/e1=S
 2. Sb4/Sc5/Sb4/Bf5/Qc3#

Well used Lortap in 4 different fairy mates after AUW. 1...e1Q actively avoids triple 2.Sc5#!(Sb4?+/Bf5?+), since the pair of harmful O/D effects is corrected by the pair of useful D/O effects along the same 2 lines. There are no such "corrective" effects after simpler 1...e1R/e1B. wSf6 expensively guards 1 flight (e4) which still must be secondarily "ambushed" by the heavily expensive wRe8.

4th Honorable Mention

F651 Ayako Okaya
 C+ (Japan)



#2 (12+5)
 MirrorCirce

1. Rf4! (2. Qh1#)
 1... d1=Q/d1=R/d1=B/d1=S
 2. Sxd1/Qxe3/Sb1/Qxd1(+bSb1)#

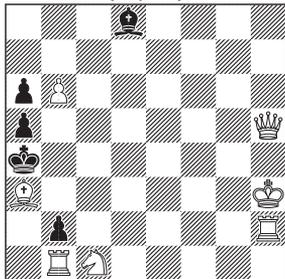
Black AUW. 1...d1Q looks as an orthodox variation, but points up that 2.Sxd1 is either illegal or bad after other 3 promotions, due to the virtual rebirth-effects of the condition which still enables one real fairy mate after 1...d1S.

4 wP's too roughly prevent half of a wS's "wheel". bPd5 would offer one more square to wSc3, with a fairy anti-

dual.

1st Commendation

F649 Ayako Okaya
C+ (Japan)



#2 (7+5)

Circe DoubleAgents

1.Bd6! (2.Qe8#)

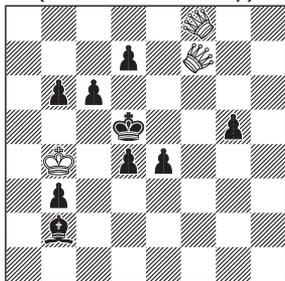
1... bxc1=Q(+bSb8)/bxc1=R(+bSb8)/

bxc1=B(+bSb8)/bxc1=S(+bSb8)

2.Rxc1(+wQd1)/Ra2/Qd1/Qg4#

2nd Commendation

F653 Klaus Wenda
Hans Peter Rehm
C+ (Austria & Germany)



h#2 (3+9)

b) bRb2 c) bSb2

Eagle f7, Sparrow f8

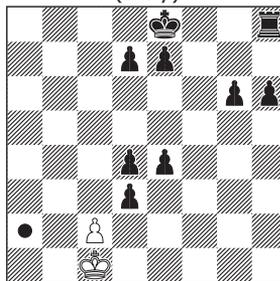
a) 1.Bc1 SWg8 2.Bf4 SWf6#

b) 1.Rf2 EAe8 2.Rf5 SWE6#

c) 1.Sc4 SWE8+ 2.Se5 SWD6#

3rd Commendation

F671 Alberto Armeni
C+ (Italy)



H#4.5 (2+9+1)

Imitator a2

1...c4[Ia4] 2.d5[Ia2] cxd5[Ib3]

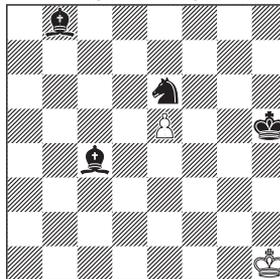
3.e5[Ib1] dxe6 ep.[Ic2] 4.0-0[Ic2]

e7[Ic3] 5.Kh7[Id2] exf8[Ie3]=S#

Miniatures

1st Prize

F662 Paul Răican
C+ (Romania)



SS+32 (2+4)

Circe

9.Kxb8(+Bf8) 20.Kxc4(+Bc8) 25.Kxc8

27.Kxe6(+Sg8) 28.Kf5 31.exf8=Q

32.Qf6 Se7/Sh6+

Capturing each bB twice, requires the longest route of wK, due to the amazing

control of the board by the reborn bB's. Only the 3rd visit to f5 will be the final one.

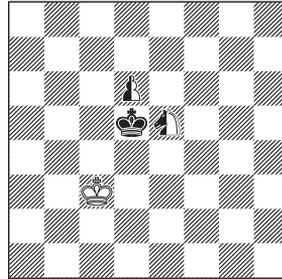
wK's route from h1 to b8 takes 9 moves via f5 and 10 via c3. But the reborn bBf8 would then prevent the shortest approach to c4, backwards via b4. So, 10 moves to b8 via c3-c4 would be the quickest way for capturing both bBs, if not for the rebirth of bBc8 which would completely disable access to b8. Therefore, Bb8 must be captured first (quickest route via f5) and the journey back towards Bc4 will even be prolonged, via e8. So, wK makes a round trip from b8 to b8, revisiting f5 & capturing Bc4, in order to capture it again as reborn on c8 (and thus attacking a6&b7). So, from c4 to c8, wK will have to go via b6-a7-b8.

The uniqueness of the play is marvelously achieved through both the real and virtual Circe-effects, emphasizing the tremendous economy of 4 black men dominating the board. And the so far extremely efficient 'cookstopper' Se6, gains by rebirth the main thematic role in the finale, where Circe gives immunity to wQf6 and leaves Black in Zz with only Sg8-e7/h6 being legal. The 3rd visit to f5, puts wK exactly where the stipulation needs it.

The brutality of annihilation which is intrinsic to the idea, happens only after the potential of bBs is well exhausted. After first two moves, the balance between the length and material is superb.

2nd Prize

F654 Semion Shifrin
C+ (Israel)



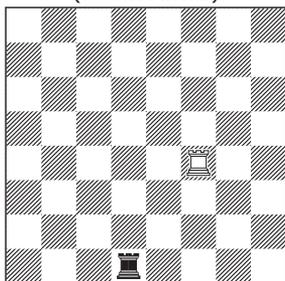
H#2.5 2 Sols (1+1+2)
AntiSuperCirce Parrain Circe
Neutral Se5 Neutral Pd6

1...nSc4 2.Kxc4(bK → a3) Kc4(+nSc5)
3.dxc5(nP → b1=nQ) nQa1(+nSb5)#
1 . . . n S c 6 2 . K x d 6 (b K → c 1)
nSd8(+nPe8=nR) 3.nRxd8(nR → a6)
nRa1(+nSd3)#

Very fine balance of the phase-variations of general strategy. ASC-rebirth of bK in B2, proper PC-rebirth of a Neutral (piece) in W2, ASC-rebirth of the mating piece in B3 carefully adjusted for the final checking-PC-rebirth of nS in W3. Varied promotions using respectively ASC/PC rebirth. So, Black twice captures the Neutrals and White twice re-boards them. Choosing between the quality and the quantity could be tricky, depending on the taste. 3 solutions, with nS on a5 (instead of e5), may look pretty tempting. Partial W/B exchange of strategy and the other Neutral playing the mating move, would show an interesting inversion, with a more complex balance.

3rd Prize

F657 Peter Harris
C+ (South Africa)



HS#3 (1+1)

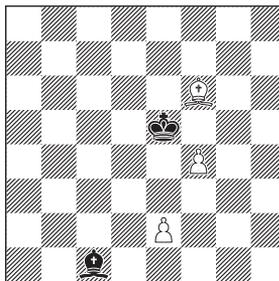
- a) ChameleonChess
Sentinelles Pionadv
b) ChameleonChess Sentinelles
Royal Rs f4 d1

- a) 1.rRf3=rQ(+bPf4)+ rRg1=rQ
2.rQe4=rS(+bPf3) rQg2=rS
3.rSf2=rB(+bPe4) e3#
b) 1.rRf7=rQ(+wPf4) rRh1=rQ
2.rQg6=rS(+wPf7) rQh7=rS 3.f8=B
rSf6=rB(+bPh7)#

Here, the economy of Sentinelles is exemplary - no idle Pawns. The produced b/w Pf4 reciprocally blocks/guards b/w flights, which is used for the Zz/mates. Such a link was lacking in No.641. W/B exchange the final chameleon-phases of Royal pieces which mutually guard flights for Zz/mate. Diversity of mates, by moving or by producing bP, adds to the richness of hs# stipulation (3.f8B is a "dummy selfblock promotion")

1st Honorable Mention

Peter Harris
F669 C+ (South Africa)
Dedicated to Tadashi Wakashima



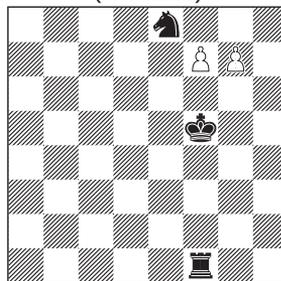
H#2.5 2 Sols (3+2)
AntiCirce Isardam

- 1...Bd8 2.Kf6 f5 3.Bg5 e3#
1...e3+ 2.Kd6 Bc3 3.Bxe3[bBe3 → f8]
Bb4#

Isardam spike, enriched by preventing bB to observe the wB's AC-rebirth square c1. Much simpler mates than in No.621 but the play and functions of wP's show the contrasting features of the strategy that comes out from the depths of this particular fairy combination.

2nd (Special) HONorable Mention

F621 Eric Huber
C+ (Romania)



H=2 (2+3)

- b) bSe8→h8
c) bRf1→h8

Isardam AntiCirce

- a) 1.Kg4 g8=R 2.Rg1 fxe8=Q(>Qd1)=
- b) 1.Kf4 f8=R 2.Kf3 gxh8=Q(>Qd1)=
- c) 1.Kg6 g8=S 2.Kh7 fxe8=R(>Rh1)=

wQ interferes on 1st rank, preventing bR's observation of a1, to fix/pin bK to a white square and observes bK to pin bR to the bK's file, while wR pins bR to 1st rank (bR observes h1) and also spikes bK to a same file. Interdependence of b/w play is visible in the order of black moves, determined by Isardam. These complex relations make a)&b) twins.

Twin c) just doesn't belong here and should be forgotten and the "dummy bS", "moved" by the twinning, spoils the apparent economy.

The mechanism works for 6 moves in 2 ways which end in 2 (exact) echo positions*. Then, the rest of one phase, makes the rest of the other phase redundant. So, there's content for more than 1 but less than 2 solutions.

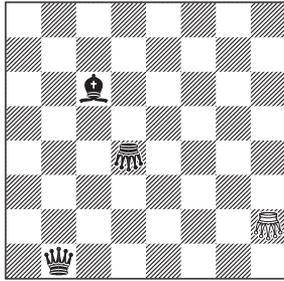
Before the brutal immobilization of bQ, by anihilation in the very end, there's nice activity of bQ and the finally pinned bB (still, pinning both bQ&bB would be more subtle).

The stipulation is not convincing/pure, pser-h==11 works as well, showing how heavily everything is limited. Also, by the last 2 moves, Black forces White to stalemate Black, including Auto-pat.

*However, the forward/backward 6-moves-symmetry is amusing!

3rd (Special) Honorable Mention

F635 Cornel Pacurar
C+ (Canada)

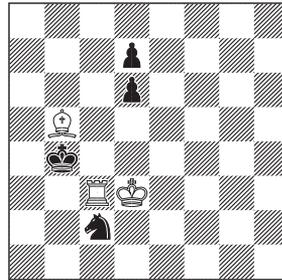


PSH=11 2 Solutions (1+3)
SAT
1+1 Royal Grasshoppers-2

- 1.Bg2+ rG2e2 2.Bh3 3.Be6+ rG2e8
- 4.Qb5+ rG2e4+ 5.Bg4 6.Qc4 7.rG2a4
- 8.Qd4 9.Be6+ rG2b4 10.Bc4 11.Qe4
- rG2xe4=
- 1.Bd7 2.Bh3+ rG2h5 3.Qd1 4.Bf5+
- rG2d5+ 5.Bd7 6.Qd3 7.rG2d1 8.Qd4
- 9.Bf5+ rG2d2 10.Bd3 11.Qd5 rG2xd5=

4th Honorable Mention

F665 Vito Rallo
C+ (Italy)



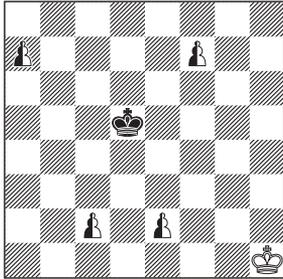
H#2 3 Sols (3+4)
Take&Make

- 1.Sd4 Kxd4 → f3 2.Kxb5 → f1 Rc1#
- 1.Sa3 Ba4 2.Kxa4 → d1 Rxa3 → b1#
- 1.Ka5 Kc4 2.Kxb5 → a4 Rxc2 → a1#

Very efficiently used captures of wB&bS for 3 simple echo mates.

Special Honorable Mention

F622 Ayako Okaya
C+ (Japan)



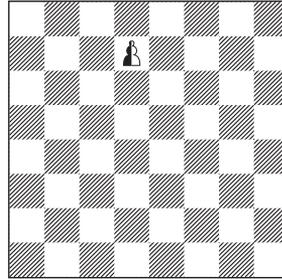
H#2.5 (1+1+4)
Transmuted Kings

1...f8=nQ 2.e1=nR+ nRe4 3.c1=nS
a8=nB#

Good economy of moves, 4 for AUW plus 1 extra for the model mate involving 4 neutral pieces. h#3, with the introductory 1.nPe3-e2, might add a bit more for the solvers, but at cost of the moves-economy. The fairy nature of nPa7 is redundant but wPf7 would cause a cook and a dual 1...f8R. Of course, 1...f8=nQ!(=nR?) is the point of the idea, the "white part" of nQ must attack a8 but the "black part" must not be able to capture there. Insisting on wPa7 as on a "sufficient orthodox force" would be a rather bureaucratic approach.

Special Honorable mention

F645 Peter Harris
C+ (South Africa)



Ser-#6 (0+0+1)
Sentinelles Pion Neutre
Royal Chameleon nP d7

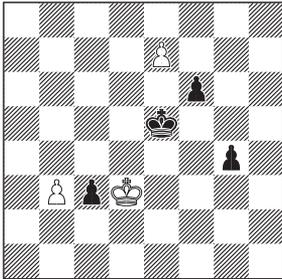
1.d8=nrcB 2.nrcBe7=nrcR
3.nrcRg7=nrcQ[+nPe7]
4.nrcQg6=nrcS[+nPg7] 5.e8=ncS
6.nrcSh8=nrcB[+nPg6]#

The beauty and economy perhaps wouldn't suffice for a single solution in only 6 half-moves, if there was the condition ChameleonChess, when 5.e8=nS would be an ordinary flight-guard with the automatic selfcheck effect 6...nSxg7=nB+??.

But the exact way the problem was published, gives 5.e8=ncS!(nS?) as the motivated CHOICE of the promotion into CHAMELEON nS.

Special Honorable Mention

F633 Ayako Okaya
C+ (Japan)



SS#10 (3+4)
Circe Turncoats

1.e8=S 2.Sxf6(+wPf7) 3.f8=R 4.Rc8
5.Rxc3(+wPc7) 6.c8=Q 7.Qxg4(+wPg7)
8.g8=B 9.Bc4 10.Qf4+ Kxf4(+bQd1)#

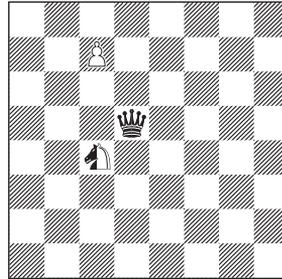
The elegant appearance of AUW is spoiled by the superfluous presence of wS after 2nd move - quite a flaw, since Black doesn't oppose till the end.

However, wP on any square on 7th rank but e7, would produce shorter solutions. So, to avoid checking bK, 1st promotion must be 'wasted' on producing another wP to promote wR.

Thus the flaw is partially justified by creating the additional virtual content that nevertheless looks more as a non-economical tool to show AUW than as a clearly convincing intended idea.

1st Commendation

F641 Peter Harris
C+ (South Africa)



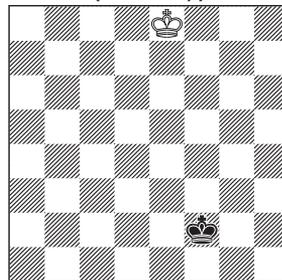
H#3 (1+1+1)

a) Sentinelles
b) Sentinelles Pion Advers
Royal Pawn c7
Royal Queen d5
Neutral Knight c4

a) 1.rQe6[+bPd5] nSe5[+wPc4]
2.rQd6[+bPe6]+ c8=rQ
3.nSg6[+bPe5] c5#
b) 1.rQd4[+wPd5] nSa5[+bPc4]
2.rQa7[+wPd4]+ nSb7[+bPa5]
3.nSc5[+wPb7] c8=rS#

2nd Commendation

F670 Andreas Thoma
C+ (Germany)



H#4 b) wKf6 (1+1)

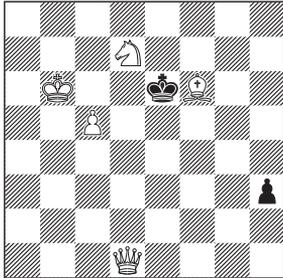
WhiteMaxi Sentinelles

a) 1.Kg2[+bPf2] Kd7 2.f1=R

Ke8[+wPd7] 3.Rf2 d8=Q 4.Kf1[+bPg2]
 Qd1#
 b) 1.Kg1[+bPf2] Ke7[+wPf6] 2.f1=Q
 Kf8[+wPe7] 3.Qg2 e8=Q 4.Qh2[+bPg2]
 Qe1#

3rd Commendation

F648 Pietro Pitton
 C+ (Italy)

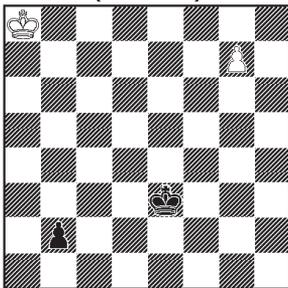


#2 (5+2)
 Vertical Cylinder

1.Qb1! (ZZ)
 1... Kf7/Kd5/Kxd7 2.Qb3/Qh1/Qxh3#

4th Commendation

F628 Eric Huber
 C+ (Romania)

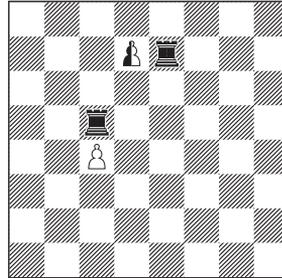


HS# 2.5 b) wKa8→d5 (2+2)
 Vogtländer
 Bicolores

a) 1...b1=S 2.g8=B Sc3 3.Bd5+ Sxd5#
 b) 1...b1=R 2.Kc4 Rb6 3.g8=Q+ Re6#

5th Commendation

F647 Peter Harris
 C+ (South Africa)



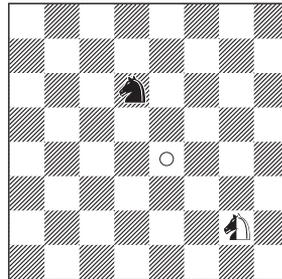
Ser-#8 (1+2+1)

Sentinelles Pion Advers
 Royal Chameleon nP d7

1.d8=nrcQ 2.nrcQd3=nrcS
 3.nrcSb4=nrcB[+bPd3]
 4.nrcBxc5=nrcR[+bPb4]
 5.nrcRa5=nrcQ[+bPc5]
 6.nrcQb6=nrcS[+bPa5]
 7.nrcSa4=nrcB[+bPb6]
 8.nrcBb5=nrcR[+bPa4]#

6th Commendation

F660 Peter Harris
 C+ (South Africa)



5→SS#1 (1+1+1)

b) 5→SS=1
 Maximummer Chameleon Chess
 Neutral Royal Sg2 Imitator e4

(Continued on p.81)

第 18 回 International Solving Contest

2022 年度の第 18 回国際ソルビング・コンテストは、1 月日に世界各地で一斉に行われた。参加国数は 20、参加者数はカテゴリー 1 が 94 名、カテゴリー 2 が 166 名、カテゴリー 3 が 325 名で、計 585 名の参加があった。

東京での競技会には、カテゴリー 1 に 14 名、カテゴリー 2 に 3 名、カテゴリー 3 に 1 名の参加があった。初参加は、カテゴリー 1 の藤原俊雅さん、前嶋啓彰さん、黒田裕之介さん、カテゴリー 2 の井上徹也さん、太刀岡甫さん、高木秀和さん、カテゴリー 3 の井上聡美さん。これからも参加をお待ちしています！

カテゴリー 1 では、青嶋未来さんが 3 度目の 1 位になった。世界ランクでは 94 名中 37-38 位。第 2 位は黒川智記さん。第 3 位は中村龍二さん。

ここでは、それぞれのカテゴリーで 1 位になった方々に参加レポートを書いていただいた。

なお、問題とその正解、および成績について詳しく知りたい方は、次のページからリンクをたどってください。

<https://www.wfcc.ch/category/isc/>



Category 1 参加レポート

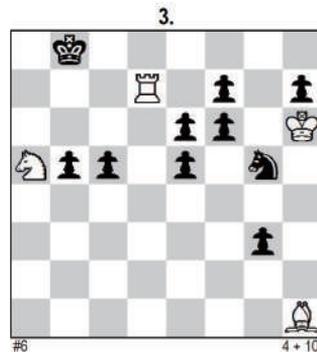
青嶋未来

ISC には 3 年ぶりの参加となりました。駅から歩く間、懐かしい風景だなと思いながら会場に向かいました。

過去の傾向から、私は Helpmate と Selfmate が苦手だったので、その 2 つを中心に問題を解き、準備してきました。

しかし、いきなり 2 問目の変化を書きそびれ、減点となりました。正直言えば、変化を 5 個書いて、1 個 1 点だろうと思い、そこで満足してしまいました。大雑把な性格が災いしましたね。(笑)

3 問目は面白い問題だったと思います。



白が RBN でどうメイトに持ち込むかで、手は限られているので難しくないだろうと見た瞬間思いました。

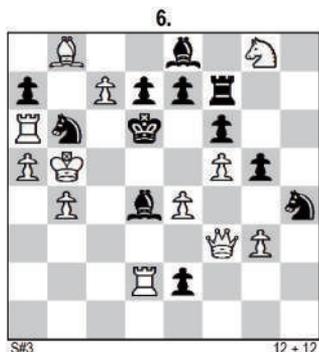
ですが、10 分以上考えたものの全くメイトにする形が分かりません。しばらくして、

1. Ba8 という妙手を発見します。指しチェスでは見たことなかった筋なので、感動しました。1... Kxa8 2.Nc6 は Ra7 が受からないのですが、1... Kc8 で逃れてしまいます。もう工夫必要で、R を e7 に運んでから Ba8 とすればメイトだと気付きました。

しかしながら、1... Kc8 の変化を書かず、減点となりました。2.Bc6 で早くメイトになるだろうと思いつき、あまり考えることなく次に進んでしまいました。

5問目のヘルプは解けませんでした。白キングを使ってメイトを目指す手順を考えたのがいけませんでした。冷静に考えれば、黒キングが中段でメイトになる形が難しい上に、白キングが黒のビショップをかくぐって上げるのは無理がありますね。

6問目のセルフメイトが解けたのは良かったです。



黒キングが動いて d ポーンを突かせてメイト、というパターンになり、クイーンを上手く使う、というのは分かりましたが、1.Qb3 Nxf5 は後続がありません。正解手に対する 1... Nxf5 の変化が、クイーンをもう一回動かす手でかなり盲点でした。30 分近く考えてようやく見えたのを覚えています。前回、前回回参加した際は全く解き方が分からず放置していたので、今回解けたのは収穫だった

かと思います。

1 ラウンドが終わり、結果を見ると 2, 3 問目が部分点だったことを知り、正直がっかりしましたが、気を取り直して 2 ラウンドに臨みました。

7 問目は 2 分程で解答を書いたのですが、まさかの不正解でした。ナイトをどこに動かすかですが、正解手は平凡なので違うだろうと考え、e8 のルークを遮りつつナイトに当てる 1.Ne7 がびつたりの一手だと思ってしまいました。1... Nb4 2. Qd2 がメイトと錯覚したのがひどかったです。もう少し確認しなければいけませんね。

続く 8 問目。



黒キングの逃げ道を塞いでいるナイトは動かしたくない、クイーンも f ファイルから動かしたくない、と考えると e3 のビショップを動かすことになります。1.Bxc5 bxc5 は 2 手でメイトできないので、1.Bc1 が正解だと思いました。狙いは 2. Bb2 cxb2 3. Qxb2# で、黒のピースはパッシブで意外と防ぐのは難しいです。

午前中の反省を生かして変化を多く書こうと思いました。6 個書いたのですが 2 個抜けて部分点です。まさか 8 個もあるとは。(笑)

9 問目は白の駒が少なく黒キングにどのようにしてメイトスレットを作るのか苦慮しま

した。キーは見えたものの、1...Bd6,1...Ng5 の変化が分からず、部分点となりました。メイト問題で書き損ねではなく、分からなかったのは初めてで、かなりの難問だと思います。

10 問目は黒がビショップを盾に 1 段ずつ上がって行く手順が面白かったです。

11 問目は f7 と h7 のポーンをどうプロモーションするかという問題です。QQ と NN の順は見えたのですが、QN の順が見えませんでした。答えを見れば、さほど難しい手順ではないと思うのですが、色々な紛れがあるので、全て答えるのはなかなか難しいと思います。

12 問目は 20 分以上考えたのですが、全く分かりませんでした。Qc4 ~ Ba2 を狙う発想が浮かびません。これだけでも難しいですが、ルークを横に動かすにしても 1.Ra5 と 1.Rf5 の比較も難しく、答えを見ても納得するまで時間がかかりました。

今回の結果については、変化の書き損ねでの減点が多く、キーが見えてからは見直しなどもせず、雑になってしまったのが反省点です。苦手な Help と Self に時間を使おうと思いい、メイトとエンディングはなるべく早く解く作戦だったのですが、3 問目や 9 問目がなかなか解けず、詰まってしまったためにミスが増えていったのかと思います。

5 問目や 12 問目が解けなかったのは、発想が思い浮かばなかったのが、頭が固いなど痛感させられました。次回への課題だと思います。

今回は過去最多の 19 人が参加されましたし、藤井聡太さんが興味を示されているというニュースが出たりなどと、プロブレム界が盛り上がっていると感じました。私は今後も都合が合えば参加し続けようと思っております。ありがとうございました。



青嶋未来さん

Category 2 参加レポート

井上徹也

10 年以上前にかじった程度のプロブレム。何もかも忘れてしまったが、ふと思いついて解答競技に参加してみる事にした。今からプロブレムをやろうと思った動機は自分でもちゃんと分からない。詰将棋のネタが見つかるかも、という不純な動機もなくはないと思う。若い人たちが楽しんでいる姿を見て単純に自分でもやってみたく思っただけ、という気もする。

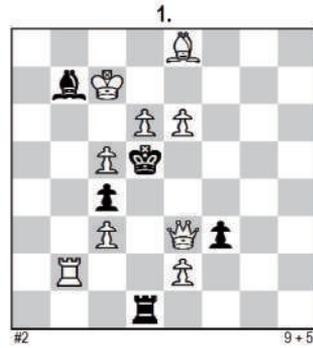
参加を決めたのが 11 月。本番までどうやってプロブレムに取り組もうかと考えていたが、折しも朝の情報番組で「大人の勉強成功への道」を取り上げていてこれだと思った。曰く、好きなことから始める、ハードルを上げすぎない、一人でやらない、との事。というわけで、好きな分野のブルーゲームからはじめ、クラスはカテゴリ 2 を選択し、Discord で繋がっている友人とたまに一緒に解く、という方針で少しづつやっていく事にした。当日会場で小林敏樹さんに「カテゴリ 2 はありえんでしょ」とツッコミを受けたが、上記の方針に基づいた選択だったのだ。断じてカテゴリ 1 の初形にビビったからではない。

しばらく練習を進めるとナイト・クイーンのリキが完全には認識できていない事に気づく。ブルーゲームは駒の動きが分かれば解けるが、メイトは駒のリキをきちんと把握しないと解図できない。将棋盤でロイヤルチェス駒の協力詰をたくさん作図するなどして段々と駒に慣れようとした。またこの間、高坂さんがTwitterで紹介している作品を考えるのが楽しみにもなっていた。

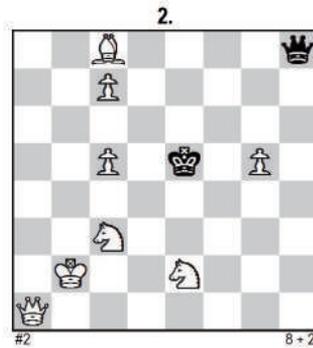
そうこうしているうちに本番まで2週間となった。少しは解く力も成長したかな、と過去問を見てみるが…思っていたような時間では全く解けない！ 景気づけにカテゴリ3を解こうとするが、1問目の簡素形オースドックスに躓くといった具合。数年分解いたが時間制限内に解けるのは半分くらいだった。特にエンドゲームは手も足も出なかったため追い込みで「チェスプロブレム入門」を読んで呼吸を学ぼうとした。

いよいよ本番当日。会場にぎゅっと並んだ一人ひとりが色とりどりのチェス盤を広げている光景は中々面白い。今回カテゴリ1で優勝された青嶋さんは目目が黒とグレーの盤を使っていて、黒基調のファッションとよくマッチしていた。隣の席の真鍋さんは机からはみ出さんばかりの立派な盤で、やりにくいのかなと不思議に思っていた。後で分かったのだが真鍋さんはこの度NCS(国際チェス連盟)の理事に就任されるとの事。チェスの実戦をする方なら大会と同じ環境が一番力が出るのだろう、と納得した。こんなとりとめのない事を考えている間に問題用紙が配られる。若島さんの合図で競技開始だ。

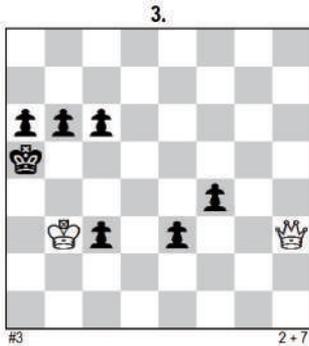
1R (Category 2)



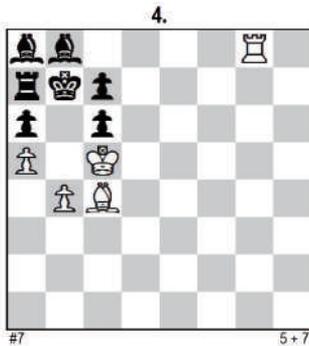
Rb5やBd7から検討するが唯一手で逃れる事を確認。しばらく眺めているとQf4が浮かぶ。自信はないが、2つのポーンを細なしにする手だからおそらく正解だろう。



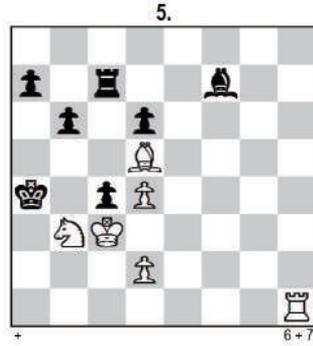
初手はQを動かすしかなさそうだが、見合いで黒Qに動かされて良く分からなかった。他を検討して戻ってきて漸くQa4だと次にe8に移動できる事を発見した。やはりQのリキは難しい。解けてみればシンプルに表現されていて好感が持てる作品。



場合の数が少なそうなのでほぼ総あたりで解く。

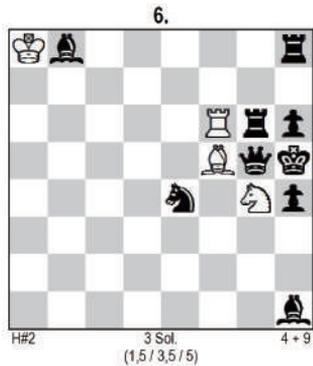


一目見て詰将棋で言うブルータス手筋だとピンとくる。最初 R を B で遮断する線で考えていたが上手くいかない。K が箱から外に出ない手で R の軌跡が限定される順を考えて比較的すぐ解けた。h3 のビショップをルークで遮断する筋はブルーゲームの解図で経験していたおかげで浮かびやすかったのかも。初形と終形を比較するとビショップのみが c8 に移動する構成で表現として好ましいと思ったが、プロブレム界でもありきたりの手筋と言われてしまうのだろうか？



初手 Ra1 から考えるが明らかに足りない。エンドゲームに苦手意識もあり一旦他へ。戻ってきて冷静になると Bc6、Rxc6、d5 が有力と気づき芋づる式に解決した。

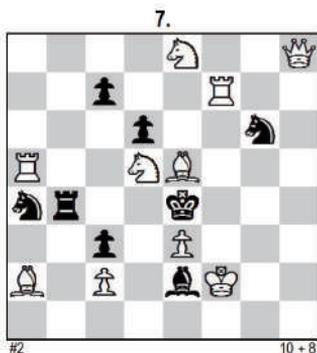
過去問でほとんど解けなかった分野が解けたので手ごたえを感じる。明解に詰みになり解けた感のある作品だが、若島さんによるとこの筋は 19 世紀からあるとの事。



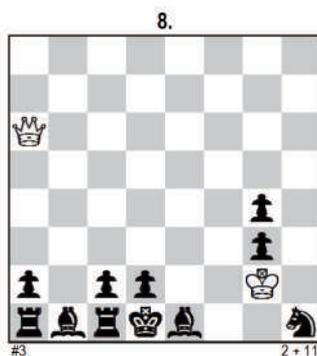
最初に Qxf6…の筋が見え、3 種の駒取りを 3 解で表現した作品とあたりをつける。実際にその通りでほどなく解決。

なんと時間を余して全解するという出来過ぎの結果。会場の一体感の中で解いて集中力が途切れなかったのか、はたまた問題が例年より易しかったのか。この調子で 2R も解けるとよいな、と思いながら気分よく早めのお昼を済ませる。

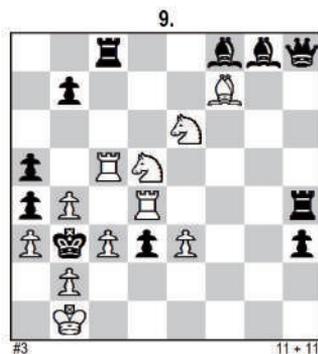
2R (Category 2)



過去問では2Rの#2は解けたり解けなかったりだったので、正解すれば儲けものくらいの気持ちで望んでいた。初手 Rxa4 がどう応じても詰むような気がして、ひとまず解答に記入。終了直前の見直しでもやはり詰んでいる気がしてそのまま提出。解答を見て飛び上がったが、Sxh8 で e5 が落ちるのを全くウツカリしていた。普通に考えてこの初手は変だ。もっと作者を信頼するべきだった！



白の駒が少ないのでこれは解けそう。g4 のポーンに狙いをつけて Qc4/Qe6 が浮かぶが Bf2/Sf2 で一手パスできればという局面。ここから c4 と e6 に移動できる唯一の初手 Qc6 を導いた。

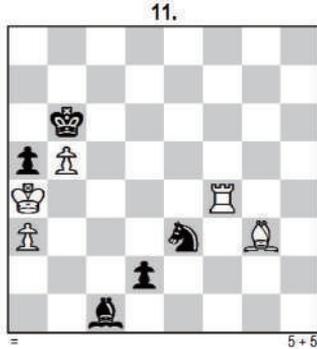


カテゴリ1の解説で若島さんに対称的な配置の読み解き方を実演いただいた。その手法を本作に当てはめると「Rを取らせてSが跳ねる」が線対称に出てきそうなので、Rを動かす初手は考えなくて済みそう。しかし解図時には最後はBとSの両王手かな、とイメージは出来ていても具体的な実現方法が分からず、初手にRを動かす手も含めて検討したためえらく苦労した。解けてみると4通りの応手により白Sの移動先が変わる見事な構成。カテゴリ2の中では一番気に入った作品である。

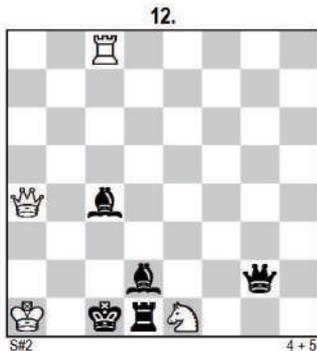


初手 Bg4 から考えたが c1=S で続かない。少し経って Bc8 に思い至る。同じく c1=S なら Ba6, Se5, Se3, Ke1, Sf3 で詰みだ。今度は黒の手が分からなくなる。Ra2 がすぐ見えないとは情けない限りだが、チェス

環境に慣れていないので仕方ない。その後 Bd7 で R をおびき出しておいてから Bg4 とすればキレイに詰む事を発見して解決。



難しく解説を聞いても良く分からなかった作品。前提となるエンドゲームの知識が必要のようだが簡単に習得できるようなものではなさそうだ。1.Rd4,Sf5 まではなんとか発見できたが、その後はよく分からないままに 2.Rxd2,Bxd2,3.Bf2,Se3 以下 B の上下運動で千日手の順を書いたが当然ながら作意ではない。解答にはスッキリとして順が書かれていたが、変化は上級者でも一目で分かるようなものではないようだ。



第一感の Q b3 がそのままキーだった。過去問で変化を書き洩らす事があったので相当注意したつもりだったが、Qe4 が読みから

こぼれ落ちていた。クイーンのリキは慣れるまで何回も確認した方が良いでしょう。

採点が終わり結果発表。50 点で優勝という結果は望外だった。次回に出場する機会があればカテゴリ 1 に挑戦してみたい。この後は若島さんによるピックアップ解説。まずカテゴリ 2 のエンドゲーム (11 番) は「カテゴリ 2 には荷が重い」との評が出るほど難物だったようだ。みんなであてもないこうでもないと考えながら手順を進めていくのは、一体感があり中々面白かった。もう一つはカテゴリ 1 のセルフメイトで若島さんの解答ライブのような進め方。配置に基づいて大まかな狙いを推察し後は理屈を合わせるような思考法で解析していく様はとても興味深い。聞いた直後はカンフー映画を見た後のように自分でもなんでも解ける気になっていた。

大会終了後は ISC 御用達の中華料理屋「楽楽」でこじんまりと打ち上げ。参加は馬屋原、小林、太刀岡、中嶋、藤原、若島の各氏と井上。チェスプロブレムや詰将棋を存分に話せる楽しい宴席だった。自分のいたテーブルでは餃子や野菜炒めなど定番メニューが並べられていて、アクセントのつもりでピータンを追加で頼んだが誰も手をつけない。創作では新しいチャレンジをしている人たちのに食事は手堅いのかな、と可笑しかった。また、店内では何故か猫が自由に闊歩している。椅子の上でくつろいでるところを若島さんに撫でられて気持ちよさそうに眠りに落ちるなどなごなごした空間になっていた。女将さんが自然にお客さんと和やかな会話をしていたり非常に良い雰囲気でも落ちていて過ごす事ができた。

こうして今回の旅を振り返ってみると楽しい思い出ばかりで、充実した一日を過ごす事ができた。一方、プロブレムにチャレンジした感想だが、難しい・高尚というイメージから

払拭するには至らなかった。プロブレムの主流は短い手数の中にテーマを詰め込んでおり、絵画のようにじっくりと立ち止まって鑑賞する事を要求される。詰将棋で時間の流れの中を駒が運動しているのを眺めるのが好きな自分にはやはり取っ付きにくい。だが、プロブレム特有の面白さを感じる瞬間が何度もあったのも事実である。詰将棋のように愛せるかは分からないが、プロブレムともマイペースで付き合っていければと思っている。



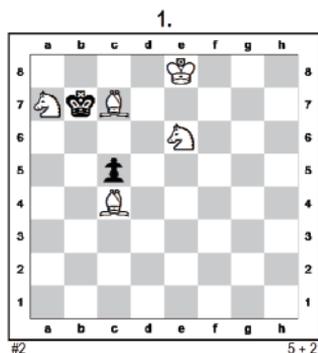
井上徹也さん

Category 3 参加レポート

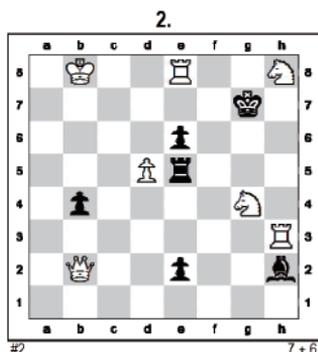
井上聡美

チェスの勉強で、タクティクス問題が楽しくて毎日解いていたので、もっと難しい問題を解いてみたくなり、ISCに出てみようと思いました。でも、練習をしてみると、プロブレムは全く違って難しかったです。過去問をたくさん解いて勉強しました。

正解できた1問目は、白と黒の駒の動きを全パターン考えて、答えには自信がありました。



2問目も答え (1.Qd4) に自信はあったけれど、ポーンの動き exd5 があるの見逃していました。(1.Qd4,exd5 2.Rxe5,Bxe5+ 3.Qxe5+…になってしまう)



6問目のエンドゲームは、いろいろなパターンが多すぎて、難しかったです。

途中 (30分目で) 疲れたと感じたけど、終わってみると、10分しか経っていないように思えたくらい、120分が短く感じました。

1年間がんばって勉強して、来年は全問正解したいです!

あと、会場 (森下文化センター) の1階の、のらくろコーナーもおもしろかったです。私はのらくろって何か知りませんでしたが、アニメ映像を見てみると、ブル連隊長がポンコツすぎておもしろかったです。他のマンガ本

もたくさんあったので、お昼ごはんも忘れて
いっぱい読んで帰りました。



井上聡美さん

18. INTERNATIONAL SOLVING CONTEST													*0*=wrong solution					
23 JANUARY 2022																		
RESULT																		
													*.-= no solution					
Cat	Name	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	合計	Time Rd 1	Time Rd 2	時間	順位
1	青嶋未来	5	4	2.5	5	-	5	0	3.5	2	5	3.5	0	35.5	120	120	240	1
1	黒川智記	5	4	0	0	5	0.0	5	4	4	0	5	0	32	120	120	240	2
1	中村龍二	5	5	0	1	2.5	0	5	3.5	0	5	3.5	-	30.5	120	120	240	3
1	小林敏樹	5	4	0	-	5	5	5	3.5	-	-	1.5	0	29	120	120	240	4
1	塩見 亮	5	0	1.25	2	5	-	5	3.5	-	5	1.5	-	28.25	120	120	240	5
1	鈴木知道	5	1	0	0	5	0	5	4	-	5	1.5	-	26.5	120	120	240	6-7
1	松尾朋彦	5	3	-	5	-	-	5	-	-	5	3.5	-	26.5	120	120	240	6-7
1	真鍋 浩	5	4	2.5	1	2.5	-	5	1.5	1	0	1.5	-	24	120	120	240	8
1	馬屋原剛	5	-	2.5	1	0	-	5	0	0	5	1.5	-	20	120	120	240	9
1	藤原俊雅	0	4	0	1	-	0	5	2.5	0	1	5	-	18.5	120	120	240	10
1	前嶋啓彰	5	3	0	1	-	0	5	-	-	0	3.5	0	17.5	120	120	240	11
1	中嶋正和	5	4	0	1	-	0	5	-	0	0	1.5	0	16.5	120	120	240	12
1	黒田裕之介	5	2.5	-	-	-	0	5	0	-	1	-	-	13.5	120	120	240	13
1	松崎直樹	5	0	-	-	-	0	5	-	-	-	1.5	-	11.5	120	120	240	14
2	井上徹也	5	5	5	5	5	5	0	5	5	5	1	4	50	86	120	206	1
2	太刀岡甫	5	5	5	5	0	5	0	5	5	5	0	5	45	120	120	240	2
2	高木秀和	5	5	3	-	5	-	0	5	-	-	0	3	26	120	120	240	3
3	井上聡美	5	0	0	0	0	0							5	120		120	1

出口信男の世界 (4)

泰永三二郎

今月のテーマ：出口信男（左真樹）の初登場

1 番 天竺協力詰 3 手詰 Y-1v (改良図)
(原図はカピタン 13 号、1977-11)

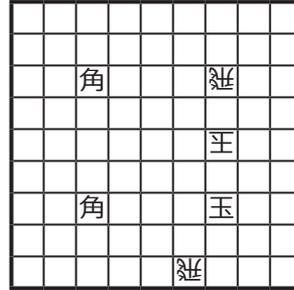
【天竺詰】

王将は王手を掛けられると本来の動きを失い、王手を掛けている駒の動きになる。王手を掛けている駒が複数ある場合は、それらの駒すべての動きを併せ持つ。先手の王将も同じ条件に従う。他は通常の詰将棋のルールと同じ。鏡詰という名称もある。

ちなみにチェスで天竺ルールにあたるのは Transmuted Kings と言い、後手玉のみ性能が変化するという条件がつくのを Transmuted King と区別する。

王将が色々な駒の動き方に変化するので、変化に富み華やかな感じを受ける。飛角の王手に対しては遠くに逃げるなど大駒に強く、逆に桂香歩に弱い。特に香や歩の王手に対して玉がかわず手はない。ただし、打歩詰は禁手なので注意が必要。ルールの発案者は飯田岳一氏。氏の持論の通り明快で分かりやすいルール。天竺詰という名称は門脇芳桂氏が名付けた。安南や対面など他の変身系ルールと比べると性能変化が玉のみというのは作る方にとってだけでなく、鑑賞する側にとっても分かりやすい面がある。

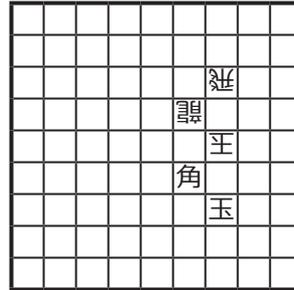
なぜ天竺詰などという変わった名称がついたのか真相は分からない。飛車や角で王手をされた王将が遠くに逃げてしまう様子が、筋斗雲に乗った孫悟空のようだという門脇氏の解説があったような、…。あくまで想像だが安南詰の前例が大きいのではないだろうか。変則ルールに異国の古称を流用するのがお約束だったのかもしれない。筆者は安南詰も天竺詰も付き合いが長く、体に馴染んでしまったので特に違和感はない。読者の方々の感想が聞きたいものです。



▲ なし

44 角、同飛成、46 角生迄 3 手詰

本作が出口信男の作品第 1 番である。詰上りを上げておこらう。



最終手で 46 角成とすると玉 = 馬となり 34 や 25 に逃げられる。それを防ぐ不成の意味は分かりやすい。しかし上の図は一見して詰んでいるように見えない。46 角の王手を防ぐ手がありそうに見えるからだ。現在 35 玉は角の性能だが、王手を回避出来そうな手は次の 2 通り。

1. 17 玉と逃げる手。

33 飛車が 37 王に直射して先手の王に飛車の王手がかかる。天竺ルールによって 37 王 = 飛となって 17 玉に逆王手が掛かってしまう。

2. 46 同龍と取る手。

37 王に龍の王手がかかる。天竺ルールによっ

て 37 王 = 龍となって 35 玉に逆王手が掛かってしまう。

以上いずれの応手も王手を回避したように見えて、別の王手がかかってしまい失敗となる。結局王手を回避することは出来ずこのままで詰みというロジック。詰手順 2 手目の同飛成を同飛不成とすると、2 の手順で 46 同飛が王手にならず王手回避が出来てしまう。従って 2 手目は成らなければならない。協力詰で後手方の成は多くの場合妙手である。

出口信男氏は天竺詰の草創期に、逆王手を利用したこの法則問題でデビューした。たった 3 手の協力詰だが初めて目にするこのロジックは新鮮で、解答者は賛辞を惜しかなかった。

ただ発表図は最終手で合駒が可能な図だった。当時は伝統詰将棋の無駄合概念が援用されていたため、無駄合としてさほど問題にはならなかったが、後年「協力詰系統では合駒はすべて有効」とルールが明確化されたこともあり、作者は後に合駒の余地がないように改良した。本図はその改良図である。

詰バラ 269 号 (1978-7) で、フェアリー担当の門脇芳桂氏が「大型新人が一人誕生。変則専門？だが期待できる人。来月登場予定。」と書いている。実際は 271 号で左真樹として詰バラ初登場となった。出口信男の作品番号 1 番は本稿 1 番の天竺協力詰 3 手なのだが、読者数や PN の問題もあり詰将棋ファンに作者の名前を刻みつけるきっかけは詰バラ 271 号掲載の 5 作とみなしても良いだろう。

門脇芳桂 / 今月は最近本欄に大量投稿のあった左真樹氏の特集号とする。今月は天竺だけが、色々の投稿が来ており期待できそうな人。

出口氏は多くの場合、一度にまとめてたくさん投稿するらしい。実際にどの作が同時に投稿されたのかは興味深い。

2 番 天竺詰 77 手詰 Y-2v (改良図)
(詰バラ 271 号、1978-9)



▲ 歩 16

12 歩、同玉、13 歩、同玉、
14 金、イ 12 玉、13 金、11 玉、
12 金、同玉、13 歩、同玉、
A25 桂、同全、14 歩、同玉、
15 金、口 13 玉、14 金、12 玉、
13 金、同玉、14 歩、同玉、
26 桂、同全、15 歩、同玉、
16 金、ハ 14 玉、15 金、13 玉、
14 金、同玉、15 歩、同玉、
27 桂、同全、16 歩、同玉、
17 金、ニ 15 玉、16 金、14 玉、
15 金、同玉、16 歩、同玉、
28 桂、同全、17 歩、同玉、
28 と、16 玉、17 と、15 玉、
16 と、14 玉、15 と、13 玉、
14 と、12 玉、13 と、同玉、
14 歩、同玉、15 歩、同玉、
16 歩、同玉、17 歩、同玉、
18 歩、同玉、19 歩、同玉、
28 銀迄。

変化：イで同玉は、15 金、同玉（同金は 26 桂以下作意、13 玉は 14 歩、同全、同金以下 26 桂迄）、16 金、同玉、27 金、15 玉、16 金、同玉、28 桂迄。

口で同玉は、16 金、同玉、27 金、15 玉、16 歩、同全、同金以下 28 桂迄。

ハで同玉は、17 金、同全、28 桂以下作意通り。他は早い。

ニで同玉は、18 歩、同全、同と、同玉、19 歩以下。

紛れ:Aで14歩、同全、25桂、同全、14歩、同玉、15金以下進めるのは明らかに歩の消費が多いので、最後歩が足りなくなり詰まない。歩の数はギリギリに出来ている。

Y-2~Y-4の3題は解付きで発表されたため、その3題については解答者の感想はない。

本題は成銀を釣り上げながら一筋の桂をはがす繰返し趣向。金の王手を取らずに玉が下がるのは歩を使わせる目的。手順中14金のように金がすり込んだときに、同玉と取る変化があるため単調さを補っている。詰める方にしてみると玉を1筋に留めておく必要があるわけだ。シンプルな配置から意外な長手数で、最後は銀吊しのミニ煙。上図は1979-1に発表された改良図で、元図は序に龍捨がある4手長い81手詰だった。元図が不完全だったというわけではない。

3番 天竺詰 11手詰、Y-3
(詰バラ 271号、1978-9)

							我
						我王	
						銀	

▲ 角金金桂

A14金、イ同玉、36角、口23玉、14金、22玉、13金!、ハ32玉、22金、同玉、14桂迄。

変化: イで24玉=金だから33には動けない。25玉は、36角、同玉(16玉は27金迄)、37金迄。

口で同玉は36金迄!。25に合駒を打つと何であっても、26桂、同玉、27金迄。41玉と飛んで逃げると、42金、同玉、54桂迄。32玉は44桂、同玉(24玉は14金迄)、54金迄。ハで同玉は25桂迄。同桂は14桂迄。

紛れ:A25金、同玉(23玉は15桂迄)、36角、16玉で詰まない。

実戦型とも言えそうな端正な美形。初手から25金、同玉、36角、同玉、37金迄の読みは、36角に16玉とかわされて詰まない。正解は14金、同玉と遠ざけてから36角と打つ。14玉と移動させてから36角と打つのは、合駒の余地ができる上に14玉=角なので遠く41まで逃げられるようで、心理的にやり難い。ところが実際に36角と打って見ると案外玉が狭いことに気づく。36角の王手に対して天竺ルールにより同玉が可能だが、37金迄の詰。合駒は何であっても26桂から27金で詰む。遠くまで逃げようとしても36角がよく効いているので、仕方なく玉方は23玉と抵抗するが、14金から13金の再活用が絶妙手。打った直後の14金が桂打の場所を塞ぐ邪魔駒になっている。これをすぐに13金と捨てる。どちらでとっても桂吊しの1手詰だからしびとく32玉とよろけるが、22金のすり込みが最後の決め手。どう応じても桂打までの一手詰となる。詰棋校とか表紙に出したくなるような正統派の短編。こういうのを見ると出口氏が伝統詰将棋で育った方なのだと感深くする。

4番 天竺詰 59手詰 Y-4
(詰バラ 271号、1978-9)

我	我	我		我			
王			金	我			
我	我			我	我		
	イ			金	我		
		イ			我	我	
			イ		金		
				イ			イ
					イ		馬
					桂	金	角

▲ 歩4

81馬、同玉、71金、イ同玉、63桂、同玉、53金、同玉、45桂、同玉、35金、同玉、27桂打、同と、同桂、同玉、28歩、同と、同金、26玉、

17 銀、35 玉、36 歩、同玉、
 37 歩、同と、同金、35 玉、
 26 銀、44 玉、45 歩、同玉、
 46 歩、同と、同金、44 玉、
 35 銀、53 玉、54 歩、同玉、
 55 歩、同と、同金、53 玉、
 44 銀、62 玉、63 歩、同玉、
 64 歩、同と、同金、62 玉、
 53 銀生、71 玉、72 歩、同玉、
 73 金、71 玉、62 銀生迄。

変化:イで 92 玉は、91 角成、同玉、92 歩、同玉、
 81 銀迄。

一往復の斜趣向詰。桂金コンビで追いつける
 ところは天竺詰ならではのスピード感があり、
 伝統詰将棋では味わえない感覚が確かにある。
 復路は予想通りと金をはがしながらの風金だ
 が、金だけではうまく行かず銀の補助動作が入
 る。金銀の性能の違いが趣向手順に昇華してい
 るのが良い。17 銀のところを 27 銀と打つと
 打歩詰になってしまうので、控えて打つわけだ。
 幕切れも鮮やか。

5 番 天竺詰 45 手詰 Y-5
 (詰バラ 271 号、1978-9)

					銀	銀	王
				と	歩	?	
			と	歩	と		
			と	歩	?		
		と	銀	と			
	と	銀					
と							
		角					
玉		角	?				

▲ なし

21 歩成、同玉、22 歩、同と、
 31 と、イ 11 玉、22 と、同玉、
 32 と、同玉、42 歩成、22 玉、
 32 と、同玉、33 歩、同玉、
 44 と、口 32 玉、33 と、同玉、
 43 と、同玉、53 歩成、33 玉、
 43 と、同玉、44 歩、同玉、

54 と、同玉、55 歩、同玉、
 65 と、同玉、66 歩、同玉、
 76 と、同玉、77 歩、同玉、
 87 と、78 玉、88 と、79 玉、
 89 と迄。

変化:イで同玉は、42 歩成、21 玉、22 と、同玉、
 32 と以下作意通りで早い。

口で同玉は、43 と、同玉、53 歩成以下作意通
 りで早い。

詰上り

玉	と	王	?				

玉 2 枚角 2 枚と歩 18 枚だけというあまり見
 たことの無い使用駒趣向がまず目を引く。序が
 ややこしいが、筋に入れば玉がどんどん引き
 寄せられ最後は必要だった 2 枚の角も消えて、
 玉と金が 2 枚ずつのきれいな一の字の詰上
 り。中盤と金寄の王手に対して、斜め下に逃げ
 られないという天竺ルールを最大限に活かした
 趣向手順が見事。最後は玉 = 金なのでこれで詰
 みなのだ。

筆者の想像だが中盤の追いつけ手順が本作の
 元で、それに序盤と収束を整える過程で使用駒
 趣向が付け加わったと推測する。99 玉と点对
 称配置の 11 玉も意図的だろう。いや、詰上り
 が超絶だからやはりここから逆算したのだろう
 か。いずれにしても天竺詰の名作に推したい。
 氏は後にこの趣向手順を組み込んだ煙詰を発表
 している。

		馬							
									香
	香	金	金			金	金		
	香	金	金			香			
桂	香	銀	金			金	香		
桂	香	金	金				と	金	
桂	香	歩				金	香	王	
桂	香		金	飛		香			
	馬	香				龍	玉		

▲ なし

27 と、イ同と寄、24 金、口 71 玉、
83 桂生、同と (中間 1 図)

変化：イでは同玉、同と寄、同と上の 3 通りの
の応手がある。同玉は 28 歩と打てるので早い。
しかし 2 枚のと金のどちらで取るのが正しい
かはこの段階では分からない。ここは宿題にし
て先を進める。

口で 26 歩のように合駒すると 19 香、18 と、
同香迄。合駒がない。

本作に先行する天竺煙詰の試みは下記の 2
局がある。

1. 飯田岳一、詰バラ 1975-7、79 手、「新世界」、
発表時早詰修正図あり。
2. 泰永三二郎、詰バラ 1977-6、95 手、持駒
あり、発表時早詰修正図あり (未発表)。

天竺煙詰としては上の 2 局に続く第 3 号局、
発表時完全作としては初。双玉煙詰はこれ以外
には同じ作者の双玉小駒煙詰が 1 局あるだけ。

持駒香の威力で玉を大ジャンプさせるのは
フェアリーならでは筋で、局面を大きく転換
出来て便利。

銀を入手した次図で 72 歩は二歩で打てない。
72 香と打てば同玉と取る一手だが香は温存し
たい。となると 72 銀くらいしか手がないが、
同玉と取ってくれるのだろうか。

		王							
									香
	金	金				金	金		
	香	金	金			香			
桂	香	銀	金			金	香		
桂	香	金	金				と	金	
桂	香	歩				金	香	王	
桂	香		金	飛		香			
	馬	香				龍	玉		

▲ 銀香歩

中間 1 図より、

72 銀、八同玉、84 桂、同と、
73 銀、二同と、同金、同玉、
85 桂、同と、74 銀打、木同と、
同銀、へ同玉、86 桂、同と、
75 香、同と、同金、同玉、
76 香、同と、同歩、同と、
同香、同玉、77 金、75 玉、
76 金、74 玉、75 金、73 玉、
74 金、72 玉、73 金、71 玉、
72 金、同玉、73 歩、同玉、
74 歩、同玉、75 歩、同玉、
76 歩、同玉、77 歩、同玉 (中間 2 図)

変化：八 82 玉は 83 金迄。62 玉は 63 銀成、同と、
同金、同玉、64 歩、同と、同銀、甲 72 玉、84 桂、
64 玉 (84 同玉は 85 金迄、同とは 73 香迄)
65 歩、同と、同金、同玉、66 歩、同玉、67 歩、
同と、同金、65 玉、66 香迄。甲で 74 玉は 75 香、
同銀、同金迄。また甲で同玉は、65 歩以下。
二 61 玉は、62 歩以下 6 筋を追い上げて八の
変化と同様に詰む。

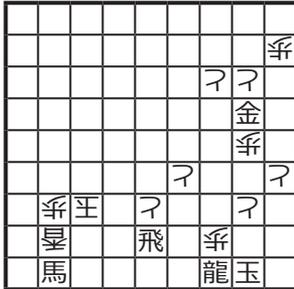
ホ 62 玉は、今までと同様 6 筋を追い上げて詰
む。

へ 64 玉は、65 銀、55 玉 (同とは同金、同玉、
66 歩、同玉、67 歩以下) 66 金、同玉、67 歩
以下。

桂跳びで玉方と金を連れながら 7 筋を追い
上げる第一趣向は、王手駒が銀なので同玉以外
の変化を読まされることになる。7 筋は歩が打

てないが6筋は打てるのがポイントで、変化は割り切れている。結局玉は77まで釣り出されることになる。

中間2図、54手経過



▲ 歩

中間2図より、

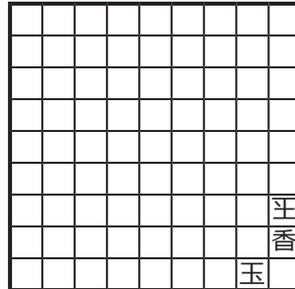
88馬、ト同歩成、78歩、同と、
 同飛、67玉、68歩、同と、
 同飛、チ37玉、38飛、同と、
 同龍、26玉、27歩、同と、
 同龍、35玉、36歩、同と、
 同龍、24玉、25龍、13玉、
 14歩、同と、同龍、22玉、
 23歩、同と、同龍、11玉、
 12龍、リ同玉、13歩、同玉、
 14歩、同玉、15歩、同玉、
 16歩、同玉、17歩、同玉、
 18香迄99手詰。

変化：トで95玉は96歩、同玉、97香迄。また86玉は、97馬以下（87馬は31玉で捕まらない）。また67玉は68歩以下作意通り追って、36歩のところを25龍、37玉、38香迄。チで47玉は、48歩、同と、同飛、37玉、38飛、同と、同龍、26玉、27香迄。2手目イの変化で同と上と取ると、作意同様に進んで子のところで37玉が出来ず早詰となる。よって本手順2手目の宿題は同と寄が正解と分かる。リ12龍の王手に対して、11玉＝龍だから91玉などと逃走するのもありだが、92香迄。

88馬で香を持駒にして以降その持駒の香が陰の主演となる。紐のついていない飛車の王手

を取ることが出来ず、と金の陰に隠れながら玉が7段目をスライドするのが第二趣向。玉が右下隅に戻って来てはじめて序盤2手目の正しい応手が判明する。潜伏期間が長い。飛車を切ったからは単騎の龍がジグザグに玉を追い落とす第三趣向となる。常にとると早いので玉は駒の陰を逃げ回る。11まで逃げてついに捕まり、最後は還元玉で締めくくる。

詰上り



3つの趣向手順、2手目の応手選択、還元玉、40枚の煙詰が見どころの作。初期配置は清潔感があり美しい。大作家の華々しい初登場は過去何度もあり、誰しも推しを何例か思い浮かべることだろう。出口信男（左真樹）の登場も確実にその1エピソードにあげられる。

『詰将棋の世界』出版に至るまで

斎藤 夏雄

人間誰しも、歳を重ねていくと思えばよいことがときどき起きるものである。2021年3月に『詰将棋の世界』と題した本を出版したが、自分が詰将棋についての本を出すなどということが実現するとは、ほんの数年前まで想像すらできないことだった。どんな経緯で本を書くことになったか、2021年6月にオンラインで行われた「プロバラ会」でおおよそのこととお話したところ、プロバラ編集長の若島さんから原稿としてまとめるよう依頼を受けた。狭い世界の中にいる人しか興味がない本の出版顛末記にどこまで需要があるのか怪しいが、自分自身の備忘録も兼ねてこれまでのことを振り返ってみようと思う。

●発端

『数学セミナー』という雑誌があることをご存じだろうか。1962年創刊の月刊誌で、数学者による解説記事や著名数学者へのインタビュー、数学の問題の出題および読者から寄せられた解答に対する講評など、数学にまつわるいろいろな記事が読める老舗雑誌である。数学のレベルとしては大学初年次程度からもう少し専門的な領域あたりが中心だが、一流数学者による最先端の数学理論の解説が掲載されることもある。一方で肩肘張らないコラムのコーナーなどもあり、数学に興味のある人なら毎号楽しめる内容になっている。

2014年ごろから2年くらいの間、私は『数学セミナー』の書評委員なるものをつとめていた。『数学セミナー』には書評のコーナーがあり、最近出版された一般向けの書籍について1ページにまとめられた書評が載る。もちろん数学が関係する内容のものに限られるが、分野やレベルはさまざまだ。書評委員は代数、幾何、解析の各分野から一人ずつ選ばれ、1年に2回か3回の頻度で池袋の近くにある日本評論社の一室に集まる。そこで『数セミ』誌上で書評するのに適切と思われる書籍を選び、合わせて書評をお願いする方の候補もリストアップする。この内容ならあの先生はどうだろうか、こういう分

野はあの人なら興味があるはずだから引き受けてくれるかも、などとあれこれ考えるわけだ。また、年に2冊は書評委員自身も書評を書くことになっていた。こういう仕事を任せられると、今まで漫然と読んでいた本でもあらためて集中して読み直すことになり、なかなかよい経験ができたと思っている。

さて、そもそもの発端は、2016年9月に行われた書評委員会の打ち上げの席にさかのぼる。私ともう一人の先生が任期を終えて交代することになったので、編集部の方が押さえてくれていたデパート屋上のビアガーデンに集まり、まだ明るいうちから飲み始めた。どういふ流れだったか覚えていないが、その場で詰将棋の話題が出たのである。そこで、自分には詰将棋創作という趣味があること、この世界がとんでもない奥行きを持っていることを、ジョッキを片手にあれこれ語るようになった。

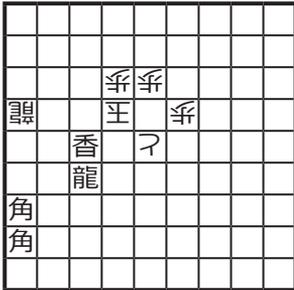
詰将棋にあまりなじみがない人を相手にしているときには、詰将棋を「創作」しそれを「作品」として評価する文化がある、というところからまず話を起こさなければならない。そもそも将棋に全く関心がない人に、こうした世界を言葉だけで理解してもらうのはなかなか大変だ。しかし数学に携わるような人は、こういうボードゲームには得てして興味を持っていることが多い。くわえて、各自が投稿した作品の中から優れたものが専門誌に掲載されるという仕組み自体は、研究における論文誌の投稿や査読のシステムと同じだ。だから、その点ではそれほど心配はなかった。

とはいえ、詰将棋のディープな世界を紹介するというのは簡単ではない。「将棋の終盤を指しこなすための練習問題」という一般的なイメージしか持ち合わせていない人に、一流の詰将棋が持つ凄み、あるいはこの世界で遊ぶ人たちの詰将棋愛の深さを、気軽な雑談の場で簡潔にどう説明したらよいだろうか？ こういうときに私はいつも、行き詰まり氏作の「新たなる殺意」を持ち出すことにしている。詰将棋の世界はすごい、という話をする、「ああ、何十

手もかかるやつでしょう？ 無理無理、自分が分かるのは3手詰だけだから」という反応が返ってくるのが少なくない。つまりこの相手は、いくら詰将棋が深いといっても3手くらいなら大丈夫……と半ば無自覚に思っているわけだ。その思い込みを崩すことは、詰将棋の奥深さを認識してもらううえで非常に効果的なのである。「新たなる殺意」はこんなときに最適の作品だ。

行き詰まり 「新たなる殺意」

『詰将棋パラダイス』1989年3月号



▲ なし

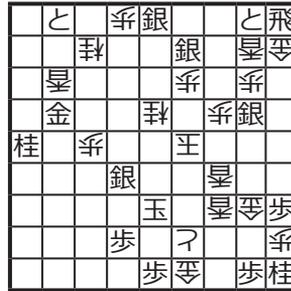
また、この世界の住人がどれほど詰将棋に夢中であるかについては、「詰将棋のための雑誌があって、その名も『詰将棋パラダイス』』と言うだけで結構伝わるといことを、私は経験的に知っていた。中にいると気がつきにくいのだが、「詰将棋」に「パラダイス」という語句がくっつくことがあるというのは、はじめて聞く人には実は相当なインパクトがあるのである(おまけに、「略称は『詰バラ』』というので大笑いされたりする)。

打ち上げの席では、ほかにいろいろな話題を出した。細かいことは忘れてしまったが、将棋のルールはwell-definedなのかという論争を引き起こした「最後の審判」という作品があるという話をしたことは覚えている。また、詰将棋のルールをさらに改変した「フェアリー」というジャンルがあり、そのうちの一部はロジックが重要な要素であって数学と親和性が高いというようなことも述べた。あれこれ話すうち、こういう内容で連載したらどうだろうという話もちらっと出たが、まさか数学雑誌で詰将

棋の話を連載するなどということが実現するとは思えず、酒の席での戯言に過ぎないとそのときは思っていた。

縫田光司 「最後の審判」

『詰将棋パラダイス』1997年1月号



▲ 角歩

●連載開始へ

打ち上げから一月あまり後、『数学セミナー』編集部のお飯野玲氏より2016年10月18日に届いたメールから、いよいよ本当に話が動き出すことになった：

“……いま前川さんの折り紙の連載をしている2ページ連載の枠が2017年4月から空きますので、その枠で、齋藤先生の詰将棋関係の連載ができないでしょうか、こちらで考えているのは

- ・とりあえず全12回(1年)
- ・毎回テーマを決めて、詰将棋に関する文章を掲載。問題も交える
- ・各回の最後に1問以上出題があり、次号に答えを載せる
- ・詰将棋にそれほど親しんだことのない人でも、詰将棋の楽しさが感じられる

(読んでいくと上達できる、という類のものでなくてよい)

- ・数学テストがある
- というような内容です……”

「数学テストがある」と断っているが、数学と直接は関係がない詰将棋に関する話題を数学雑誌で連載しようなどと、よく飯野さんは決断したものと思う。

メールを読んでまず考えたのは、自分ごときがえらそうに詰将棋を語ったりしてよいのだろ

うかということだった。看寿賞を毎年のように受賞したり、作品集を何冊も出すほど作品を量産したりされている詰将棋作家は、一人や二人ではない。そんな匠たちを差し置いて、ちょっとかじったくらいの雑魚がしたり顔で愚にもつかない詰将棋論をぶったりして、この世界の住人に聳鷹を買わないだろうか。実際、そんなものを書けるほど自分は詰将棋のことを理解しているのだろうか。知ったかぶりでいい加減なことを書いたら、SNSなどで一斉にダメ出しされて恥をかくことにもなりかねない。まずその点が不安だった。

もう一つ、懸念したことは、既存の文献の二番煎じになるのではないかということだった。テーマごとに過去の名作を解説した本なら、これまでも出版されたものがある。真っ先に頭に浮かんだのは、角建逸氏の『詰将棋探検隊』だった。村山隆治氏の『詰将棋手筋教室』も気になった（そのときはあまり気に留めていなかったが、野崎昭弘氏の『ロジカルな将棋入門』もあった）。これらの本とほとんど同じようなことを書いても、存在意義は乏しい。先行文献の真似事にしか見えない内容になってしまうことは避けなかった。

いろいろ考えたうえでとにかくやってみることにしたが、上に述べたような懸念材料をふまえて、以下のような方針を自分に課した。

(1) ルールの説明は丁寧に（ただし規約論議には立ち入らない）

飯野さんからは、「詰将棋のルールは細かいところになるとよく分からない点がある」と言われていた。将棋に多少なりとも慣れ親しんでいけば、詰将棋は王手の連続で敵玉を詰ます手順を考える問題である、というくらいの認識は持っている。しかしその手順はどのように一意に定まるのかということについて、一般向けにページを割いて説明している文献はあまりないのではないか。「変同」や「変別」といった用語も、広く浸透しているとは言いがたい。ここをしっかりと書くことには、それなりの意義があるように思われた。連載するのが数学の雑誌であることも大きかった。ルールや用語の定義をくどくどと述べることに、これほど向いている媒体もなかなかないだろう。

ただ一方で、数学の理論を構築するようにきわめて厳密な形でルールを提示するのは気が進まなかった。何しろ数学徒が相手だから、ギャップや矛盾があると言われなければならないには相当神経を使わなければいけない。だいいち、周到に準備をしたとしても「無駄合」をはじめとして曖昧な部分があちこちにあるから、どう頑張ったところでボコが出る。また詰将棋界からも、下手に書くとか否定的な反応が出ることは容易に想像できた。詰将棋のルールを「規約」として明文化しようとしたら、完全かどうか意見が分かれる作品が発表されたりするたびに、喧々諤々の論争が起きるのをこれまで何度も見てきたのである。完全なコンセンサスを得ることはほどだいい無理な話である以上、あまり波風を立てるようなことはしたくない。それに、ここにエネルギーを注いでも、読み物として面白いものになるとは思えなかった。

そこでとりあえず、ルールについては丁寧な説明を試みるものの、数学のように厳密であろうと頑張ることはせずに肩の力を抜いて進めること、ルールに曖昧さが残されているような部分については、自ら規約に踏み込むようなことは避け、そういう状況であることを客観的に記述するよう努めることにした。

(2) 「最後の審判」とフェアリーを紹介する
打ち上げの場で『数セミ』編集部の方に詰将棋の話をしたとき、縫田光司氏の「最後の審判」にはみんな興味をそそられたようだった。何しろ作者が編集部の人もよく知っている数学者だし、作品もルールの間隙を突く反例の構成のような内容だ。おそらく書籍等で紹介されたこともない。いろいろな面から、数学の雑誌の連載で取り上げる詰将棋としてまさにうってつけではないかと思われた。どういう形になるかは分からないが、連載のどこかでこの作品については何らかの形でふれようと決めた。

また、フェアリー作品もできれば紹介できないだろうか考えた。詰将棋を終盤の練習問題と考えている人にとっては、これこそ何の役にも立たない代物である。通常の一般向け出版物ではまず取り上げられることがない世界であり、だからこそ本連載で紹介する意義があるのではないか。特にこの時点で意識していたの

は、覆面駒・透明駒、それにブルーゲームである。これらのルールはロジックが大きなウェイトを占めており、作品を理解するためにはそれなりの論理的思考力を要求される。一般的な将棋ファンには興味を持たれなくても、数学に携わる人が読者ならよい反応が得られるのではないかという期待があった。

(3) 毎月出題する作品は遠慮しない

詰将棋の世界は世間で思われているよりずっと広くて深いということを伝えるには、何よりもまずよい作品を見てもらうのが一番だ。このワンダーランドには、「終盤の練習問題」などはまるで違う、素晴らしい詰将棋がたくさんあるのである。「専門誌ではないから」と変に忖度した結果、「こんなものか」と思われてしまったのは面白くない。原稿の末尾に毎掲載せる「問題」は、多少難しくても妥協せず、第一級の名作をなるべく選ばうと決めた。2問載せるとして、1問はやさしめ、もう1問は何の遠慮もない難解作にすれば、初心者から強豪まで楽しめるだろう……とそのときは思っていた。

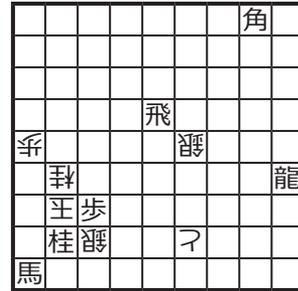
一度会って打ち合わせをしようということになり、もうすぐクリスマスというころに飯野氏が広島まで足を運んでくれた。せっかくなので、連載第1回原稿のスケッチをざっと書いて持参する。予約した本通の店で注文をすませたあと、原稿を見てもらって意見をうかがった。まずそこで言われたのは、「うーん、そうですね。(言にくいそうに)この問題はちょっと……」

原稿末尾の「問題」に、遠慮しないぞ、と鼻息荒く突っ込んだ作品は、「新たな殺意」と赤羽守氏による看寿賞受賞の7手詰。いくら何でも、数学雑誌の連載の1回目いきなりこんなとんでもないのを出しても誰もついてこないとやんわり諭されてしまった。まずは3手詰を2問出すくらいでしょうと飯野さんに言われ、ようやく目が覚める。ここは『詰バラ』ではないのだ。詰将棋の深さを伝えられるか心配ではあったが、3手でも一筋縄ではいかない作品はいくらもある、と自分に言い聞かせた。連載はとりあえず1年のつもりで続けてみて、2年目をどうするかは読者からの反応なども見

ながら検討するということになった。また連載のタイトルは、当初はフェアリーを意識して「詰将棋から広がる世界」とか「詰将棋の世界とその周辺」などという案も出していたがいずれもしっくりこず、結局シンプルな「詰将棋の世界」に落ち着いた。結果的には、これでよかったと思う。

赤羽守

『詰将棋パラダイス』1983年9月号



▲ 銀

こうして、2017年春に出た4月号から連載が始まった。校正時に原稿や図面に誤りがないかよく確認していたが、雑誌が出ると知り合いの数学者から「齋藤さん、所属変わったんですか?」とメールが来る。本文にばかり気を取られて、編集部が私の勤務先を誤って記載したことを完全に見落としていたのだ。この初回でのミスは象徴的で、誤植にはこれから最後まで悩まされることになる。



『数学セミナー』2017年4月号

●連載序盤の苦労

(1) 限られたスペース

自分にとって、毎月締切が来る原稿を書くというのは初めての経験だった。まず痛感したのは、決められた長さに話をまとめるのが難しいということ。連載記事は2ページで、2ページ目の3分の1くらいは「問題」の出題スペースにとられる。また連載の第2回からは前回の「問題」の解説も載せなければいけなかったから、実質的に本文を書けるのは1ページ分程度なのである。おまけに記事の内容によっては盤面図をいくつも出さなければならず、そうするとますます書くスペースは少なくなる。その限られた枠で一つの話題をきりがよい形で完結させるというのは、思っていた以上に大変な作業だった。

連載の第1回はイントロとして詰将棋の歴史などをざっくり紹介するだけにとどめたが、第2回でいきなり苦労することになる。詰将棋の正解手順がどのようにして一意に定まるのかということ、いかに簡潔に分かりやすく書くか。玉方の最善手がどのように選択されるのかについては、実際の作品を実例として引用する形で述べるべきだろう。とにかくスペースが限られているので、一作ですべて用を足したい。しかし、玉方の手番の局面において

* その後の手順で攻方がうまく手を選んだときに手数がか長くなる方の手を選ぶ

* その後の手順で攻方がうまく手を選んだとき、手数が同じなら攻方の持駒が余らない方を選ぶ

という選択を行う局面がともに現れ、かつ玉方の最終手が一通りに定まる(後述)という条件を満たすものが、ごく短手数の作品でなかなか見つけられなかった。もちろん見つからなければ自分で作図する手もあったが、下手にこらえて過去の誰かの作品と酷似していると指摘を受けたりしないかを気にしていたのである。それに、可能な限り多くの詰将棋作家の作品を紹介したいということもあった。最終的に、小笠原隆治氏の小品でおあつらえ向きのものを見つけることができてホッとした。

小笠原隆治

『詰将棋パラダイス』1976年2月号

							王	
			飛	銀			王	
							王	
							王	
					歩			

▲ 金

これ以降も、「本文の趣旨に沿った最適な実例を見つける」というタスクには苦労させられた。たとえば連載の第5回では、変別について説明するために

* 変別解に陥った解答者が多かった短手数の作品

* 変別解を解答した解答者が多かったが担当者の裁量で正解扱いされた作品

の実例を載せたいと考えた。手持ちのアンソロジーは名作・傑作ばかりなので、こういう条件を満たす作品はひたすら過去の詰パラを引っ張り出して探すしかない。バックナンバーの詰まった段ボールを自宅のテーブルの下下に置き、ひまさえあれば適当に取り出してページを繰る毎日が続いた。

(2) 「問題」 選び

もう一つ、毎回の「問題」の選定も悩ましかった。手持ちの詰将棋作品集やデータベースを片っ端から見ていって、使えそうなものをピックアップしていくのだが、何しろ作品数が多いので、チェックするだけでも骨が折れる。2問のうち1問はやさしめのものを選ぶのだが、短手数の作品はほとんど同じような構図のものが時期を置いて別の作者によって発表されることがあるので、下手に選ぶと「その筋ならもっと古い時代にオリジナルがある」などという指摘が来るかもしれないという心配もあった。

一方、2問目はマニアも意識したちょっと骨のある作品にしたい。ところが、マニアも感

心しそうな3手詰という観点で候補を絞ると、気がつけば作者名がYYZ、行き詰まり、塩見倫生、呉一郎ばかり。全部同じ人ではないか！なるべくたくさん詰将棋作家の作品を紹介したいと思っていたが、一人一作という方針は早々に断念。同じ作家でも筆名が別なら別カウントとする「名」一作ならいけると思ったが、結局あとになってこれもあきらめざるを得なかった。数少ない超一流の名作を創るのは、やはり数少ない超一流の作家なのだ。

それから、連載が始まって最初の何回かの出題では、もう一つ制約があった。連載の第2回で、正解手順において玉方は最善手を選ばなければいけないこと、またその最善手は常に一つに定まるように詰将棋は作られているということを書いたが、この説明には「玉方の最終手に限っては一通りに決まらなくても詰将棋として問題はない」という補足をつけ加えなければならない。そしてその補足は、変化同手数という減価事項の説明をする際、その付帯事項として述べる形にしたかった。そこで余計な混乱を与えないよう、変同について述べるまでは、玉方最終手における分岐はしない作品しか出さないことにしたのである。しかし玉方の最終手が一意に決まる良質の3手詰を選ぶのは思ったより簡単でなく、毎号の締切間際まで迷うことが続いた。連載の第4回で変同の説明をしてこの縛りが外れ、さらに次の回からは5手詰も出題してよいことになったので、これ以降は「問題」選びが一気に楽になった。

(3) 一松先生からのほうがき

連載の第1回が掲載された後、ちょっと驚くことがあった。一松信先生から感想を綴ったほうがき送られてきたと飯野さんが知らせてきたのである。

一松先生といえば、押しも押されぬ数学界の大御所だ。1950年代あたりから多変関数論や数値解析など多分野にわたって広く業績を残されたほか、数十冊に及ぶ一般向けの数学書も執筆するなど、啓蒙活動においても第一線でご活躍を続けていた。何よりすごいのは、90歳を過ぎても数学との関わりを保ち続けておられること。『数学セミナー』では、数学の問題を出題して読者からの解答を募り、3ヶ月

後に出題者が解説と講評を行う「エレガントな解答を求め」というコーナーがあるが、未だにこのコーナーをご担当になることがある。もはや超人的というほかはない。

さて、飯野さんに転送してもらった一松先生のはがきを一読して、これはどうしたものかとまた迷うことになった。「詰将棋の新連載には大いに興味があります」とあるのはいいとして、「1980年代から90年代にかけて急激な進歩をしたコンピュータ詰将棋の進展（最終はミクロコスモスの解）の話など期待しています」と書かれていたのである。「詰将棋の話始めたのなら、まさかコンピュータ詰将棋の話が出てこないなんてことはないですよ」というニュアンスを言外に感じる一文だ。連載前はコンピュータと詰将棋の関わりを書くことなど全く考えていなかったが、天下の一松先生にこう言われて無視するほど私の神経は図太くない。急遽、自分なりにまとめられないか検討を始めることにした。

何しろ、自分は柿木将棋のユーザとしての経験しかない素人である。いい加減なことを書いて炎上する可能性は十分にあったから、内容については特に慎重を期した。まずよりどころとしたのは『コンピュータ将棋の進歩』（松原仁編著・共立出版）のシリーズだったが、これは実戦の対局の機能に関するものが中心で、詰将棋に特化した論考はあまり多くなかった。そこで非常に助けになったのは、橋本孝治氏の『妙手説は1990年代に復活した』（『この詰将棋がすごい！2012』収録）である。この論説のおかげで、コンピュータに詰将棋を解かせる試みがどのように発展していったかを、手順の探索の手法という技術的な面からつかむことができた。当時の研究の論文や論説も手に入るものにはざっと目を通し、連載2回分の長さにまとめる。それでも正直なところかなり不安だったが、たまたまこの原稿が載ると同じタイミングで「コンピュータ将棋・囲碁のこれから」という特集が『数セミ』で企画されたので、飯野さんを通じて専門家の岸本章宏氏に事前に原稿を見てもらい、誤った記述がないか確認していただいた。

一松先生のはがきの一文をきっかけに思わぬ方向に連載が進んだが、結果的には内容に厚み

ができ、また自分にとってもいい勉強になったので、大変ありがたいことだったと今は感じている。

これ以外にも、出題を予定していた「問題」に迂回手順があると分かってギリギリに差し替えたり、あろうことか3手詰の「問題」の解説で間違ったことを書いて翌月に訂正を出したりするなどいろいろと失敗はあったが、どうにかルールがらみの話が一段落するところまでたどり着いた。

問題はここからだ。「とりあえず1年」ということで始めてみたものの、ルールに関する話だけで9ヶ月を費やしてしまったのである。残り3回では大して何も言えないのは明らかだったから、2年目に突入することはほぼ決まっていた。しかし、1年3ヶ月あったとしても、詰将棋の広大な世界をすべて紹介することは不可能だ。どうい話題を取り上げるのが連載として一番「据わりがいい」だろうか。あれこれ迷いつつも、少しずつ全体像を固めていった。

●将棋の「禁じ手」をめぐる

取り上げるテーマを絞るにあたってまず頭にあったのは、やはり当初から念頭にあった「最後の審判」だった。これはどこかのタイミングで扱うとして、ほかをどうするか。闇雲にどれを取り上げようかと考えていても、迷うばかりで埒が明かない。何か取捨選択についての基準を決め、それにしがたって選ぶような形にできないか。

そう考えたとき、将棋の「禁じ手」にまつわる作品を紹介するという切り口が浮かんだ。これなら、まず「打歩詰」がテーマに関わる作品を取り上げることができる。詰将棋の世界がワンダーランドになり得たのは実際の将棋ではまず見られない手順にあふれているからであり、打歩詰はその象徴というべきルールだ。次は「二歩」だが、これも面白い作品がいくつかある。「行き所なき駒」に関しては、八段目桂合がテーマの作品を選べばよい。そして、普通なら悩みそうな「連続王手の千日手」がからむ作品として、「最後の審判」を持ってくるわけだ。これなら、この作品が登場する必然性がある。我ながらこ

れは悪くないアイデアだと思った。

このプランに沿って、最初は打歩詰にまつわるテーマを書いていくことにした。打歩詰が関わるテーマは実にさまざまなものがあるが、あれもこれもとやっていたらそれだけで連載が終わってしまう。あとのことも考えると、このへんはせいぜい連載6回分くらいに押さえたい。いろいろ悩んだ結果、結局こういうラインナップになった：

- * 不成
- * 成生打診
- * 飛先飛香
- * 取らせ短打とブルータス手筋
- * 森田手筋
- * 先打突歩詰

「不成」は、当初は原理図のようなものから説き起こして成生打診中合あたりまでを連載1回分で概説するつもりだったが、書き始めてみたら到底書ききれないこと分かった。しかし、単に打歩詰を回避するために成らない、という話だけで終わらせたら面白くない。そこで成生打診を翌月に送ったうえで、連続成生打診という高度なテーマが表現されたとごく最近の看寿賞作品も取り上げることにした。つい数か月前の原稿で詰将棋のルールについて語っていたことを考えればこれはちょっとした冒険だったが、今から思えば普通の詰将棋の入門書とはちょっと違う味が早い段階で出せてよかったのではないかと思う。

「飛先飛香」は、この手の「A先AB」というテーマの代表選手のつもりで入れた。早い段階で山田修司氏の飛先飛香作品が思い浮かんでおり、あれを例題として書けばまとまるだろうと考えていた。残りの「取らせ短打」、「ブルータス手筋」、「森田手筋」、「先打突歩詰」も、そのテーマといえばまずはこの作品という定番があったので、どう書いたらよいかについてはそれほど迷わずにすんだ。やはり苦勞の中心は、いかに指定された分量でちょうど話をきりよく終わらせるかということ。新聞や雑誌などで定期的にコラムを執筆している人は大したものだと思う。

「二歩」についても紹介したい作品の候補はいくつかあったが、配置がすっきりしていて手数も長すぎない齋藤仁士氏の名作を紹介する

かった飯野さんには感謝している。

また、「問題」選びも難航した。フェアリー作品は、通常の詰将棋以上に過去の作品に不案内だったためだ。しかし、須川卓二さんなどフェアリーに詳しい方々に SNS 上で問い合わせ、あれこれ作品を推薦していただいた中から選ぶことで、どうにか乗り切った。

連載最終回は、そのほかのフェアリールールを名前だけ挙げる形で終わった。本来であればそれぞれの世界を何か月かかけてじっくり取り上げたかったが、さすがにそこまでやると興味を持って読んでくれる人がほとんどいなくなってしまうかもしれない。飯野さんもそれを危惧して 2 年で止めたのだろう。詰バラなどで見かける機会が比較的多いアンチキルケだけは何とか例題を紹介し、これで無事 24 回分の連載を終えることができた。

●単行本化計画

連載が終了した直後の 2019 年 3 月 20 日、私は大岡山にあるごぢんまりとした喫茶店で飯野さんと向かい合っていた。おりしも東工大で春の学会が開催されており、その機会を利用してお会いすることにしていたのである。飯野さんからは「単行本になりうるかどうか、というような話もできたらと思っております」というメールをいただいていた。

飯野さんからその場で言われたのは、単行本にしたときの目次の案を作ってきてくれないかということだった。単行本にするには連載原稿だけでは量が足りないの、どういうことを加筆するか考えて全体の大まかなイメージを形にしてほしいとのこと。それを資料として単行本化の企画を立案するというのである。

連載が終わったばかりですぐには何を書き加えたものか考えがまともになかったが、せっかく水を向けてくれたのだから、ここは相手がやる気をなくす前に話を進めなくてはならない。これまでのことを思い返すと、詰将棋のテーマに関する部分は「禁じ手」というくくりでまとまっており、中途半端にテーマを一つか二つつけ加えるとかえっていびつな形になってしまうように思われた。一方で、フェアリーに関してはごくいくつかのルールを駆け足で紹介したに過ぎず、まだまだ書き足す余地があるのではな

いか。そう考えて、詰将棋についての部分はほとんどいじらず、フェアリールールを大幅に足した案を送ってみた。詰将棋のルール説明にずいぶんページを割いているけれど本の後半は詰将棋でないものばかり載っていることになるわけで、今から思えばずいぶんバランスの悪い構成である。

当然と言えば当然だが、飯野さんの反応はそれほど芳しいものではなく、再考を迫られた。やはり詰将棋が「禁じ手」まわりだけでは、『詰将棋の世界』を標榜するにはちょっと無理がある。ルールに関する部分を第 1 章、「禁じ手」ものの紹介を第 2 章として、もう 1 章分は詰将棋について書かなければならないだろう。自信はなかったが、考えてみることにした。

このときも頭にあったのは、『詰将棋探検隊』をはじめとする既存の書籍とどう差別化を図るかということだった。古くからあるテーマもいろいろ、何か新しい概念や用語を少しは入れたい。とりえず書いてみたラインナップはこうだった：

- 3.1 将棋盤を文字盤に
 - 3.1.1 曲詰の歴史
 - 3.1.2 あぶり出しと初形曲詰
 - 3.2 軌跡を楽しむ
 - 3.2.1 スイッチバック
 - 3.2.2 ルントラウフ
 - 3.3 こじかかない！
 - 3.3.1 限定打
 - 3.3.2 限定移動
 - 3.4 懸命の延命
 - 3.4.1 不利逃避
 - 3.4.2 ヤケクソ中合
 - 3.4.3 回収手筋

「懸命の延命」というタイトルは語呂がよくて、ここだけの話、我ながら気に入っていた。章のタイトルは、曲詰の「曲」が曲芸につながることに、ルントラウフも宙返りを連想させることから、仮に「盤上のサーカス」とした。これも自分では悪くない気がして、最終的にもそのまま単行本で使うことになった。

この章を追加した目次案を送り直したところ、この構成で定価や部数などを検討するという返事を飯野さんからいただく。2019 年 4 月 12 日のことだった。この分なら、新緑が薫る

ころには、検討の結果が返ってくるだろう……とそのときは思っていた。

しかし、夏になっても、秋になっても、メールは来なかった。一度問い合わせたものの、未だ検討中という返事で、もうあの話は立ち消えになったのだろうと私はいつしか思い込むようになっていた。

『詰将棋の世界』単行本化について」と題したメールが飯野さんから届いたのは、2020年3月12日のことだった。ボールがあちらに渡って早11ヶ月。てっきりボツになったのだろうと思っていたから、企画が編集会議を無事通ったという報告を受けて驚いてしまった。多忙だったことに加え、日本評論社で将棋本を出した経験がなく、定価や部数などを慎重に検討していたため時間がかかってしまったということだった。

かくして、いよいよ単行本化計画が本格的に動き出したのである。

●パンデミックと執筆作業

やると決まれば、あとは書くだけである。しかし、まだことはそう簡単ではなかった。

「いつごろまでに書けそうでしょうか」という飯野さんからの問いかけにどう返事したのか、メールを前に逡巡した。追加する分量はそれなりに多いが、4月、5月は仕事もそこまで忙しくないだろうから、頑張れば一気に進められるかもしれない。ただちょうどそのとき、私は論文執筆の仕事を抱えていた。くわえて、折紙に関する原稿をプロバラに出すことになっており、その締切が5月末だった。そこで少し余裕も見て、「梅雨明け頃には……」と宣言した返信を送った。

ところが、想像もしないようなことが起きた。ご存じの通り、新型コロナウイルスの流行により緊急事態宣言が発令され、ありとあらゆる日常がストップしてしまったのである。小学生になった上の子も、簡素化された入学式を含めて3日通っただけで自宅待機になってしまった。大学も、あらゆる行事や授業はすべて中止。教員も、特に用事がない日は出勤せずに家にこもっていることになった。

授業がなくなってさぞかし時間ができただろ

う、と思われるかもしれないが、現実はその反対だった。オンラインで授業を行うシステムが急遽構築され、各教員がそれを使って授業を行う態勢を整えるよう求められた。今でこそオンラインでの活動にすっかり慣れてしまったが、当時は何から何まで一から考えなければならず、これから本当にうまくいくのかが不安で仕方がなかったのを覚えている。当然ながら、原稿執筆を一気に進めるというもくろみはあつてなく吹っ飛んでしまった。5月までに折紙についての原稿は何とか仕上げたが、体を入れ替えるように6月からオンライン授業がスタートし、その対応で手一杯。正直なところ、原稿どころではなかった。

梅雨が明けて暑さがピークに達したころから、ようやく空いた時間を見つけては原稿を書きためていった。手をつけてみると適当な長さにまとめるのが難しいテーマもあり、当初の目次案からは変更した箇所がいくつかある：

* 「不利逃避」は打歩詰に関わるものを扱うことにして第2章へ

* 連載時にはまとめて紹介していた「取らせ短打」と「ブルーラス手筋」を節として独立させたらうでそれぞれ加筆

* 「限定打」の紹介を2節分とし、「限定移動」については取りやめ

* 「ヤケクソ中合」については取りやめ

* 新たに「高木手筋」の節を追加

* 第4章のフェアリーについてはテーマの加筆は見送り、ほぼ連載時の形のままとする

「高木手筋」をうまく紹介できる自信はなかったが、数年前に出版された『現代詰将棋短編名作選』に掲載されている名作を例題として利用することで、何とか乗り切ることができた。結果的には、古典的かつ視覚的なテーマから現代的でロジカルなテーマへという流れで第3章全体を構成でき、当初の案よりはまともになったように思う。フェアリーの章はもう少しふくらませたかったが、詰将棋以上に自分がこのジャンルに疎いことが調べれば調べるほど分かり、自分は少なくともフェアリー界の案内人にはふさわしい人間ではないと感じるようになった。当時の文科相の発言ではないが、この程度で止めておくことが身の丈に合っているだろう。章のタイトルは、フェアリー＝妖精からの

連想で「フェアリーの楽園」とした。

連載時に毎月出題していた2題の「問題」についても、新しく執筆した部分に付随して新たに追加したほか、出題場所を見直して本文で取り扱ったテーマが現れるような作品を各節の最後になるべく置くようにした。ただし、連載時に載せた作品を取り下げることにはなかった。落とされたと知ったら、作者をがっかりさせてしまうかもしれないと思ったのだ。それに取り上げた作品はどれも水準が高く、差し替える理由は見当たらなかった。

あれこれ悩みつつも、どうにかこうにか一通り書いた草稿を2020年10月19日に飯野さんに送信する。その後、さらに紹介したりする作品を追加したり差し替えたり、短かったまえがきを書き直したりして、とうとう完成原稿を送ったのが、同11月30日だった。単行本の話が動き出してから8ヶ月余り。やっとここまでたどり着くことができた。

原稿を出してまずはホッと一息つけたが、もちろんまだ話は終わっていない。ここからは索引の作成作業、そして校正である。誤記・誤植というのは、本当にいくら取っても取りきれないものだ。原稿を何度か通して読んでそのたびに見つけたバグをつぶしていったのだが、今から思えばもう少し徹底してやらなければいけなかった。もちろんそのときは徹底してやっているつもりなのだが、「宋看」だの「罪」だの、信じられないような変換ミスが放置されていることに気づいていないのだから、節穴もいところである。誤記・誤植は、「残っていないと思って残っている」。この精神を忘れてはいけないと痛感した。

2月上旬に、最後の校正作業が終わった。ちょうどそのころ、飯野さんが若島さんをお願いした帯文が届く。「もう帰道は見つからない」の味よし道夫なことと言ったら！ 素晴らしい帯文を書いていただいて、いたく感激した。

2021年3月13日、できあがった単行本の見本が5冊、ついに自宅に送られてきた。池袋のデパートの屋上で詰将棋についてあれこれ語ったことが、4年半後にこんな形で結実したのである。濃紺の表紙を前に、しばし感慨に浸った。



送られてきた『詰将棋の世界』初版

● 出版後のこと

奥付の出版年月日は2021年3月25日だったが、実際にはその1週間ほど前から市場には出回りだしたようで、SNS上でいくつか感想を見かけるようになった。好意的なものが多くて安堵したが、一方で誤記・誤植の報告が次々に上がってくるのには応えた。つまらないミスが多いと、それだけで本の評価を決められてしまう。Amazonでは誤記を指摘したレビューが未だに上位に来ており、「あれこれ間違っている本」という評価が定着してしまったようだ。もったいない話である(飯野さんによれば、こんなに熱心に読者が誤記を報告してくる本ははじめてだそうだ)。また、フェアリーの章が余計だと感じた読者も少なからずいたようだ。もっともフェアリーは『数セミ』連載のときからこの企画の重要な要素だったので、これに関してはあまり譲る気はない。そのほかさまざまな感想を目にしたが、なるほどと思われたのは、「大道詰将棋を紹介してほしかった」というコメント。『詰将棋の世界』を謳うなら、第3章で取り上げてしかるべきだった。

いろいろ問題もあったが、当初の予想よりも買ってくれた方が多かったようで、発売から1か月も経たないうちに増刷することが決まった。ゾウサツ！ いい響きである。飯野さんから知らせを受けたときにまず思ったのは、これ

で誤記が訂正できるということ。直す機会が得られたのが何よりありがたかった。喜び勇んでそれまで見つかったミスの一覧を作らせて送る。修正後のゲラは時間がないからと見せてもらえなかったの、指示通り直してくれたらうと信頼することにした（あとでこれを後悔することになる）。

ところが、修正原稿が自分の手を離れて2週間くらい経ってから、新たな図面の間違ひがあると読者から指摘を受ける。青くなって調べてみると、確かに駒の向きがひっくり返っているではないか。ああ、せっかくのチャンスを生かせずにミスが残ってしまった……と落胆してしまった。しかしその数日後、何とたまたま大型連休に入っていたおかげでまだ印刷作業が始められていなかったことが判明。飯野さんと電話でやりとりし、間一髪で修正に成功する。このきわどいすべり込みセーフは本当に運がよかった。バタバタしたが、ついにこれですべてが一段落である。終わりよければすべてよし……。

残念ながら、すべてよくはなかった。もう一つ、どんでん返しが待っていたのだ。1刷の誤記を訂正する際に、私は飯野さんに次のようなメールを送っていた：

“……ブルータス手筋の節で、栗原氏作の作品の解説を担当した方は小林淳之助氏で間違ひないのですが、当時は郷田五郎という筆名で書いていたということが分かりました。許されるなら「解説担当の郷田五郎氏（小林淳之助氏の筆名）が」と書いておいて、後ろの人名索引で郷田五郎 → 小林淳之助

小林淳之助……51, 61

= 郷田五郎……61

としたいところではあります……”

せっかく直す機会を得たのだから、より正確な記述に変えておこうというつもりだった。ところが、届いた2刷を見て愕然とする。小林淳之助氏の名前は51ページと61ページの2カ所に登場するが、61ページの方は変わっておらず、直さなくてよいはずの51ページが書き換えられていたのだ。これは本当にショックだった。よりによって、51と61という妙に似通ったページ番号だったのもツイていなかった。あのとき2刷のゲラを見せてほしいと食

いやがれば、いやそもそもこんな訂正などしなれば……。いくら後悔してももう遅い。もちろんほとんどの読者にとって、作品の解説者が本名だったか筆名だったかということなど、全くどうでもよいに違ひない。ただ、事実でない記述が含まれた本を出してしまったという無念の思いが強く残ったのは確かである。もしいつか3刷が出ることになればそのときこそ、とは思いますが、おそらくそんな日は来ないだろう。

なお、これを書いている時点での誤記・誤植情報のリストは、日本評論社のサイトにある本書のページ：

<https://www.nippy.co.jp/shop/book/8513.html>

に置かれている。このリストがこれ以上増えないことを祈るばかりである。

また、ちょうど本書の出版直後に青土社から依頼を受け、『現代思想』2021年7月号に「詰将棋と数学が出会うとき」という小文を書いた。こちらはそれまでの経験が生きて、つまらないミスはしなかった（と信じている）。ご興味があればご覧いただきたい。

以上が、『詰将棋の世界』出版にまつわるおおよその経緯である。よいこともあれば残念なこともあったが、まあこういう悲喜こもごも全部ひっくるめて、これが本を出すということなのだろう。いろいろな意味で、得がたい経験ができたと思う。これを読んでいる若い方が今後本を書かれるとき、この顛末記が少しでも参考になれば幸いである。

「詰め」と「指し」と「将棋」と「チェス」

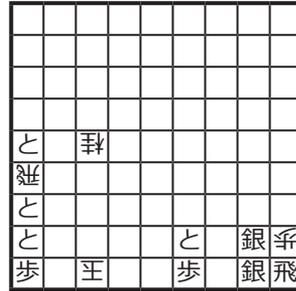
真鍋 浩

本年1月、国際ソルビング・コンテスト (ISC) に、2005年の第1回以来、久し振りに参加しました。若島さんにお会いするのも、その時以来だったのですが、ご挨拶もそこそこに「NCS新理事として、リレーエッセイの執筆頼みます。」とお願いされました。お世話になって来た若島さんに頼まれたら、書かない訳にはいかないでしょ、と二つ返事でお引き受けしたものの、締切が迫って来て、「さて何を書こうか。まずは、バックナンバーのチェックから。」と、初めて過去8回の記事を読み始めるありさま。

引き受けたことを少し後悔しました。勤務先では「真鍋さんは趣味が多いですね」と言われるタイプですが、過去執筆された皆さんと比べると、私のピアノは限られた数曲のレパートリーを偶に弾くだけ、旅行は年1回ヨーロッパかアジアに行くだけ、鉄道は昔取った杵柄で思い出したように写真撮ったりするだけ、でとてもエッセイに書けるレベルではありません。ということで、やはりチェスの雑誌なんだからチェスのことを書こう、とようやく筆を取った次第です。

閑話休題。チェスを始めるまでは、将棋が一番の趣味でした。詰将棋にのめり込み始めたのは、高校生の頃。詰将棋パラダイスの解答に勤しみ、創作も始めました。大学生になって上京すると、詰将棋の会合に出たり、詰将棋作家の先輩方と、徹夜で詰将棋談義をしたり。詰将棋の発表作は10作程度でしたが、相馬康幸さんに「共作」と認めていただいて作品集「相馬康幸 Collection」に掲載していただいたのが次図でした。

詰将棋パラダイス 1987年3月号



▲ 金金金金

作意は、

89金、同玉、88金以下69手詰

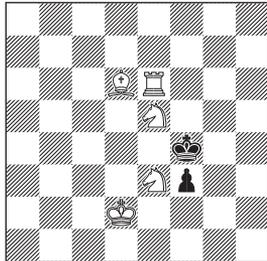
大学では将棋部に入り、指将棋にも熱中しました。団体戦のメンバーにもなりましたが、最大のライバルであった早稲田大との直接対決で、3勝3敗で最後まで残って負ける、という苦い経験を2回もしました。チェスを知ったのは、その大学生の時。将棋部の同期であり、チェスの全日本チャンピオンでもある鈴木知道君が、ポピーフィッシャーの入門書を貸してくれたのがきっかけでした（今から思うと、なんと恵まれたきっかけだったことか）。

大学を卒業してしばらくは、チェスのこともすっかり忘れていましたが、将棋部のOB会で同期の松田一彦君から誘われたことで、朝霞チェスクラブの活動に参加するようになります。チェスの本も何冊か買って勉強をするようになりましたが、その中の一冊がBatsford Chess Endingsというエンドゲームの辞典。将棋に比べて、体系化され理論的

な分析も進んでいるチェスのエンドゲームに、数学の定理の証明のような魅力を感じ、熱中するようになりました。

朝霞チェスクラブの会報向けに、簡単なプロブレムも作りました。

真鍋 浩
ちえっくめいと全国版 1997.1



#1 (5+2)
(b) Kf4→e4

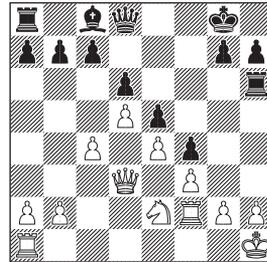
1996年、プロブレムパラダイスが創刊され、私もお誘いいただいて、創刊号から会員になりました。第8号から解説を担当、出題形式が変わった第13号から現在に至るまで、Endgameの編集担当をさせて頂いています。振り返ると、最初の1年の出題数は年間僅か3題。編集担当としては過去作品や手筋の勉強もせず、解説を書いているだけなのですが、歴代のジャッジ、特に現在のMario Garcia氏が宣伝していただいているお陰で、年間20題以上の出題ができるようになりました。

2000年から2002年まで米国にMBA留学し、私の人生においても、チェスにおいても、大きな転機となりました。地元のチェスクラブに入って毎週チェスを指すようになり、USCFのレーティングも得て、地元の大会で優勝しました。日本に帰国してから、本格的にJCAの大会に出るようになりました。2007年にはレーティングも2000点を超え、いくつかの大会で入賞も果たしました。さて、プロブレムで培った終盤力はどのよう

に活かされて来たのか、振り返ってみたいと思います。

2004年5月 全日本選手権
真鍋浩 vs. 松田竜

(18...Rh6の局面)



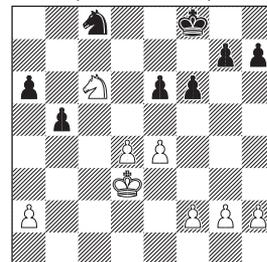
初めて出場した全国大会のゲームです。次にg3の反撃を狙って、

19.Rg1?? Rxh2+ 0-1

大学の将棋部時代、局面の「最悪手」を探ることが流行った時期がありましたが、正に盤上この一手の最悪手。ちなみに19.g3なら互角でした。今でもセルフメイトが苦手なのは、この一局のトラウマを引きずっているから、かどうかはわかりません。

2011年5月 全日本選手権
中村龍二 vs. 真鍋浩

(29.Kd3の局面)



この大会で優勝して全日本チャンピオンになった龍二くん相手にほぼ互角のエンディン

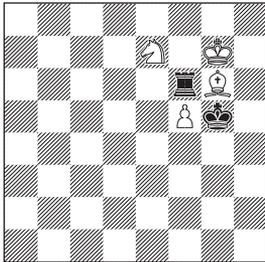
グ。ポーンエンディングになれば、むしろ黒やや有利ではないかと考えて、

29...Ne7?? 30.Nd8!

e7 にナイトがいなければ Ke7 で何ともない所、セルフブロックになっています。ポーンが落ちてしまい、負けになりました。

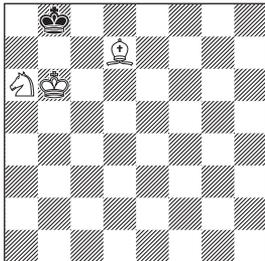
2011年10月 ジャパンオープン
真鍋浩 vs. 篠田太郎

(109...Rf6の局面)



苦しかったゲームを耐えて、ポーンを6段目まで進め、チャンスが見えて来た局面。既に100手を超えているこの局面で正解の110.Bh7! を指すことができました。以下、110...Rh6 111.Bg6 Rh2 112.f6 Rf2 113.f7 Rf6 114.f8=Q Rxf8 115.Kxf8 と進んで、ついにB+Nの勝ちのエンディングになりました。

(161.Na6+の局面)



途中ふらつきながらも、50手ルール直前のこの局面で終局。161手という手数は、おそらく日本の公式戦最長手数ではないかと思えます。

取り留めもなく思い出を書いて来ましたが、改めて振り返っても、「詰将棋→指し将棋→詰チェス→指しチェス」というちょっと変わった経路を辿って来たのは、様々なきっかけや色々な人とのご縁があったからだったと思います。今回、また新たなご縁があって、NCSの理事を拝命しました。組織運営や大会運営だけに留まらず、プロブレムとOTBチェスの橋渡しや、チェスと将棋の連携にも力を尽くしたいと思っています。まずは、JCPSとNCSの共催でISCを開催し、更なる連携も進めて行きたいので、若島さん、よろしく願います!

Informal Tourney Award 続き

(Continued from p.51)

- a) 1.nrSe3=nrB(Ic5) 2.nrBc1=nrR(Ia3)
- 3.nrRc6=nrQ[Ia8] 4.nrQh1=nrS(If3)
- 5.Sb7=B(Id4) nrSg3=nrB(Ic6)
- 6.Bg2=R(Ih1)#
- b) 1.Sf7=B(Ig5) 2.Bb3=R(Ic1)
- 3.Rb8=Q(Ic6) 4.Qg8=S(Ih6)
- 5.Sf6=B(Ig4) nrSe3=nrB(Ie5)
- 6.Bb2=R(Ia1)=

[Editor: Thank you, Nikola, for your meticulous award. Claims should be sent to the editor within the usual 3 months. After that, the award will be finalized.]

Book Sale

ご注文は郵便振替で JCPS まで。*印は在庫数を表します。現品限りのものについては、お手数ですが、まず若島までメールにて在庫の有無をお問い合わせください。送料はすべて当方負担です。

(A) Books

- A-1** FIDE ALBUM 2001-2003 7000 円 新本
A-2*** FIDE ALBUM 2004-2006 6500 円 新本
A-3* FIDE ALBUM 2013-2015 7100 円 新本
A-4* FIDE ALBUM 1998-2000 Annexe 8400 円 新本
A-5* René J. Millour, Subtleties on 64 Squares 7000 円
本誌でもおなじみ Millour さんの作品集。特にフェアリーとレトロのファンは必見。251局。英語。
A-6* Zdravko Maslar, Atelier 64 5200 円
約 40 年も続いている Andernach meeting の主宰者として知られる、Maslar さんの作品集。
ヘルプメイトを中心に 180 局。FEE=NIX シリーズ。ドイツ語。
A-7* Milan Velimirovic, A Collection of Chess Problems by Touw Hian Bwee 3500 円
インドネシアの作家 Touw Hian Bwee の作品集。収録作品数 178 局。英語。
A-8** Peter Gvodjak, Cyclone 3700 円
パターン・ブレイの cyclic テーマを網羅したもの。英語。
A-9*** Peter Gvodjak, Cyclone 2 5300 円
A-11 の続篇。
A-10** BELFORT 1994 37. CONGRES DE LA FIDE 1000 円 花沢蔵書
1994 年世界大会記念冊子。フランス語。
A-11* Winfried E.Kuhn et.al., Das Hans-Klüver-Gedenkturnier 1990-1993 500 円
花沢蔵書 H. Klüver 追悼冊子。ドイツ語。
A-12* Günter Büsing & Hans Gruber, John Niemann -Eine Gedenkschrift- 500 円
花沢蔵書 J. Niemann 追悼冊子。ドイツ語。
A-13* Wolfgang Dittmann, Der Flug der Schwalbe 1000 円 花沢蔵書
専門誌 Die Schwalbe の歴史。ドイツ語。
A-14* Kenneth S. Howard, The American Two-Move Chess Problems 1000 円 古本
A-15* Kenneth S. Howard, Classic Chess Problems 1000 円 古本
A-16* Kenneth S. Howard, Chess Problems by Eight Eminent American Composers
1000 円 古本
A-17* Kenneth S. Howard, Spectacular Chess Problems 1000 円 古本
A-18* Kenneth S. Howard, How To Solve Chess Problems 1000 円 古本
A-19* Kenneth S. Howard, The Enjoyment of Chess Problems 1000 円 古本

(B) Paradise Books その他

- B-1 Yoshikazu Ueda, Aurora: A Collection of 100 Chess Problems 2000 円
在庫あり。英語。
- B-2 Satoshi Hashimoto, 64 Proof Games 2000 円
在庫あり。英語+日本語。
- B-3 日本チェス・プロブレム協会編 『チェス・プロブレム入門』 1500 円
在庫あり。
- B-4 WCCC 2012 記念Tシャツ 2000 円
M/L サイズ。在庫あり。

(C) Problem Paradise バックナンバー

- No.8-11 各 1000 円
No.14- 現在まで 各 1000 円

(D) 海外誌バックナンバー 特別セール (6月30日まで)

- D-1 Die Schwalbe 1989-1999
単年度 (6 冊) 2000 円 全冊揃い 20000 円
- D-2 The Problemist 1979-1996
単年度 (6 冊) 2000 円 全冊揃い 30000 円
- D-3 British Chess Magazine (BCM) 1977-1995
単年度 (12 冊) 4000 円 全冊揃い 60000 円
- D-4 Shakhmati 1971-1979
単年度 (24 冊) 6000 円 全冊揃い 50000 円
- D-5 Phenix 1989-1996
単年度 (4 冊、合併号あり) 1500 円 全冊揃い 10000 円
- D-6 Rex Multiplex 1988-1994
単年度 (3 冊、合併号あり) 1000 円 全冊揃い 5000 円
- D-7 Thèmes-64 1988-1994
単年度 (3 冊、合併号あり) 1000 円 全冊揃い 5000 円
- D-8 feenschach 1989-1994 (1992 欠)
単年度 (4 冊) 1500 円 全冊揃い 7000 円
- D-9 詰め合わせセット
4 冊 1 組 1000 円 (セレクションについては当方にお任せください。)

なお、これまで弊社で製作・販売していた詰将棋関係書 (『この詰将棋がすごい!』など) は、すべて「つみき書店」(<http://kazemidori.fool.jp/>) に移管しましたので、ご購入はそちらでお願いいたします。

Definitions

<一般的通則>

: 最終目的がメイトであることを表示する。

+ : 最終目的がチェックであることを表示する。

v : 紛れ (try) を表す。個数は、テーマとなる紛れの数を表す。

* : Set Play を表す。オーソドックスやセルフメイトの場合は黒から指し始め、ヘルプメイトの場合は白から指し始める。作意手数から 0.5 手を引いた手数になる。

sols : solutions すなわち「解」のこと。指定された数だけ解があり、これは余詰ではなく、作意設定のうちに入っている。

b) c) ... : 問題図を a) とし、指定のように配置を変えた図を b) c) ... として、いずれも a) と同じ条件で解くこと。

Zeroposition : ツイン設定のために便宜上使用される図。この指定があるときには、問題図そのものを解く必要はなく、そこから配置を変えた図 a) b) ... のみを解くこと。

◆盤上にフェアリー駒がある場合、P はそのフェアリー駒にも成れる。

◆キャスリング可能な位置にある K と R は、それが不可能であるという証明ができないかぎりキャスリング可能とみなされる。逆にアンパッサン可能な位置にある P は、直前の手が取られる P が動いたものと証明ができない限りアンパッサン不可能とする。

<問題設定>

Direct (記号無し) : #n では、白から指し始め、n 手で黒をメイトにする手順を求める。黒はそれに抵抗する。

Duplex : H#n(=n) において黒から指し始めて黒をメイトにする手順と、白から指し始めて白をメイトにする手順の双方を求めるもの。

Help (H) : H#n では、黒が白に協力し、n 手で黒をメイトにするような手順を求める。通常黒から指し始める。白から指し始める場合は、0.5 手分を引いた形で表記する。

Helpself (HS) : HS#n では、ヘルプで (n-1) 指して、そこから S#1 になるような手順を求める。通常白から指し始める。

Klan Retractor : 逆算の際、駒の起点をその駒の持ち主が決定し、駒取りの有無と種類は白が決定する。黒は抵抗する。

Parse Series-help (PSH) : Series-help で、黒が連続して指す手順中にチェックをかけることもでき、その場合は直後に白が 1 指す、としたもの。

Parse Series-self (PHSS) : Series-self で、白が連続して指す手順中にチェックをかけることもでき、その場合は直後に黒が 1 指す、としたもの。

Proca-Retractor -n : 白から戻し始めて、n 手以内で、白が黒を 1 手でメイトにできるような局面を作るのが目的。黒は抵抗する。なお、黒にも白と同様、逆算してから 1 手詰にする権利がある。これを Forward Defense という。

Proof Game (PG) : 実戦初形から始めて、指定された手数で問題図に至るような手順を求める。

Self (S) : S#n では、白から指し始め、白が自分を n 手でメイトにさせるよう黒に強制する手順を求める。

Series-help (SH) : 黒が連続して指定された手数を指し、それから白が 1 手でメイトなどの目的を達成できるような手順を求める。黒は最終手を除いて、白にチェックをかけてはならない。

Series-self (SS) : 白が連続して指定された手数を指し、それから黒が 1 手で白をメイト (あるいはステイルメイト) にするよう黒に強制される手順を求める。白は最終手を除いて、黒にチェックをかけてはならない。

<フェアリールール>

#C : メイトになった局面で、チェックをかけている駒は self-check にならないかぎり、色が変わる。

Annan Chess : 俗に言う「安南」ルール。縦の筋に同じ色の駒が重なっているとき、上の駒は下の駒の働きになる。ただし、1 段目に P が移動するのは禁手。3 段目の駒が P の働きをすることによるダブルステップはできない。3 段目の駒が P の働きをすることによるアンバサンは可。

AntiCirce : 駒を取るとき、取る駒 (K を含む) は初形位置に戻り、取られた駒は盤上から消える。取る駒の初形位置が何らかの駒 (取る駒と取られる駒を除く) によって占領されているときは、駒が取れない。細則は Circe に準じる。

AntiSuperCirce : 駒取りが起こると、取った駒が盤上の任意の位置に移動できる。移動しなくてもよい。8 段目に発生した P は任意の駒に成れ、その選択は取りを行った側が決められる。1 段目に発生した P は動けない。

BackHome : 初形位置に戻るような着手が存在するときは、それが selfcheck でないかぎり、必ずその手を指さなければならない。

Back-to-Back (BTB) : 詰将棋で言う背面。白の駒と黒の駒が同じファイルで直接に背中合わせになったとき、それぞれの性能が入れ替わる。最下段の P は動けない。BTB によって P の性能になっている駒がアンバサンで敵の P を取ることも可能。

Bicolores : K に自分の色の駒でヒモを付けたとき、それもチェックと見なすルール。従って、自分の K をそのような状態にする指し手は selfcheck の禁手となる。

Breton Adverse : 駒を取ったとき、取られた駒と同種の駒が (もしある場合) 1 つ、取られた側から消える。その駒が 1 つ以上ある場合は、取った側が選択できる。

Chameleon Chess : K と P 以外の駒は、

動くたびに $S \rightarrow B \rightarrow R \rightarrow Q \rightarrow S$ の順で種類が変わる。

Checkless Chess : チェックメイトにできるときを除いて、双方ともチェックをかけてはならない。

Circe : K 以外の取られた駒は初形位置に再生する。R および S の初形位置は取られた場所の色によって決まる。P の初形位置は取られた筋の 2 段目。フェアリー駒の初形位置は取られた筋の 8 段目。取られた駒の初形位置が何らかの駒によって占領されているときはその駒は通常通り盤上から消える。初形位置に戻った R はキャスリング可能。初形位置に戻った P は 2 歩進むことが可能。

Circe Double Agents : 取られた駒は色を変えて相手側の同種駒の初形位置に再生する。細則は Circe に準じる。

Circe Parrain : 地点 a で駒が取られたとき、取られた駒はその直後の指し手 (移動ベクトルを v とする) によって、地点 $a+v$ に再生する。再生場所が盤の外だったり、そこが別の駒によって占領されている場合は、再生しない。直後の指し手がキャスリングの場合、その移動ベクトルは K と R それぞれの移動ベクトルを足す (つまり 0-0 は 0 ベクトル)。1 段目に再生した P は 1 マスしか前に進めない。8 段目に P が再生すると、その瞬間に成る。細則は Circe に準じる。

Circe Turncoat : 取られた駒は通常の Circe の再生位置に、色を変えて再生する。

Duelist : Duellantenschach、または Single Combat ともいう。1 手前に動かした駒を、次の手番でも動かさねばならない。それが不可能なら動かす駒を自由に選べる。

Einstein Chess : K 以外の駒は、駒を取ると、その駒は $P \rightarrow S \rightarrow B \rightarrow R \rightarrow Q$ の順で種類が 1 ランク上がる (Q はそのまま)。逆に、駒を取らないで移動すると、その駒は $Q \rightarrow R \rightarrow B \rightarrow S \rightarrow P$ の順で種類が 1 ランク下がる (P はそのまま)。P は 8 段目に到

達しても成れない。1 段目に発生した P は double step および triple step ができ、そのとき 5、6 段目にいる敵の P はそれをアンパサンで取ることができる。

Equipollents Circe : 取られた駒は、取られた位置から取った駒の取りの動きのベクトルだけずれた地点に復活する。最上段に復活した P は成り駒として復活する。

Isardam : Madrasi の逆。すなわち、マドラシがかかるような着手は禁手。

Lortap : Patrol の反対。紐のついている駒は、駒を取ることができない。

Madrasi : 同種の駒によって取りをかけられている場合、その駒は動けない。

Masand : チェック（開き王手を除く）をかけたとき、その駒の利きにある敵味方の駒は、K を除いてすべて色が変化する。

Maximummer : 黒は可能な手の中で移動距離（升目の中心から、中心までの距離）が最大の手を指すとする条件（複数存在するときには、黒はそこから選択できる）。キャスリングの移動距離は K,R の移動距離を足したもの（0-0 は $2+2=4$ 、0-0-0 は $2+3=5$ ）。チェックおよびメイトの概念はオーソドックスと同じ。

Mirror Circe : 取られた駒は相手側の同種の駒の初形位置に再生する。細則は Circe に準じる。

Monocolor black pursuit : 黒は 1 手前に動かした駒がいたマス目に着手しなければならない。

Relegation : 2 列め（黒なら 7 列め）に戻った駒は P になる。

SAT : K を動かす（オーソドックスまたは追加フェアリー・ルールで）合法的な手が存在するとき、そのその K にチェックがかかっていると見なすルール。チェックメイトは、このチェックの概念を用いて定義される。

Sentinels : P 以外の駒を動かしたとき、その動く前の位置に同じ色の P が発生する。

1 段目と 8 段目には発生しない。また、盤上の片方の P の総数は 8 枚を越えない。この P の発生による局面の合法性は問わない。

Sentinels Pion Advers : P 以外の駒を動かしたとき、その動く前の位置に違う色の P が発生する。細則は Sentinels に準じる。

Sentinels Pion Neutre : P 以外の駒を動かしたとき、その動く前の位置に Neutral P が発生する。細則は Sentinels に準じる。

Take&Make : 駒を取ったとき、その駒は同時にそこから移動する手を指さなければならない。その移動する手は、取られた駒の動き（取られた側から見た動き）になる。P は 1 段目に移動できない。

Transmuted Kings : チェックをかけられた K は、その瞬間にチェックをかけた駒の働きをするというルール。特に断らない限り、このルールは双方の K に適用される。

Vogtländer Chess : K にチェックがかかっているとは、「敵の K に取りがかかっているとき」と定義したルール。

WhiteMaximummer : Maximummer の条件を黒ではなく白に適用したもの。

<フェアリー盤>

Vertical Cylinder : 左右がつながっている盤。例えば Ba1 は h2,g3... と動くことが出来る。

<フェアリー駒>

Berolina Pawn : 進むときは斜めに 1 マス、駒を取るときは直前にいる敵駒を取る、とした P。

Bishop-Lion : Lion を B の筋に限定した駒。
Chameleon : 動くたびに $S \rightarrow B \rightarrow R \rightarrow Q \rightarrow S$ の順で種類が変わる駒。

Eagle : Grasshopper と同様だが、着地点が飛び越した駒を中心に 90° ずれた 2 地点のいずれか。

Grasshopper : Q の筋で、ある駒を 1 つ飛

び越したその直後の地点に着地する駒。そこに相手の駒があれば取れる。

Grasshopper-2 : Grasshopper のように動くが、飛び越した 2 マス先に着地する駒。踏台の駒と着地点との間に駒が挟まっただけはならない。

Hurdle Color Changing Bishop-Lion : Hurdle Color Changing Lion を B の筋に限定した駒。

Hurdle Color Changing Lion : Lion と同じ動きをするが、飛び越えた駒の色を変える駒。

Imitator : 着手と同じ距離・方向に動き、空いているマスに着地する駒。盤上の駒を飛び越すことはできない。Imitator の着地点が塞がっていたり、盤上に出てしまうような着手は禁手。

Invisible : 盤上に存在するが、見えない駒。駒種と位置の両方が確定した瞬間に、その透明駒は透明性を失い普通駒となる。駒取りやメイトは、証明なしには主張できない。メイトとは、解答手順を成り立たせるようななどのような Invisible の代入に対しても、最終局面が通常のメイトになっていることを指す。

Leaper : S の様な動きの駒の総称。(x,y)-Leaper は駒の居る位置から縦横に (x,y) または (y,x) だけ離れた地点に着地する。間に駒があっても飛び越えられる。例えば S は (1,2)-Leaper。

Leo : Chinese piece の一つ。Q のように動くが、駒を取るときはその線上で駒の一つ飛び越してその先（直後でなくてもいい）にある駒を取る。

Lion : Q の筋で、ある駒を 1 つ飛び越したその先の任意の地点に着地する駒。そこに相手の駒があれば取れる。

Locust : Q の筋で、相手の駒を 1 枚飛び越して、その直後の地点に着地する駒。着地点は空いている必要があり、かつ飛び越された駒は取られて消える（取りなしで動くことは

できない）。

Neutral : 白および黒のどちらからも動かせる駒。取ったり取られたりすることもできる。n の記号で表し、nQ という風に表記する。nP は成ると Neutral 駒に成る。ただし、普通の P が Neutral 駒に成ることはできない。フェアリー駒が盤上に現れている場合は、nP はその Neutral フェアリー駒に成れる。

Nightrider : (1,2)-Rider。

Pao : Chinese piece の一つ。R のように動くが、駒を取るときはその線上で駒の一つ飛び越してその先（直後でなくてもいい）にある駒を取る。

Poseidon : Marine Piece の King。すなわち、普通に動くときは K で、隣接した駒を取るときには Locust であるような royal piece。

Rider : R や B など一定の方向にどこまでも進めるが駒にぶつかるとその先には進めない駒の総称。(x,y)-Rider は進める方向が (x,y)-Leaper の延長となる。例えば R は (0,1)-Rider。

Royal : K の代わりにする駒。チェックやメイトの概念を、K ではなく Royal 駒に適用する。

Sirene/Triton/Nereid : Marine pieces と呼ばれる駒のグループ。Q/R/B のように動くが、駒を取るときはそれぞれ Locust/Rook-Locust/Bishop-Locust の動きになる。

Sparrow : Grasshopper と同様だが、着地点が飛び越した駒を中心に 135° ずれた 2 地点のいずれか。

Undefined piece : 駒の位置だけがわかっているもの。

第 95 号解答成績

	D	E	H	S	F	R	U	計
Max	40	30	115	25	90	20	20	340
内田 昭	10		66	5	15		5	101
小畑 勉	10		42.5					52.5
九尾	20		98				5	123
黒川智記	10	5	15	5			15	50
塩見 亮	10	5	59		10		5	89
則内誠一郎	25	18	110	10	70	5	10	248
太刀岡 甫	20		103	5	65	5	20	218
中嶋正和	30	12	88	10	35		10	185
原岡 望	0		1				10	11
星野健司	29		115	15			20	179
水野勝久	10	0	21		10		10	51
宮嶋亮一	10							10
泰永泰二朗							5	5
吉田直嗣			80			3	15	98

第 95 号の解答者は 14 名でした。

成績は、1 位が則内誠一郎さんで、248 点（73%）。

微差で 2 位に続いたのが太刀岡甫さんの 218 点（62%）。

そして 3 位の中嶋正和さんが 185 点（53%）、4 位の星野健司さんが 179 点（51%）で、50% を超える好成績でした。

新規に入会した会員のご参加をお待ちしています。1 題だけの解答でも大歓迎です。

前号に掲載した第 94 号の解答成績で、塩見亮さん（ $D25 + H83.5 + F20 + U5 = 132.5$ 点）と原岡望さん（ $D15 + U5 = 20$ 点）が脱落していました。ここに謹んでお詫びして、訂正追加させていただきます。どうも申し訳ありませんでした。

謹告

Problem Paradise は今年の年末に発行する予定の号で、記念すべき 100 号を迎えます。

わたしは以前から、この 100 号を区切りにして、Problem Paradise の編集を降りるつもりをしていました。なにしろ、そのときは 70 歳になっていますし、肉体的な衰えもあります。

もちろん、どなたかに編集の任務を引き継いでいただければ、この雑誌も存続できるのですが、残念ながらそういう勇士は現れませんでした。となれば、廃刊もやむをえないのかな、とっていました。

そういう心づもりをしていたのですが、最近になって、少し心境が変化してきました。後に続いてくれる、期待できる新人が次々と現れて、そういう方々にプロブレムや詰将棋の世界の未来を託したい、と思ったのがきっかけで、100 号を越えてももうしばらく続けようかという気になりました。

ただし、これまでのように**印刷媒体で出すのは、100 号まで**とします。それ以降は、ウェブマガジンの形式を取るか、あるいは pdf で配布にするか、どちらかにします（まだ決定していません）。印刷媒体でしか読めない、という方にはまことに申し訳ありませんが、時代の変化ということもあり、お許しいただければと思います。

海外誌購読幹旋や、プロブレム本の販売など、JCPS としての活動は以前同様に続けていきます。100 号から先の会費をお納めいただいている会員については、返金の措置を取らせていただくことを考えていますが、詳細については未定ですので、これから会費を納入される方はそのような事情をお含みおきください。

ここで、2023 年から立ち上げを予定している、ウェブマガジン（あるいは Problem Paradise のダウンロード・サイト）のデザインを担当していただける方と、その管理を担当していただける方を募集します。そのあたりの知識に詳しい方は、きっと会員の中にも多いと想像しますので、そうした方々のご協力をぜひお願いしたいのです。これは Problem Paradise の存続にも関わりますので、志のある方からのお声かけをお待ちしています（若島までメールをお願いします）。

Notice

With the anniversary 100th issue, *Problem Paradise* will cease publication in print form. After that, we plan to publish it as a web magazine or in pdf format.